#45
ISSUE FORTY FIVE
JANUARY 2016

PRODUCED BY
TOSHIYA OHNO

F L J

FREE

FILTH × LIBERTINE × JUSTICE
MUSIC / FASHION
CULTURE / ART MAGAZINE
FROM TOKYO

SOUTHERN CALIFORNIA ISSUE

CHRISTIAN HOSOI

AOKI SKYTOP IV

SUPRA

SUPRAFOOTWEAR.COM

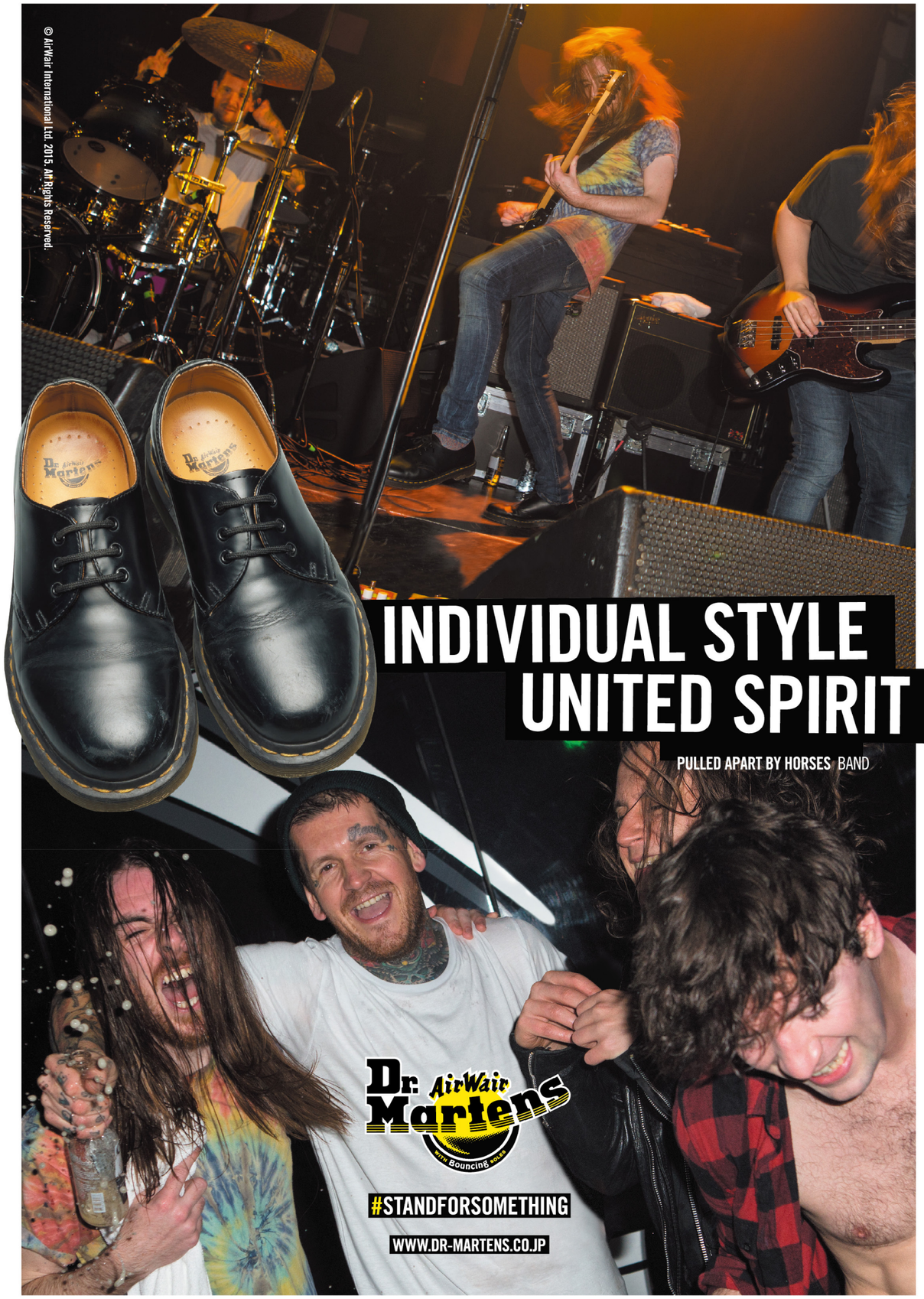
Hurley

phantom

JJF II

JOHN JOHN FLORENCE SIGNATURE BOARDSHORT
ENGINEERED FOR HEAVY CONDITIONS

JOHN JOHN FLORENCE



F L J CONTENTS

ISSUE 45 JANUARY 2016

MESSAGE

009 from Editor

EVENT

010 DR.MARTENS PRESENTS
#STANDFORSOMETHING LIVE,
STYLE OF TOKYO

SOUTHERN CALIFORNIA ISSUE

012 Christian Hosoi
020 Babylon
024 Erik Ellington
026 Saint Archer Brewing Company
028 Straight Outta Compton
032 Vince Staples
034 Tyler, the Creator
036 Kyle
038 The Paranoyds
040 H2O
042 Fury
044 Nails
046 Nardfest
048 Gary Tovar
052 Untame
054 Sand One
056 Be Street
058 Poster Child Prints
062 The Seventh Letter
066 Dennis Morris

FEATURES

070 Crystal Lake
074 SiM "THE TOUR 2015" FiNAL ONEMAN SHOW
at BUDOUKAN
086 REBIRTH OF HARDCORE PRIDE 2
088 Deviluse EXCLAIM episode1

IN EVERY ISSUE

078 STANCE <NEW!!>
080 REDLINE DISTRICT
082 The Natural Way
- NATURAL AMERICAN SPIRIT COLUMN
084 ANOTHER STATE OF MIND by Ryo (Crystal Lake)

ON THE COVER

今月の表紙はダブル表紙。

COVER 1 : Christian Hosoi
PHOTO : Zach Cordner

COVER 2 : Crystal Lake
PHOTO : Jesse Kojima

FREE DOWNLOAD
ISSUE 45 DIGITAL EDITION
ON FLJTOKYO.COM
FLJウェブサイトにて、ISSUE 45のデジタル・エディション、無料ダウンロード公開中！

STAFF CREDIT

EDITOR-IN-CHIEF
Toshiya Ohno

EDITOR / PHOTOGRAPHER
Jesse Kojima

EDITOR
Takuro Ueno

EDITORS AND CONTRIBUTORS
Osamu Ueda, E-da Akio, Shin Okishima, Kentaro Suzuki, Tadayuki Kato, Zeebra, Akihiro Namba, Tomoko Sakurai, Danny Boy O'Connor, Tim Armstrong

PHOTOGRAPHERS
217…NINA, Yuri Hasegawa, Zach Cordner

ART DIRECTOR
Masafumi Kotsuji

DESIGNERS
Eiji Yoshimura (SLOGAN DESIGN)

ADVERTISING DIRECTOR
Masayuki Hamashima (K.C.D)

ADVERTISING STAFF
Atsushi Yamazoe (RINEN & Company), Koichi Inoue (turquoise)

PUBLISHERS
Tatsuo Sugai, Shiro Akiyama

Copyright © 2015 DRAGON ZOE LLC.
FLJ ® is a registered trademark owned by DRAGON ZOE LLC. All rights reserved.
禁・無断転載　本誌に掲載されている写真、記事、イラスト等コンテンツの無断転載・複写を固く禁じます。

November 2016 issue, Volume 8, Number 3, ISSUE 45.
FLJ is published 6 times per year by DRAGON ZOE LLC.
3-2-13 Minami-Aoyama, Minato-ku, Tokyo 107-0062 Japan
〒 107-0062　東京都港区南青山 3-2-13
Tel 03-3408-2582 / Fax 03-3408-2562　www.FLJtokyo.com

ウェブもチェックよろしく！
Visit us online!　www.FLJtokyo.com

1987年の春に初めて取材で行った南カリフォルニア。当時僕は雑誌「Fine」で仕事を始めてまだ1年しか経っていなかったのだが、編集長がご褒美みたいな感じで一緒に連れて行ってくれたのだ。あれだけ興奮して武者震いが止まらなかった海外出張は今までにない。自分の好きな世界がそこにはすべてあったからだ。だから当然一発で好きになってしまった。

知り合いもいなければ、何のコネクションもない。編集長、フォトグラファー、僕の3人で、とりあえずサンタモニカからサンディエゴまで海沿いを車で運転して、サーフショップを訪ねながら取材やスナップをやろう、なんていうかなりゆるい取材だった。でも、その中でどうしても行きたいところがあった。ヴェニスだ。その時、某旅行会社のタイアップ取材だけ対応してもらった地元コーディネーターから、「ヴェニスは危険だから行ったらダメ」と言われて、「危険だからこそ行くんでしょ！」と、編集長を説得して向かったヴェニス。ビーチに行くと、スケーターたちがジャンプランプや壁を使ってセッションしている。そこでひと際目立っていたのがクリスチャン・ホソイだった。他にも、ジム・ミュアー、エリック・ドレッセン、アーロン・マレー、ジェシー・マルティネス、ブロック……。スゴいメンバーが揃っていた。翌日にはジムを訪ねてドッグタウンのウエアハウスに行って、エクセルのショーンやノー・マーシーのリック・クレイトンにも出会った。最初から僕は運が良かったのだと思う。あれから、なんだかんだ理由をつけてLAには行きまくり、そこを拠点にNYも攻め、ヨーロッパにも行った。そう、南カリフォルニアには僕にとって、取材の原点、好きなものの原点があるところなのだ。

そんなわけで、原点回帰じゃないけれど、8月の終わり、FAT WRECK CHORDSのサンフランシスコでの25周年フェスが終わった後、LAに向かった。ステイは2週間。昔のように、自分一人でLAに行って、自らアポを入れながら、その場その場でどんどん打ち合わせを入れたり、取材を進めてみたりした。ジャンルもいろいろ。世代もいろいろ。出会いを大切にしながらの取材だった。それこそクリスチャン・ホソイなんて20年振りの取材だったし、映画『ストレイト・アウタ・コンプトン』のタイミングも良かった。新しい友達もたくさんできた。誰もが輝くようなエネルギーを持っていた。この取材では得難い体験ができたと思う。詳しくは誌面を楽しんでみてください。

編集長　大野俊也

Toshiya Ohno Editor in Chief

In the spring of 1986, I took my very first trip to Southern California. I have just begun working for the Fine Magazine, and the trip was a small reward from my boss. It was truly exciting, and I simply couldn't stop shaking myself. All because everything I loved was in Southern California then. Soon as I arrived, I just loved it.

Still, I had no friends, no connections, nothing what so ever. My boss, photographer and I decided to take a coast line trip from Santa Monica to San Diego. Our plan was to visit surf shops and shoot some snap shots. Easy and relaxed, that was our first plan, but before we head out to San Diego, I wanted to check out this one town. Venice. "Venice is too dangerous to hang out". That's what we've heard from a local coordinator. "That's why I wanna go". I persuaded my boss that we should visit Venice. At the beach, we saw many skaters doing awesome sessions using jump ramps and walls. One of the most remarkable and outstanding one was Christian Hosoi. And of course, there were many others; Jim Miur, Eric Dressen, Aaron Murray, Jesse Martinez and Block. On the next day, we've made an appointment with Jim and got a chance to visit Dog Town warehouse. We've met Shaun Ross of Excel and Ric Clayton of No Mercy. I think I was very lucky from the beginning. Since then, I can't even remember how many times I visited LA and from there, I flew down to NY and many parts of Europe. Southern California got everything. Everything I love.

After I finished reporting the 25th anniversary festival of Fat Wreck Chords in San Francisco, I decided to head out to LA at the end of August. For 2 weeks, I wanted to go back to my roots. Just like the old days, I made my own schedule on daily basis, made appointments, joined meetings and did several interviews and reporting. I've met old friends and new friends. I did not see Christian Hosoi for nearly 20 years. The time was also right for the movie,"Straight Outta Compton". Everybody I met in LA was full of energy. It was a very precious experience. For more details, check out this great issue of FLJ. Peace!

Special thanks to:
Yuri Hasegawa, 217...NINA, Zach Cordner, Tomoko Sakurai and Garrett Gutierrez.

Dr. Martens AirWair WITH Bouncing SOLES

#STANDFORSOMETHING LIVE
STYLE OF TOKYO

2015.12.12.SAT 渋谷 WOMB
Dr.Martens が発信する音楽、ファッション、アート、カルチャーのフェス

ドクターマーチンでは、音楽／ファッション／アートをクロスオーバーしたイベントを 12 月 12 日（土）渋谷 WOMB にて開催。初開催となる今回は、渋谷 WOMB の 4 フロア全てを使用したフェスティバル・スタイルで、ライブを中心に、ダンスミュージックからロックまで幅広いジャンルの DJ プレイ、ライブペインティング、ドクターマーチンをカスタマイズ出来るバー形式のブース、イギリスを意識したフードブース & バーを同時に展開します。様々なジャンルがクロスオーバーしたサブカルチャーの世界観を若者に向けて発信するので乞うご期待！

WWW.DRMARTENSSTYLEOFTOKYO.COM

LIVE

Crossfaith

KOHH

FIRE BALL

SODA!

DJs

DJ SN-Z

HABANERO POSSE

LEF!!! CREW!!!

FAKE EYES PRODUCTION

BOWERY BOYS (tongpain & keiichi nitta)

DJ KYOKO

CLM(中田クルミ)

DJ YUI PEACOCK

SENTA (NUMB)

YOSHIYAxxx

Chocomoo

SHIN

MUSIC, FASHION, ART & CULTURE　各フロアのコンテンツを紹介！

1F
MUSIC
DJたちによるダンス・ミュージックのプレイ
出演アーティスト：DJ SN-Z / HABANERO POSSE / LEF!!! CREW!!! / FAKE EYES PRODUCTION / DJ YUI PEACOCK

ART
ライヴ・ペインティング
出演アーティスト：Chocomoo

Dr.Martensカスタマイズ・バー
出演アーティスト：SHIN

PHOTOSHOOT
撮影エリアにて、フェス入場者をオフィシャル・フォトグラファーが撮影

MERCHANDISE
出演アーティストのマーチャンダイス、フェスのオフィシャルTシャツを販売

2F
MUSIC
ロック、ヒップホップ、レゲエなど異ジャンルのトップ・アーティストによるライヴ
出演アーティスト：Crossfaith / KOHH / FIRE BALL / SODA!

3F
EAT & DRINK
バーではイギリス風の特別メニューを展開
イギリスで人気の食べもの、フィッシュ＆チップスを販売

4F
MUSIC
ロックDJによるロック・ラウンジ
出演アーティスト：BOWERY BOYS (tongpain & keiichi nitta) / DJ KYOKO / CLM（中田クルミ）/ SENTA (NUMB) / YOSHIYAxxx

DR.MARTENS PRESENTS #STANDFORSOMETHING LIVE, STYLE OF TOKYO
会場：WOMB　東京都渋谷区円山町2-16　03-5459-0039　www.womb.co.jp
日程：12月12日（土）
時間：開場 14:00　開演 15:00　終演 20:00　※中学生以下入場不可
主催：ドクターマーチン・エアウエアジャパン
企画製作：ドラゴンZOE、K.C.D

運営：シブヤテレビジョン
チケット前売料金：¥4,000／チケット当日料金：¥4,500
お問い合わせ：シブヤテレビジョン 03-5428-8793（12:00〜20:00）
公式ウェブサイト：WWW.DR-MARTENS.CO.JP
公式 Facebook：WWW.FACEBOOK.COM/drmartensJapan

WWW.DRMARTENSSTYLEOFTOKYO.COM

CHRISTIAN HOSOI

クリスチャン・ホソイ

今回の取材・撮影の待ち合わせ場所は、バンズ・オフ・ザ・ウォール・スケートパークだった

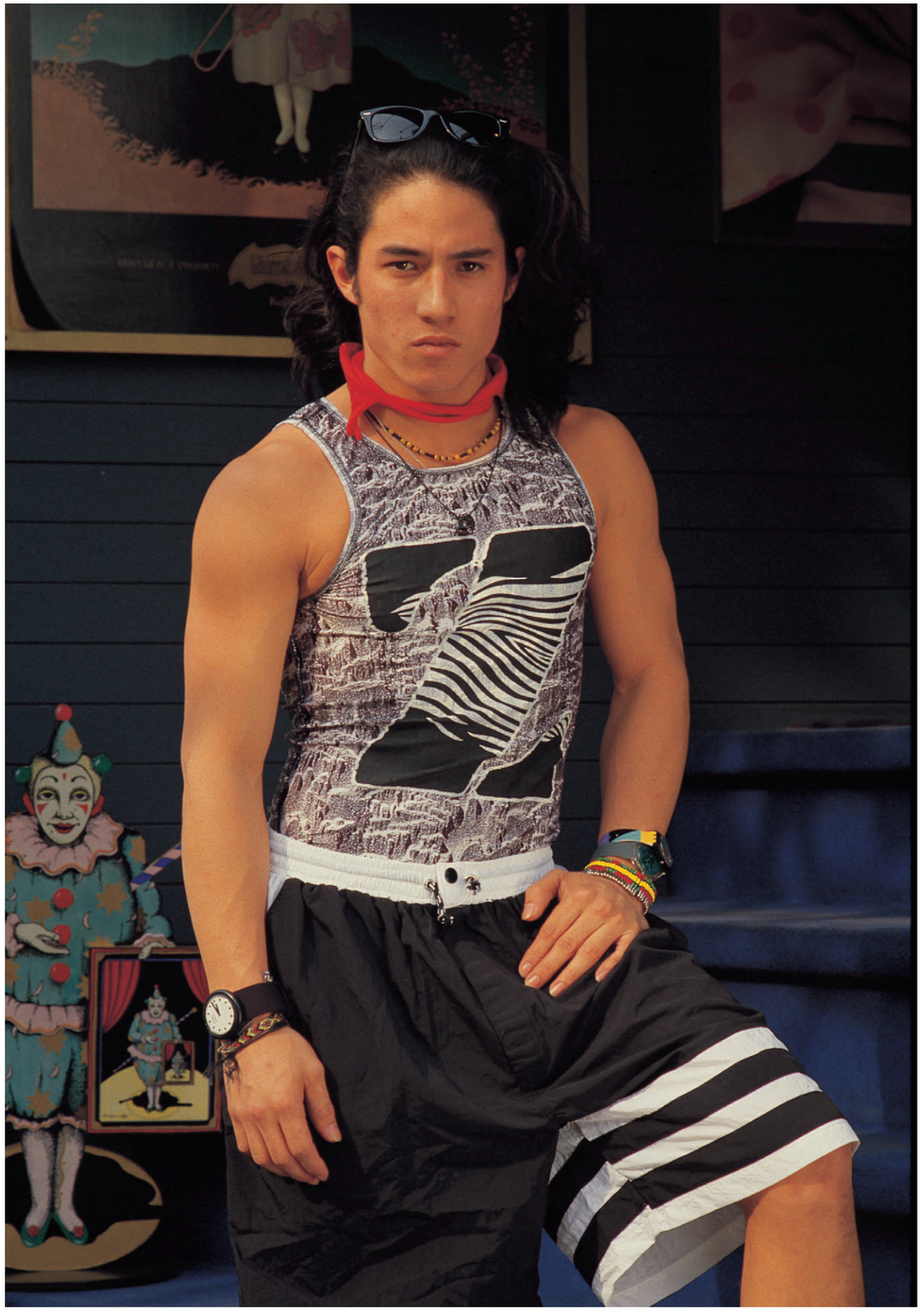
クリスチャンが語る二度目の人生のストーリー

’80 年代後半から始まった、今につながる流れの日本のスケートボード。その中で、海外のプロもたくさんいたけれど、何だかんだ言って一番人気があったのはクリスチャン・ホソイだった。彼はその人気絶頂期から、ドラッグに染まり、大きな挫折を味わっている。僕はクリスチャンが当時何を考え、今どう生まれ変わったのかを本人の口から聞きたかった。’80 年代に僕が取材した時の懐かしい写真を見ながら、クリスチャンの話を聞いてほしい。

PHOTO : Yoshio Higai, Tatsuya Okudaira, Taisuke Yokoyama

1988年の初来日の時

Fineでやったモデル撮影。衣装は当然JIMMY'Z



FLJ　クリスチャンは何度も日本に行ってるから、日本の思い出から話そうか。

クリスチャン　日本は楽しい思い出しかないね。当時のスケートボードはまるで電気を帯びたかのようにホットだった。日本はスゴい勢いでスケートボードを吸収していたし、みんな夢中だった。俺たちが行くともうロックスターみたいだったよ。まるで有名なバンドが街にやってきたみたいになって。俺の中に日本人の血が通ってることもあって、先祖からのつながりとか、国民性とか、そういうバックグラウンドもあったから、俺のことをより個人的にも好きになってくれてたのかもしれないね。俺の先祖から続いている日本のライフスタイルはアメリカのものとは全然違うし、俺はそれが大好きだった。日本人にとって当時のスケート・カルチャーは目新しいものだったと思う。西岡（昌典）が俺たちのガイドとなって、いろいろつなげてくれたよ。いろいろなところに連れていってくれた。西岡は'80年代初め、俺が子供の時からの知り合いなんだ。「日本に来たら好きになるよ」ってずっと言われてたんだ。それで初めて日本に行ったのが'88年かな。小さな頃から寿司を食べてたし、ハワイにもよく行ってた。だから日本に行くのは俺にとっては自然なことだった。それがスケートボードがビッグになると、コンテストに出場するようになって、それで日本にデモで行くようになって。最高だったな。日本にいるとホームって感じがしたしね。俺のことを日本のカルチャーの一部として温かく受け入れてくれたから。

FLJ　クリスチャンには半分日本人の血が流れてるっていうのもあったけど、スケートのデモの時だって技を見せるだけじゃなく、自分の仲間を連れていって、スケートの楽しさを伝えてくれたのも大きかったと思うんだ。

クリスチャン　人間性、カリスマ、ライフスタイルっていうのは当時の俺にとってはスゴく重要なことだったからね。それこそがスケートボードをやる理由になるし。それってアティテュードだし、そこには反逆精神もあるから。日本って本当は厳格だし、組織的。そこに俺が上半身裸で行って電車に乗ってたりする。でもやっちゃいけないことなんだよね（笑）。電車の中で音楽をかけたり、道のど真ん中でスケートしたりして。許されないことだよね（笑）。それでみんな俺のことを見て、「こいつ、日本人?!」「クレイジーだ」ってなる。だけど俺が誰なのかわかると、「ああ、あいつは日系アメリカ人か」って。でも日本はカルチャーにスゴく興味を持ってくれてたよ。

FLJ　クリスチャンは当時、日本のキッズに表現の自由っていうのを見せてくれてたと思うよ。

クリスチャン　日本のキッズの心を開いたと思う。たとえ日本にいても、クリエイティヴで、イマジネーションに溢れて、アーティスティックで、元気旺盛で、自由になれるって信じてほしかったからね。例えば、ブルース・リーって、あらゆる年齢層のアジア人にとってスーパーヒーローだったよね。香港からアメリカに渡って映画スターになって。今なお彼に及ぶような人は出てきていないよ。ジェット・リーは良い線いってるけどね。でも彼にはブルース・リーが持ってたカリスマがない。ブルース・リーは俺のアイドルだったから、小さい頃、スケートボードをやる前はマーシャル・アーツのマスターになりたかったんだ。だから、その時と同じ願望とファンタジーと夢をスケートボードに託したんだ。それでスケートボードが俺にとってのマーシャル・アーツになった。ブルース・リーができることなら俺にだってできるって信じてたよ。だから、俺にできることを日本にいるキッズが見たら、蒔いた種から芽が出るように、そのキッズもできるって信じるようになると思ったんだ。小さい頃からそれが俺のモチベーションだったし、インスピレーションにもなったし、楽観的なメンタリティにもつながった。「何だってできるんだ」って。だから俺は不可能に挑戦したよ。親父のアイヴァンにも感謝しているね。彼は純粋な日本人だ。良い時も悪い時も俺のことをサポートしてくれてた。そのおかげで俺は自分の目に見えない財産を守ることができたんだ。希望、可能性を与えてくれたからね。「おまえならできるよ」って。だから「俺にはできる」って思えたんだ。

FLJ　お父さんがメンターだったんだね。

クリスチャン　そうなんだ。それが俺が成功した秘訣の一つだ。そして今、俺は自分の子供たちに同じチャンスを与えている。俺には子供たちをヘルプすることもできるし、俺がよくわかっているのは、目標に向かう途中にはたくさんの障害が待ち受けてるってことなんだ。だから俺の子供たちには、俺にはなかった強みがある。俺の親父にそれはなかったから。でもそうやってものごとは上手く運ぶんだよ。学んで、賢くなって、歳を重ねて、トライして、知識と知恵に従って道を進んで、子供たち、次の世代につなげていくんだ。俺たちは過激な世代だったから、ドラッグもパーティもトライした。それで刑務所行きになったんだ。だけど、俺の子供たちは何が正しくて、何が間違っているのか、トライする前にわかるから。

FLJ　俺たちの世代は何でもトライしたからね。

クリスチャン　何でもトライした。俺たち、実験台みたいなもんだった。

FLJ　でもいろいろ経験してみると、今はトライしたことも良かったと思うんだ。すべてに意味があったと思うし、楽しかったし、多くの人たちを良い方向に導くことができたから。

クリスチャン　当時はあれがヒップだったし、最先端だったからね。俺たちがやってることをできなかったら、アウトだった。そういう時代の流れでもあったんだ。だけど人間も時代も進化する。だから俺たちも歳を重ねて、前よりも良い人間になったんだよ（笑）。今わかってることを当時もわかっていたら、心の痛みも少なくなってたろうし、名声も保てたと思うよ（笑）。でも大野が言うように、すべてのことには意味があるんだ。いろいろ経験したけど、今もまだ生き残っているし、俺たちが学んだことを次の世代に伝えて、俺たちの財産を残すことができると思うんだ。それが次の世代のためになってくれて、俺たちよりももっと先まで行ってくれたらと思うね。それが目標だね。俺の子供たちには俺よりも素晴らしい人間になってもらいたい。俺の子供たちだけじゃないな。新しい世

クライスト・エア

代だね。それはスケートボードのスキルのことだけじゃない。人間として、さらに次の世代が尊敬できるようなアンバサダー、メンター、お手本、リーダーになってほしいんだ。それが俺たちのやるべきことなんじゃないかな。

FLJ　だけど当時、楽しい思い出もたくさんあるよ。デモをやって、その後みんなでパーティに行ったよね。

クリスチャン　間違いなくパーティは得意だったね（笑）。今生き残れてるなんて運が良いよ。今こうして二人でインタビューできてるなんて運が良い。もし俺が生き残ってなかったら、大野が一人で俺の話をしてるんだろ（笑）。「ホソイの思い出って何だっけ？」って。でも俺は今ここにこうしているからね（笑）。

FLJ　クリスチャンは刑務所に行って、大変な時期を過ごして、精神的に大きく変わっていったと思うんだけど、その変化はどのようにして訪れたの？

クリスチャン　俺には今、新しいアイデンティティがあって、それはキリストなんだ。面白いことに、俺の名前は最初からクリスチャンだったんだ。ニックネームはクライスト。最初からクリスチャンで、今はクリスチャン（キリスト教徒）になったんだ。何ていう皮肉なんだろうね。いろいろあって、真実っていうものをやっと見出すことができたんだ。真実は俺たちみんなが知りたいものだ。最終的に、何がリアルで何がリアルじゃないのか。俺はすべてをわかったつもりでいたんだ。世界中を何百回もツアーで回って、日本に行って、みんな知り合いだと思って、すべてをわかったつもりになっていた。どん底の経験をする時って、自分の人生に目に見えないものを招いて起こるものなんだ。ドラッグにハマって、刑務所行きになるっていうどん底の経験をしてみて、自分自身に問いかけてみたんだ。一体俺に何が起きてるんだ？　俺の人生に何が起きてるんだ？　どうしてここにいるんだ？　刑務所の独房にいる時に、当時のガールフレンドで今は妻のジェニファーが、ドラッグをやめて教会に通い始めていた。ちょうど俺が逮捕された頃、彼女は俺に「ドラッグをやめて教会に行く」って言ってきたんだ。それで、俺が逮捕された後の彼女からの最初の電話で、俺は「10年くらうよ」って言ったら、彼女は「愛してるわ。神様を信じましょう」なんて言うから、「神様だって？　俺に必要なのは弁護士だ。保釈してもらわないと」って言ったんだ。「神様が救ってくれるわ。聖書を読んで」って言うから、これじゃ話にならないって思ったよ。でも今俺はここにいて、スピリチュアルな人間になって、神を信じている。神がいるのなら俺は天国にも行ける。何故なら俺は良い人間だから。ブルース・リーが好きだったから、道教の本、仏教の本は読んだんだ。それで座って、「俺が聖書を読むのか？　イエスのことなのか？」って思って。「ちょっと待てよ」。それで聖書が目の前にあった。生まれて初めてページを開いたよ。もう目からうろこが落ちたね。そこで、俺がクリエイティヴな人間として生まれてきたのにはちゃんとした理由があって、そこにはちゃんとした人生の目的があるってことを知ったんだ。だから刑務所に来たのも偶然ではなかったんだ。スケートボードをやって、トロフィーを獲得して、人生を生きて、死んでいく。そんな風に意味もなくただ存在しているわけじゃない。そこにはもっと意味があるんだ。突然、俺は神と遭遇したように思えたんだ。刑務所の独房にいる時のことだよ。そこから聖書をスゴい速さで読み始めて、2週間後には自分の人生をキリストに委ねることになったよ。妻に電話で話したよ。「イエスが俺の人生にやってきたよ。俺の罪を赦しに」って。その瞬間、すべての罪、すべての傷、すべての苦しみが俺の肩から消えていった。新しい人間に生まれ変わった気持ちになったんだ。刑務所の独房にいるのにさ。自分の人生の中で初めて自由になれたと思ったんだ。それで他の人たちを助けるという使命も負うことになった。自分が経験した愛を人々に伝えたいと思ったんだ。今、俺がやりたいことは他の人たちを助けることなんだ。前に「ドラッグはやめる。もうドラッグをやりたいとは思わない。ここから出してくれ」って言ってたんだけど、心の奥底では本気だったんだ。神もそのことをわかってたんだ。でも神は俺がすぐに出られないこともわかっていたんだ。刑務所には5年いたよ。だけど俺の心は変わった。それで自分の人生の旅に沿って生きるようになって、俺の人生は劇的に変化した。十字架を通して神が俺にしてくれたことを理解してるよ。でも俺は自分の人生、いつも十字架を身に付けていたんだ。意味まではわからなかったんだけどね。でも今はわかるよ。自由、勝利、救済を意味するんだ。聖書を読んでわかったんだけど、俺の行動が俺を救済したわけじゃないんだ。俺の行動だけでは充分じゃなかったから、神が救済してくれたんだ。それは何故か？　俺が永遠に続く人生に希望を抱いてたからなんだ。今の俺は15年間クリーンで、ドラッグもアルコールも全くやっていない。これって奇跡だよ。ドラッグもアルコールも昔は大得意だったのにさ（笑）。その道のリーダーだったのに。だけど、そういうものが何をもたらすのかがわかったんだ。俺を暗い道に引きずり下ろしただけさ。孤独な道だよ。お金、女の子、名声。そのすべてをバケツに入れ続けてたんだ。そのバケツは俺のハートみたいなもので、穴だらけだったから、どんどんこぼれていった。それであちこち間違った場所に行っては愛を探し続けていたんだ。だけど、神の愛を知った時、遂に満たされることになったんだ。心の安らぎを得ることができたんだよ。お金、女の子、雑誌の表紙、ギネスブック。そのどれも神の愛とは比べものにはならない。だけど知ってしまった後は、そのどれもに感謝の気持ちを持てるようになった。前は「俺はやったぜ。当然でしょ。俺はヤバいんだ」って感じだったよ。だけど、「これって俺がやったこと？　何て素晴らしいんだ！」っていう風に変わった。自分が何かを成し遂げたなんて素晴らしいと思えるようになったんだ。それに対して感謝の気持ち、謙遜の気持ちも生まれるようになった。どん底から神を見出し、俺は自由になれたんだよ。すべては愛の力なんだ。

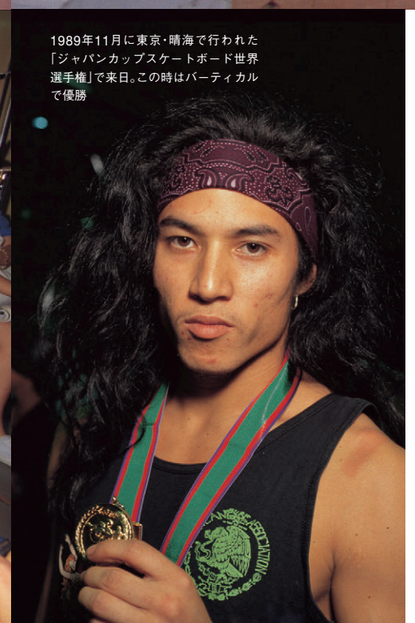
FLJ　人生のステージが変わったんだね。

クリスチャン　今は目的のある人生を歩んでい

1988年8月名古屋港の大会のストリートで優勝した時

三軒茶屋にあったロサンゼルス・クラブで

サージ・ヴェンチュラ、当時スラッシャーでライターをやってたキース、ケヴィン・スタップと。このまま確か芝浦GOLDに向かったはず



1989年11月に東京・晴海で行われた「ジャパンカップスケートボード世界選手権」で来日。この時はバーティカルで優勝

CHRISTIAN HOSOI

アーロン・マレイとのレアなダブル・エア。1988年7月名古屋港の大会後

るよ。だから、スゴく日本に行きたいね。日本の人たちを愛してるから。当時も日本の人たちからもらった愛は大好きだったよ。だけど今はその愛を返したいね。その方がもっと良い気持ちになるだろうしね。

FLJ　当時もたくさんの人に良い影響を与えてたし、今は自分がやってきたことを理解して感謝の気持ちを持ってるわけだから、強いよね。

クリスチャン　理解することによって俯瞰してものごとを見れるようになったんだ。俺はスケートボードの一部だし、日本の一部なんだ。カルチャー、ライフスタイル、音楽、ファッション、アートの一部なんだ。そのすべてがスケートボードを通してのものなんだ。美しいよ。それに、今もスケートボードをやってるし、それが俺の職業なんだ。ツアーにも行くし、VANSにもスポンサーをしてもらってるし、ビデオにも出演する。ヤバイよね。もうすぐ50歳になるんだけど、今もパフォーマンスをやるし、大会にも出る。当分やめるつもりもないしね。スケートボードはもう随分と歴史があるけれど、その進化にひと役買えたのは光栄に思っている。今はこのスポーツのアンバサダーにもなれてる。スケートボードを本物のカルチャーとして、リスペクトされるものとして長く続くように貢献していきたいね。ビジネスとしても、プロフェッショナルとしても、スポーツとしても、コンペティションとしても、チームとしても、ずっとクールなものであってほしい。それが俺たちのやるべきことだから。だから近い将来、日本からスケートのワールド・チャンピオンが出てくるのを見てみたいね。そしてこのことはちゃんと伝えたい。俺の人生のストーリーは、二度チャンスをもらえたっていうこと。それをみんなと共有できたら本望だよ。F

BABYLON

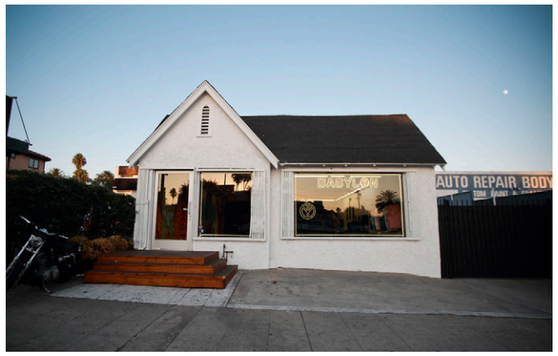
バビロン

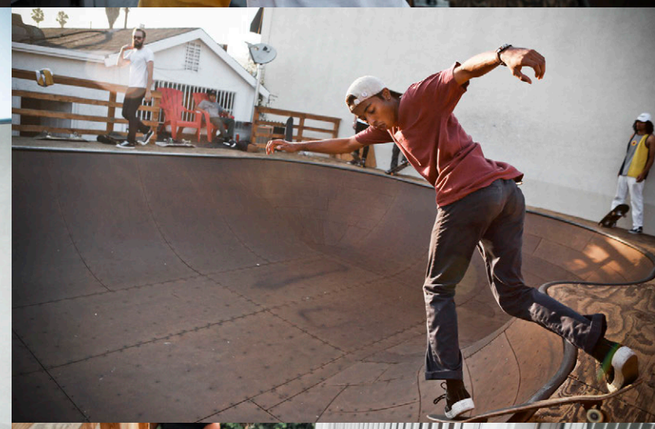
ショップの裏手にあるスケート・ボウルで。リー・スピールマン

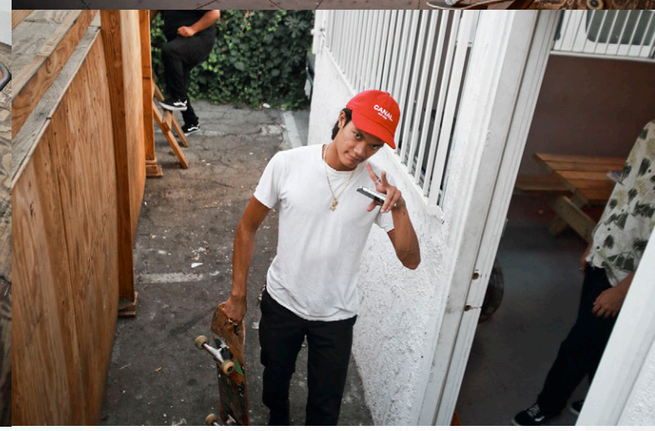
トラッシュ・トークのリー・スピールマンが手がけるカルチャー発信基地

サクラメントからLAに移り、タイラー・ザ・クリエイターのオッド・フューチャー・レコーズと契約したハードコア・バンド、トラッシュ・トーク。そのヴォーカリストである27歳のリー・スピールマンが今年4月にBabylonをオープン。このショップ／カルチャー発信基地は、リーのクリエイティヴ、カルチャーに対する思いを形にしたものだ。

PHOTO : 217...NINA







FLJ　そもそもBabylonを始めようと思ったアイデアは？

リー　昔、自分たちのウエアハウスがあって、そこで共同生活してたんだけど、友達のアーティストのNeckface、オス・ジェミオやバリー・マッギーにウエアハウスの至るところにアートを描いてもらったんだ。そこは、みんなが知りつつも実際にはなかなか行けないクラブハウスみたいな感じだった。俺たちはそこで音楽をレコーディングしたり、マーチャンダイスをデザインしたり、zineを作ったりと、何でもやっていた。Babylonは、そのウエアハウスの感じを店にしたものなんだ。Babylonのアイデアは、友達だけで作るんだけど、一般にも公開しているようなクラブハウス。自分たちの好きな本、アート、zine、服、スケートボード、音楽、そのすべてがあるところ。この3年間、トラッシュ・トークで年間250本ライヴをやってきて、今年の4月にBabylonをオープンしたんだ。ちょうどトラッシュ・トークのマーチャンダイスも人気が出てきて、バンドのマーチャンダイスだとは知らずにTシャツを着るような人も増えてきたところだった。カットソーを作ってちゃんとタグを付けて、よりブランドっぽい服作りをしたからね。Babylonはバンドとブランドを分けて、音楽とは別のクリエイティヴにしたかったんだ。だけど同じ美学とヴァイブスはあるし、Babylonのデザインもトラッシュ・トークのデザインもレコードのジャケットからフライヤーに至るまで同じ人間がやってる。クールなのは、ここには本やzineだけ買いに来る人もいるし、スケートだけしに来る人もいるってこと。LAにあるストリート系の店って、服を売るだけで、他には何も提供していないのが多い。服を買ったらなるべく早く出て行け！みたいな感じでさ。俺たちがやりたいのは、クラブハウスのようなヴァイブスだから、遊びに来てハングアウトするところ。Tシャツを買うお金がなくても問題ないし、半年後に買うかもしれないじゃん。だけど何かを得てほしいんだ。前に来た時に写真に興味のなかった子が、次来る時にはカメラに興味を示してたりするし、本に興味を持った子が次は「zineを作ったから置いてくれないか」って言ってきたりする。今は誰もがTシャツを作ってるから、ここでは違うものを提供したいんだ。もっとキッズのためになることをやりたいし、クリエイティヴなことをやりたい。俺たちはやっぱりパンク・ロックの世界で育ったからね。DIYでやるし、仲間も助ける。そういう考え方がパンクには深く根付いているから。だから服を売る以上のことをしたいんだ。仲間とハングアウトしたり、新しい仲間と知り合うようなカルチャー。そういうのが欠けてるなと思ったんだ。

FLJ　人とつながることによって新しいことを知る機会が生まれるわけだから。

リー　知る機会がないから好きじゃないっていう人が多いと思うんだ。zine、本、写真、グラフィティだってそう。知らないから好きじゃない。だから、何かを得て、そこから何かを生んで残していく、そんな機会を持てるような場所にしたかったんだ。実際にただあるだけじゃなくて、もっと心を込めたことをやりたいんだよね。お金の問題は大して気にしていないんだ。明日の家賃や食費は何とかなるもの。俺はお金で買えないものを提供したいんだよ。それが俺にとってはスゴく重要だから。俺はベイエリアで育って、ギルマンストリートのライヴに通うキッズだった。16歳でトラッシュ・トークでツアーに出て、自分が知ってることなんてパンク・ロックだけ。DIYしかなくて、自分たちでライヴのブッキング、マーチャンダイス作り、レコーディングを全部やってたよ。でも、そういうのが重要なことで、2015年の今は多くの人が忘れてしまっている。お金とかカッコ付けることよりも重要なことなのにさ。しかも、キッズがここに来れば自分のヒーローにも会えたりするんだよ。プロスケーターやミュージシャンとか。それってスゴくsickなことじゃん。

FLJ　Babylonはリーそのものでしょ？　パンクだけじゃなく、カルチャーのすべてが好きなわけだから。

リー　小さい時からグラフィティもやってたしね。生まれ育ったサクラメントからサンフランシスコまで電車で出かけていって。あれで人生が変わったね。学校が終わって、アムトラックに乗って、サンフランシスコ中タグングできるところを探し回って、そこでたくさん友達ができて、グラフィティからzine、写真につながっていった。一緒に育った友達はみんなスケーターで、タギングをやって、クールなものを作るのが好きなヤツらばかりだった。だから、Babylonのデザインに関しては、今起こっていることを落とし込んでいるんだ。ブランドの多くは特に何かを主張していないよね。売りたいだけだから。レザー・スカートが売れるから100着作ろうとか。みんな安全なところにいたいから、今の問題について語ろうとしない。俺の場合は、デザインで南部の旗を燃やしたり、スワスティカを刺したりするよ。何かしら議論ができるようなプラットフォームがある方がいいよ。俺が最初にハマったのはグラフィティ、パンク・ロック、スケートボードだったかたね。日本に行くのが大好きなのも、QP、SECT、WANTOがいるからっていうのもある。日本のグラフィティは注目してたし、初めて日本に行った時はブッ飛んだよ。「ファック！ 1995年のTwistのピースが残ってる！」とか思ったし。俺はカレッジとか行ってないし、高校も中退している。だけど、グラフィティ、パンク・ロックを通して、人との付き合い方、人生の価値を学んだ。学校なんて必要ないよ。成功している友達は大体が高校中退なんだ。みんな自分のクリエイティヴな道を進んだヤツらばかりだよ。

FLJ　Babylonをハイランド・アヴェニューに作った理由は？　ここで店をやろうって人はあまりいないでしょ？

リー　フェアファックスのシーンとは一線を画したかったからね。あと、この辺が好きなんだ。店も家みたいに見えるだろ。独立した敷地だから、壁を叩いたって誰にも聞こえないんだ。フェアファックスは人間関係がいろいろあるから関わりたくない。クールなヤツらだらけだろ。俺はクリエイティヴなことをやってハングアウトしたいだけなんだ。キッズももはやあそこには行かなくなったしね。スケートもダメだし、店でハングアウトするのもダメだから。だからキッズもこっちに移ってきてるよ。近くにインアンドアウト・バーガーもあるし、ハリウッド・ハイスクールもある。プロスケーターも寄ってくれる。ノースハリウッドの無名のスケーターとかもヤバかったりするし、エディ・ラテギがダガーズで来てくれたりもするんだ。俺は誰かの隣に作って安心したいとか思わなかったし、自分の城を作りたかったんだ。自分のことは他の誰よりも自分がわかってるからね。

FLJ　Babylonでアートをやってるアーティストの名前を挙げてもらえる？

リー　オープニング・ショーは、アリ・マルコポロ、サンディ・キム、ネイト・ウォルトン、デヴィン・トロイ・ストローター、デリック・パールマン、ジェリー・スーのグループ展だったんだ。一人のアーティストがBabylonをレペゼンするのは違うと思ったからね。今はNeckfaceの絵が描かれてるよ。店の中は毎月変わるんだ。ギャラリーとしてアーティストの作品を展示していきたいし、友達のショーケースにもしていきたいね。

FLJ　今、トラッシュ・トークの方はどうなの？

リー　10月にアフロパンクに出演して、今はニュー・アルバムに取り掛かっているよ。今はショップにフォーカスして、合間にライヴをやってる感じさ。前ほどライヴをやってないから変な感じさ。ライヴは俺たちの血肉となってるからね。

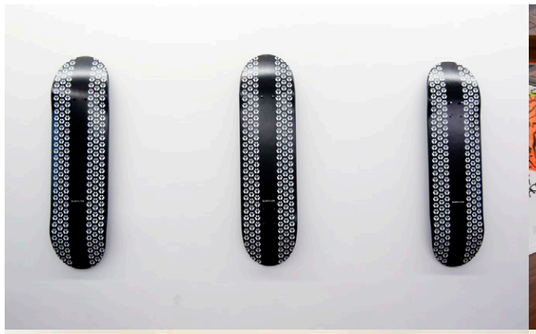
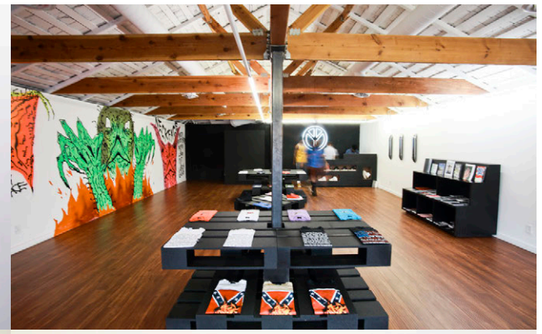
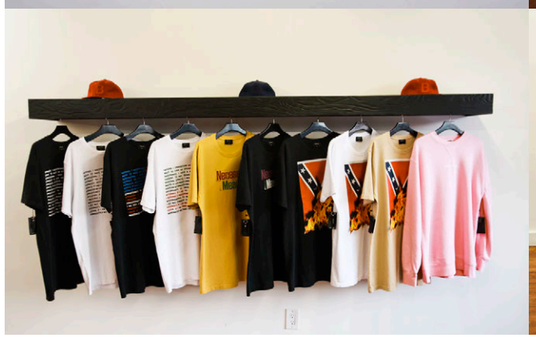
FLJ　最後に、日本でやりたいことがあるんでしょ？

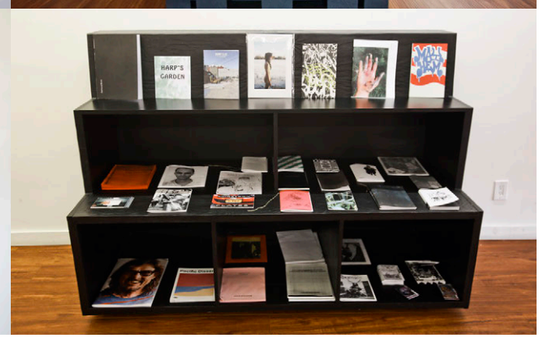
リー　日本でライヴがやりたいね。それでBabylonのポップアップ・ショップをやりたい。前回行った時よりも大人になったしね。日本のカルチャーをしっかりチェックしたいよ。

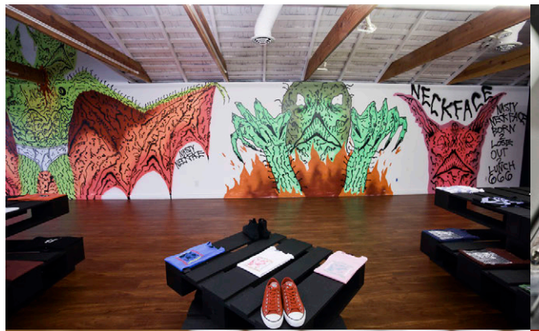
BABYLON

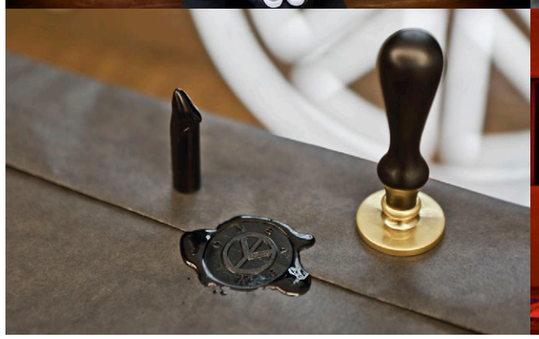
1320 Highland Ave, Hollywood, CA 90028 USA
TEL: 323-450-9584
営業時間：12:00〜19:00　無休

http://babylon.la







SOUTHERN CALIFORNIA ISSUE　PART ONE SURF SKATE　~~PART TWO HIP HOP~~　~~PART THREE PUNK HARDCORE~~　~~PART FOUR ART~~

ERIK ELLINGTON

エリック・エリントン

Bakerboys Distributionのウエアハウスにあるスケートパークで

Bakerboys、Deathwish を手がけるスケートボーダー

Bakerboys、Deathwish を手がけ、Supra の共同オーナーでもあるエリック・ エリントン。スケーターならではの「他とは違うカッコ良さ」の追求が彼の原動力なのだろう。ノース・ハリウッドにある Bakerboys のウエアハウスにエリックを訪ねて行った。

PHOTO : Yuri Hasegawa

FLJ　プロ・スケーターになったいきさつは？

エリック　アリゾナでシェーン・ハイル、スコット・コーバルマンと友達で、毎日みんなでスケートして、ビデオを撮影してたんだ。16歳の時にBalanceという会社を作ったんだけど、トイ・マシーンのジェイミー・トーマスからサンディエゴに来るよう誘われたんだ。ジェイミーはZeroを立ち上げて、俺たちはそこに入った。ハンティントン・ビーチからアンドリュー・レイノルズ、ジム・グレコがサンディエゴに来るようになって、一緒にスケートしていくうちに、俺たちもハンティントン・ビーチに移ることになった。そこでみんなでブランドをやろうっていう話になって、2000年にBakerを立ち上げたんだ。

FLJ　Bakerを立ち上げた時のアイデアは？

エリック　プロになって、自分のボードの会社を持って、シューズ会社を始め、ディストリビューションを始める。俺は常に前に走り続ける何かが必要って人間じゃないけれど、一つ何かを成し遂げたら、楽しみながら熱中して次の新しいことに取り掛かりたくなるんだ。それでBakerを立ち上げたんだけど、LAに移って、Supraにも関わって、Bakerboys Distributionを始めたんだ。

FLJ　Supraでは共同設立者だったわけだけど、関わるようになったいきさつは？

エリック　Supraを立ち上げたエンジェル・カバダから、TSAが終わった時にKR3Wに誘われて。それがけっこう上手くいったら、「シューズ会社は興味あるか？」って聞かれて、「もちろん」って答えて。Emericaを離れて、Supraの共同オーナーになった。そこにトム・ペニー、チャド・マスカ、ジム・グレコ、アントゥワン・ディクソンも加わって、今に至るわけさ。1年目はけっこうデザインに関わってたよ。

FLJ　Deathwishの立ち上げは？

エリック　『Baker 3』を出した後に、Bakerのチームが大きくなりすぎて、俺とジムは常にボードのグラフィックとか手がけてたから、自分たちのボード会社を作ろうってことになったんだ。二人でグラフィックをやるアーティストを見つけてきて、広告のレイアウトとか全部自分たちでやってるんだ。

FLJ　エリックの仕事を見ていると、スケート以外の音楽やアートというバックグラウンドを強く感じるんだけど。

エリック　若い頃から絵を描くのが好きだったし、建築家になりたいとも思ってた。いつも他とは違うことをやりたかったし、流行りものも好きじゃなかった。人と違う風に見せたいのがスケーターだしね。例えばシューズが3色あったら、違う色にしたいし。ハーフキャブとかシューレースを違う色にしたいし、スプレーでゴールドに塗ってみたい。それって個人レベルの革命だったと思うんだ。

FLJ　好きな音楽は？

エリック　'70年代のメロウなのを聴くね。ジョン・レノン、ジョージ・ハリソン、ニール・ヤング、レーナード・スキナードとか。1920年代スタイルの音楽も好きだね。今でもブラック・サバス、オジー・オズボーン、ガンズアンドローゼズも好きだよ。ちょうど昨日ママとアメーバでナット・キング・コールのレコードを買ったんだ。ママが誕生日祝いでアナログのレコード・プレイヤーを買ってくれたんだ。

FLJ　今興味のあることは？

エリック　今は人生が上手く回ってるから、すべてに興味があるね。Bakerboysはいろいろやってるから新作とか面白いよ。NYにも最近よく行ってるね。子供たちも学校に行くようになって、朝学校まで送っていくのも楽しい。今はお酒もやらないから二日酔いで時間を無駄にすることもなくなった。アパートの内装もやってるし、レコードのコレクションも始めた。女性ブランドのデザイナーともパートナーになっている。子供たちにも最高の人間に育ってほしいし、毎日何かしらアドバイスを与えている。だからすべてにインスピレーションをもらってるよ。

FLJ　長年やってこれた秘訣は？

エリック　意図的にやることを減らして本能的にやることを増やしたからかな。スケートボードも好きだし、クリエイティヴな仕事も好きだしね。自分の好きなものが見つかって、情熱がある限り、ギブアップしたらいけないんだ。好きなことをやればハッピーだしね。ハッピーだったらお金も付いてくると思うんだ。そしたら他人にもいい感じで接することができるし、他人からもいいものが返ってきて、ドアは自然と開くんだよね。俺は友達ともビジネスをできてるし、最高に幸せだよ。F

Sonik Distribution
http://sonik-dist.com

BAKERBOYS DISTRIBUTION
http://bakerboysdist.com

DEATHWISH
www.deathwishskateboards.com

SAINT ARCHER BREWING COMPANY

セイント・アーチャー・ブリュワリー

セイント・アーチャー・ブリュワリーのボス、ジョシュ・ランドンを工場に訪ねていきました

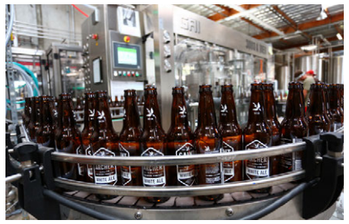
サーファー、スケーター、スノーボーダーが始めたクラフトビール

今や100以上のブランドを誇り、クラフト・ビールのメッカとなったサンディエゴ。その中でも群を抜いて人気のセイント・アーチャーは、サーファー、スケーター、スノーボーダーたちがオーナーとアンバサダーを務めるユニークなビールだ。2013年4月15日にスタートして以来、急成長を遂げたその理由に迫ってみたい。

PHOTO : Zach Cordner

「一生懸命仕事して、ビールを飲みましょう」。いいメッセージだね〜

ベストセラーのブロンド。クアーズライト好きにおススメ

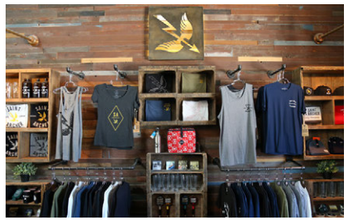


ボトル入りビールも充実

人気のため2年前からどんどん増えてるタンク

アンバサダーにして出資者でもあるスケーターたち。
左から、ブライアン・ハーマン、ブライアン“スラッシュ”ハンセン、マイキー・テイラー

樽詰めもあります



アパレルも充実。地元のアパレル・ショップでも大人気

工場見学者も注ぎたてが飲めます

FLJ　自分のビールを作ろうと思ったきっかけは？

ジョシュ　俺は実は映像制作の人で、映像のキャリアはテイラー・スティールのところで始めたんだ。最初に手がけたのはテイラー・ノックスの『ARC』で、アル・メリックの『Flow』他いくつか映画を作ってる。ある時、テイラー・ノックスにハードリカーのブランドに投資してアンバサダーにならないかっていうオファーがあって、それを俺に相談してきたんで、「合わないんじゃないかな」って言って。でもビールだったら合うんじゃないかな？　何故俺たち発信のビールってないんだろう？　何故誰もビールをやらないんだろう？と思うようになって。今となっては理由がわかるけどね。全然簡単じゃないから（笑）。それで、テイラーと映画を作りながら、「俺たちでビール会社を始めよう」ってなったんだ。友達のP・ロッド（ポール・ロドリゲス）にも声をかけてね。俺たちみんなでビールを飲むのが大好きだったから、自分たちでビールを作ろうって思っただけさ。作るヤツ見つけてカマそうぜ！って（笑）。

FLJ　一番大変だったのは？

ジョシュ　一番大変だったのは資金集めだね。そんなことやったことなかったから、友達に出資を頼んだんだ。サーファー、スケーター、スノーボーダーがオーナーをやってるビール・ブランドなんてなかったし、それが一番のアイデアだと思ったんだ。だけどみんなに説明するのは大変だった。エリック・コストンとかジャック・フリーストーン、パット・ムーアは人からお金をもらう方に慣れてたから、彼らにしてみればもう異国の話みたいなものだった。

FLJ　ビール自体の味はどういう風に考えていったの？

ジョシュ　地元のヴェンチュラの友達はみんなブルーカラーだから、お金だってそんなに使えない。だから彼らが毎日飲めるようなものにしたかった。ディナーの時に一杯、仕事の後に二杯って感じで。ブロンド、ペール・エール、IPAの3つが最も一般的なビールで、それがクラフト・ビールを飲む人の95％が飲むビールなんだ。ブロンドはヴェンチュラでみんなが飲んでるクアーズライトを完全に参考にしたね。我が社のベストセラーなんだ。

FLJ　ビール作りの要であるブリュワーはどのように見つけていったの？

ジョシュ　雑誌「オール・アバウト・ビアー」に30歳以下の全国ベスト・ブリュワー30が掲載されてて、イーガ・ミヤシロが1位で、キム・ルッツが3位だった。イーガとキムは共通の友達がいたし、この二人は親友だったから、まずMauiで働いてたキムに話したんだ。そしたら彼女が、「イーガにも話しましょう」って言うから、イーガにも話した。彼はPizza Portで働いててありとあらゆる賞のメダルを持っていた。そんな最高の二人を引っ張れたから最高のビールができたんだ。

FLJ　今後の予定は？

ジョシュ　Girl Skateboardsとのコラボでホッピー・ピルスナーを1年前に作って、今や我が社の人気商品となってる。新商品では、キムがネルソン・IPLを完成させた。あと、ブライアン・ハーマンのビデオを作ったよ。「WORK HARD & DRINK BEER」の新しいシリーズでは、アンドリュー・ジョーンズと彼のバンド、Hy Brazilが出演しているよ。F

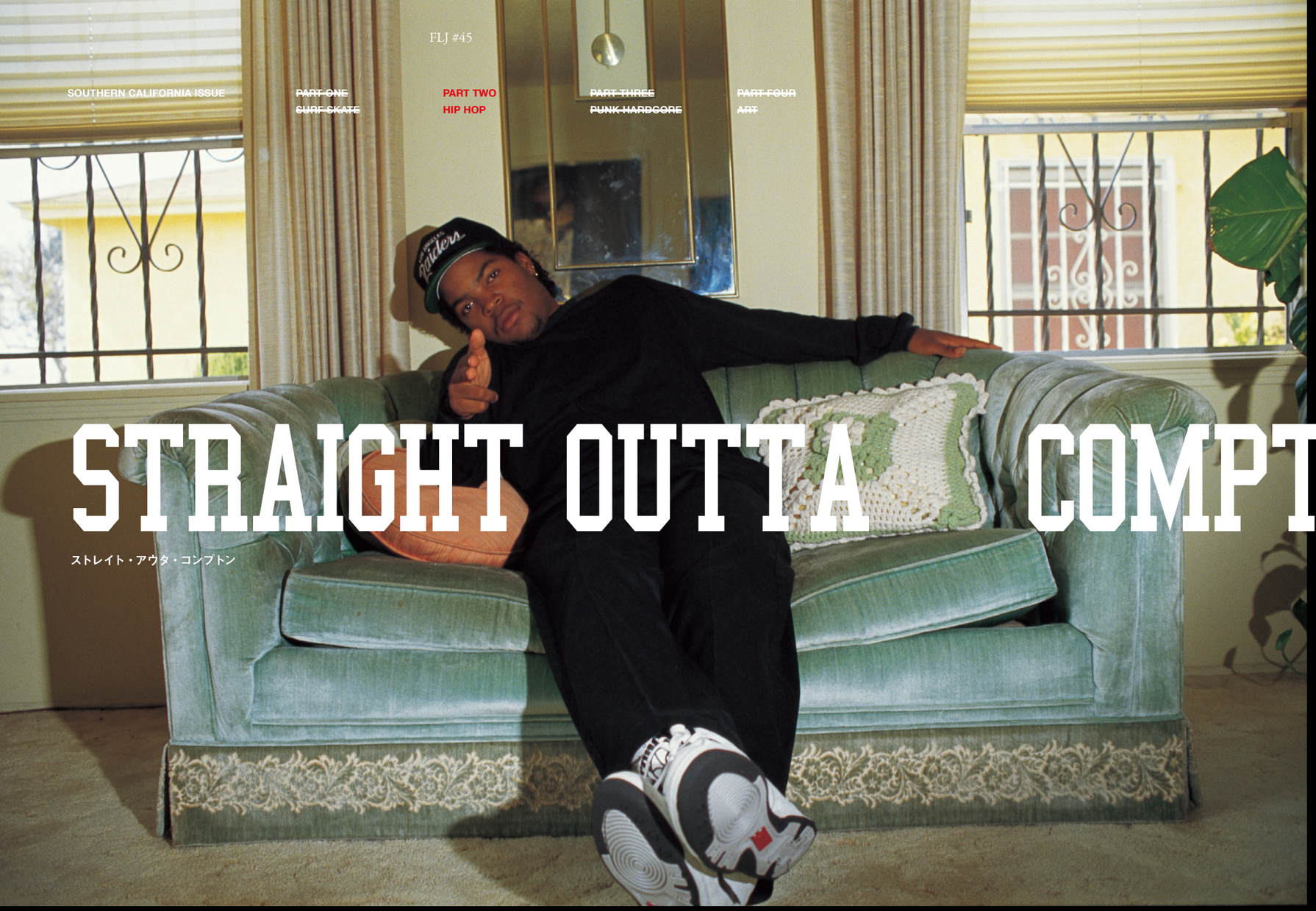
www.saintarcherbrewery.com

BEER INFO :

NAGANO TRADING COM　045-315-5458
Antenna America　045-315-5228

APPAREL INFO :

ストレートシックス　03-5784-3123
www.stance.com



STRAIGHT OUTTA COMPTON

ストレイト・アウタ・コンプトン

ドクター・ドレー、アイス・キューブも在籍した伝説のヒップホップ・グループ、N.W.A. のストーリーを描いた映画

今年 8 月にアメリカで公開されると、全米興行収入 3 週連続 NO.1 を記録した話題の映画。1980 年代のカリフォルニア・コンプトンから生まれた伝説的ギャングスタ・ヒップホップ・グループ、N.W.A. の結成から成功、挫折、名声の代償、権力や偏見との戦い、裏切り、再生を描いたこの映画が遂に日本でも公開される。FLJ では、1989 年 9 月、N.W.A. のメンバーであった当時 20 歳のアイス・キューブをコンプトンにあるママの家に訪ねて行った時の蔵出しインタビューと、映画監督を務めたF・ゲイリー・グレイの独占インタビューをお届けする。

PHOTO : Toshi Sawajiri (P28, P29)

アイス・キューブ（N.W.A.）

──N.W.A.のラップはこれまでのラップとは全く違う新しいものだと思うんだけど、どういうアイデアでラップをやってるの？

アイス・キューブ　俺たちのラップはハードで、本当のストリートを歌っている。そこが他とは全く違うところじゃないかな。もしストリートで誰かが撃たているのを見たら、俺たちはそのまま詳しく教えてやるんだ。よくラップで、遠回しに何かを言ったり、ドラッグに対して「No」とか言ったりするヤツがいるんだけど、俺たちは違う。キッズは何が良くて何が悪いのかわかってるんだ。ドラッグが悪いってことだってわかってるんだよ。それをラップで何か言ったからって、変わるわけじゃないし、ラップはそれほど影響を与えるような音楽じゃないから。

──でも一方で、KRS・ワンのように「ストップ・ザ・バイオレンス」ムーブメントを起こしている人もいるよね。

アイス・キューブ　ストップ・ザ・バイオレンス・ムーブメントはクールだよ。でも俺たちはムーブメントをやってるわけじゃない。キッズは親、教師、警察といった周りの大人たちからいつも説教されてるんだ。だから、彼らが遊びに来た時くらい俺は説教なんかしたくないんだ。ものごとは起こるべくして起こるし、バイオレンスっていうのは随分昔からあるものなんだ。誰がどんなレコードで何をラップしようと、みんな結局好き勝手にやってるんだから。

──「Fuck the Police」はどういう歌？

アイス・キューブ　「Fuck the Police」は、例えば俺が若くて黒人だったら、着ている服を見ただけで、警察は俺のことをドラッグを売ったり、ギャングのメンバーをやってたりって決めつけるんだ。俺の頭を地面に押しつけて、両手を後ろに回して、俺の車をメチャクチャにして、勝手にチケットを切る。それって絶対に不公平だろ。もし俺が白人だったら、あいつらはそんなことはしないさ。白人はギャングに入ってないからね。あいつら、バッジをつけて、銃を持ってるからって、何でも自由にできると思ってるんだ。俺が若いから自分の権利を知らないと思って、どんな扱いをしても平気だと思ってる。だから、俺はそれに反対してこの曲を歌ってるんだよ。

──「Gangsta Gangsta」は？

アイス・キューブ　何故ギャングが多くて、何故ギャングをやるのか？　誰もそれに答えてないよね。映画の『カラーズ』はまあ完璧でないにしても、リアルでクールな映画だよ。だけど、あれは警察の目線で見たギャングなんだ。だから俺たちはギャングの目線で見たものをみんなに教えてやるんだ。

──「Express Yourself」は？

アイス・キューブ　人から聞いたことやどこかで読んだことを何でも信じちゃダメだっていう歌だよ。自分の目で確かめなくちゃいけない。自分自身でいろ！ってことだよ。

──「A Bitch Iz a Bitch」なんて曲もあるけど。

アイス・キューブ　女性全部がビッチってわけじゃないんだよ（笑）。良い女もいるし、悪い女もいる。俺は良い女はリスペクトしてるよ。だけど、お金のために男を求める女がいるだろ。それはビッチだって言ってるだけのことさ。

──今、N.W.A.はどのような活動をしてるの？

アイス・キューブ　ちょうどアメリカでの40ヶ所のツアーを終わったところなんだ。大成功を収めたよ。11月にはイギリスでの記者会見も控えている。今の時点では未定だけど、ミニ・ツアーの可能性もあるね。

──今後はどのような活動をしていきたい？

アイス・キューブ　次のアルバムでは、LAのことを知らない人の手を引いて、散歩に連れていくような感じで、みんなに「ここでこういうことが起こってるんだ」っていうことを伝えてわかってもらいたいね。でもLAで起こってるようなことは、例えばアイオワみたいなところでも起こることなんだ。ごく身近に誰にでも起きるようなこと。そういう内容にしたいと思ってるよ。それにラップはもう世界中の人たちのものであって、黒人のためだけのものではないからね。F

F・ゲイリー・グレイ（映画監督）

FLJ　『ストレイト・アウタ・コンプトン』が完成した後、何を思いましたか？

F・ゲイリー　何だか一周して元に戻ったような感覚があるね。俺は映画監督としてアイス・キューブとは最初から一緒に仕事をしているわけだから。今N.W.A.のストーリーを伝えることによって、自分の人生の映画を作ったような感覚になってるよ。同じ時代にLAで生まれ育ったわけだから、N.W.A.がラップした内容は俺が実際に経験、目撃したことそのままだからね。

FLJ　N.W.A.が出てきた時はリアルタイムで聴いてました？

F・ゲイリー　もちろん。俺自身育ったのはサウスセントラルで、住んでるところもキューブの家から数マイル離れたところだった。生まれもキューブと同じ1969年だ。N.W.A.を聴いた時、自分の家の近くで起こってることをビデオで観ているような気がしたね。スゴく衝撃的だったし、新鮮だった。まるで自分のために作られた音楽みたいに思ったよ。

FLJ　映画の上映時間が150分にも関わらず、長く感じるどころか、もっともっと、何度も観たいと思いましたね。

F・ゲイリー　俺も150分っていう時間は気にならなかったね。あの映画には人生のレッスン、涙、笑いのすべてが詰まっている。あれでも随分削ったシーンがあるんだよ。最初のカットは3時間くらいあったんだ。もっといろんなストーリーも見せたかったから、この前ディレクターズ・カットも完成させたばかりなんだ。そこには妻やガールフレンドといった女性たちとのストーリーも盛り込まれているよ。

FLJ　この映画が素晴らしいと思ったのは、当時のいろんなことを思い出しただけでなく、新たな発見もありましたけど、何よりも良かったのは、普遍的な人間ドラマとして笑ったり、泣いたりできたことですね。

F・ゲイリー　ヒップホップ・ミュージックというジャンルを扱ってる映画ではあるんだけど、基本は人間ドラマにしたかったんだよ。N.W.A.は表面的にはスゴく過激なグループだったんだけど、実際には真剣な音楽をやろうとしている真剣な若者たちで、彼らが成功し、挫折し、また這い上がっていく話を描いているからね。そこには友情もあるし、ユーモアもあるし。

FLJ　ユーモアも重要ですよね。

F・ゲイリー　当時コンプトンのような戦場みたいなところに住んでいたら、生き残ることしか考えられないのが普通なんだ。だけど一方で面白いこともたくさんあったんだ。N.W.A.の曲の中にもそういうユーモアはあるしね。ひどいところに住んでたら、もう笑うしかないんだよ。俺の最初の映画『フライデー』でも、そういう面白かった部分を描いているしね。

FLJ　アイス・キューブから最初にこの映画の話が来た時はどう思いましたか？

F・ゲイリー　2011年に電話がかかってきたんだよ。「Yo、N.W.A.の映画を作るぜ」って。正直ちょっとナーバスになったね。あらゆる意味で間違いないものを作らないといけないから。それにストーリーがたくさんあるから、果たして2時間の枠に収まるのか？って思ったよ。だけど脚本を読んでみると、ああしたい、こうしたいっていうアイデアが出てきて、そこからもう始まっていった感じだね。

FLJ　アイス・キューブとは昔どのようにして出会ったのですか？

F・ゲイリー　ラッパーのWCのビデオを撮ってる時に撮影セットで出会ったんだ。キューブはそのビデオで客演していて、それがきっかけでキューブの「True To The Game」「Today Was A Good Day」の監督もやることになったんだ。そこから映画『フライデー』を一緒に作るようになったんだ。

FLJ　『ストレイト・アウタ・コンプトン』を作るに当たって一番重要だったことは？

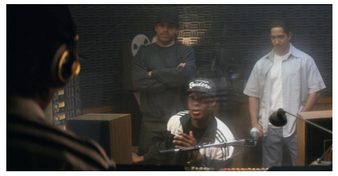
F・ゲイリー　この映画のテーマは自分がよく知ってることだったんだけど、知らないことを映画にする時と同じくらいの感覚でディテールを調べたし、映画のキャラクターとなった人たち全員にインタビューも行った。イージー・Eの未亡人、トミカ・ウッズ・ライトとは何日も話したし、ドクター・ドレーとは彼の船に乗って2週間一緒にバケーションを過ごした。そこで気になっていたディテールはすべて聞き出したよ。どこで揉めたのか？　スタジオはどんな感じだったのか？　好きな食べ物は何だったのか？ってね。

FLJ　この映画で印象的なのは、N.W.A.のメンバーがスタジオ前で警察による不当な取り調べを受けて屈辱を味わうシーンで、それが曲「Fuck the Police」の元のアイデアになったわけですが、30年近く経った今また、警察による暴力は現在進行形のリアルなトピックですよね。

F・ゲイリー　うちの近所でもああいうことはしょっちゅう起こっていたよ。もう何度見たかわからない。’80年代はギャング同士の抗争もあったし、住んでいる地域と年齢だけで、ギャングのメンバーじゃなくても、警察にとってはギャングと同じようなものだったんだ。警察は俺たちのことを調べて情報を得ようとしてたんだ。もちろん地元をくまなく調べようと網を張ってるわけだから、罪もないヤツらまで警察からひどい目に遭っていたわけなんだ。最近になってまた警察による暴力が新聞のヘッドラインに出てきたのは偶然だね。映画の制作に取り掛かった4年前にはなかったことなんだ。悲しいことだよね。「昔はひどかった」って言えたら良かったのに。でも、警察だって良い人もいれば悪い人もいる。この映画で描きたかったのは、当時コンプトンで何が起こっていたのかってことなんだ。しかも、この映画を作る時に思ったのは、オーセンティックなフッド・ムービーを作ることだった。『グッドフェローズ』『タクシードライバー』『ミーン・ストリート』のような映画さ。映画の冒頭のシーンはイージー・Eがクラック・ハウスでドラッグの取引をやってるところから始まるんだけど、観客がその場にいるような感覚、それこそタバコの煙や酒の匂いまで伝わってくるようなものにしたかったんだ。最初から観客のハートをつかめるようにね。そこにLAPDが戦車みたいなヤツでクラック・ハウスに突っ込んでいくわけだから、観客もいきなりスゴい緊張感の中に引き込まれるよね。もう最初から普通の伝記映画じゃないってわかるだろ。それに、ここでは当時のLAのリアルを描いているわけだから、その空気感も出したかった。クラック・コカインとAKみたいな軍隊レベルの武器が入ってきたことによって、フッドの環境が急激に変わってしまった時代なんだ。N.W.A.が何故ああいうリリックを書いたのか？　そこにはそういう社会的背景があったんだ。

FLJ　遂に日本でも公開が決まりましたが、日本のオーディエンスに何かメッセージがあればお願いいたします。

F・ゲイリー　もし夢を抱いている人であれば、是非この映画を観てほしいね。この映画には夢があるから。ガレージでDJやミックスをやってた若者は億万長者になったし、スクールバスでリリックを書いてた若者はハリウッドの重要人物になった。彼らはカレッジにも行ってないし、ただ自分のいた危険で貧しい環境から抜け出したかっただけなんだ。そして常に正しい道を選ぼうとして前に進んでいった。この映画にあるのはそういうストーリーなんだ。ドクター・ドレーがいなかったらエミネムは存在しなかったし、N.W.A.がなかったらドレーも存在しないよ。そんな風にリストを作っていったら、2パック、スヌープ・ドッグ、50セント、ケンドリック・ラマーとどんどん出てくるはずさ。N.W.A.はその歴史の積み重ねの本当の始まりのストーリーでもあるんだ。F



『ストレイト・アウタ・コンプトン』

STORY:
1986年、アメリカの最も危険な街コンプトンで暴力的なほどにストレートなリリックをハードコアなビートに乗せ、日常に感じるフラストレーションと怒りを吐き出していた5人の若者たち。彼らにとって音楽と才能は最大の武器だった。リリック、プライド、虚勢、そして才能という武器で戦う反逆者たちが、自分たちを抑圧する権力者たちに立ち向かい、世界で最も危険なグループといわれたN.W.A.を結成するに至った真実の物語を描いた作品だ。誰も声をあげることのなかった真実と、スラム街での日常を赤裸々に語った彼らの叫びは社会現象を巻き起こし、今なお多くのアーティストらに影響を与え続けている。

監督：F・ゲイリー・グレイ
脚本：ジョナサン・ハーマン、アンドレア・ベルロフ
出演：オシェア・ジャクソン・Jr、コーリー・ホーキンス、ジェイソン・ミッチェル、ポール・ジアマッティ他

2015／アメリカ／147分／シネスコ／デジタル／
原題：Straight Outta Compton
配給：シンカ、パルコ ユニバーサル映画

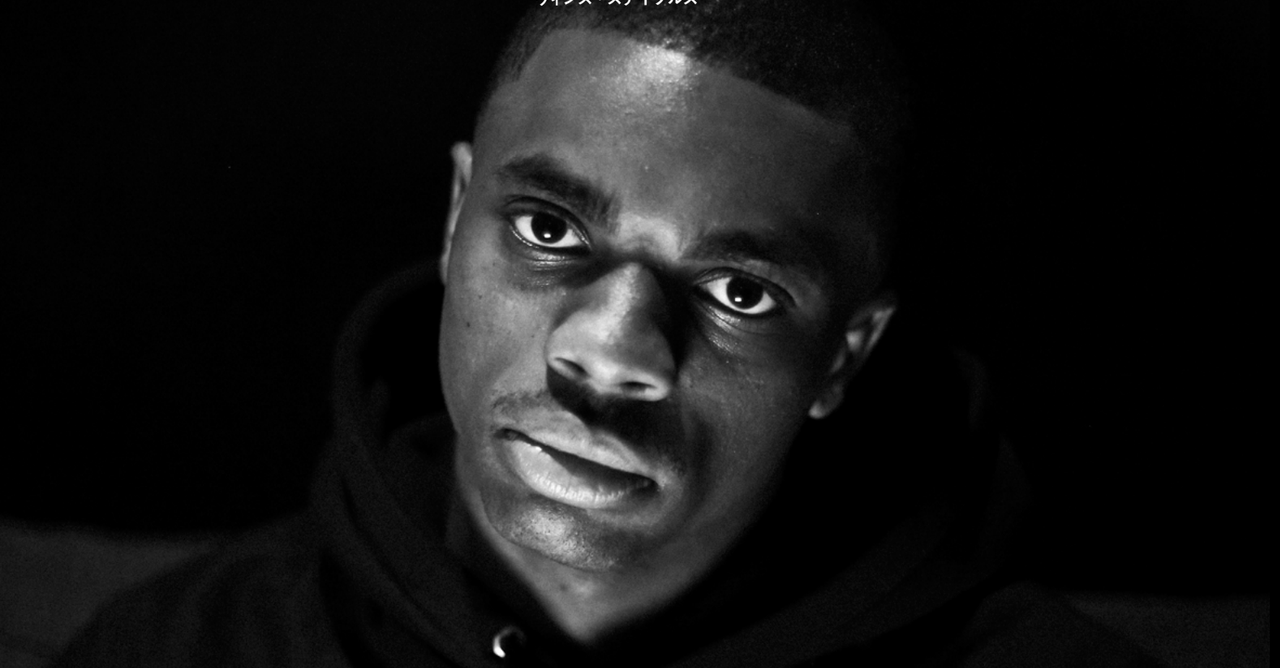
12月19日（土）渋谷シネクイント、新宿バルト9ほか全国公開
©2015 UNIVERSAL STUDIOS

www.straightouttacompton.com
Facebook: https://www.facebook.com/SOCmovie.jp/
Twitter: @SOC_movie

SOUTHERN CALIFORNIA ISSUE　~~PART ONE~~ ~~SURF SKATE~~　PART TWO HIP HOP　~~PART THREE~~ ~~PUNK HARDCORE~~　~~PART FOUR~~ ~~ART~~

VINCE STAPLES

ヴィンス・ステイプルズ



1st アルバムが話題の 22 歳、ロングビーチ出身のラッパー

オッド・フューチャー、マック・ミラー、スクールボーイ・Q、アブ・ソウルともつながりがあるロングビーチ出身の若手ラッパー、ヴィンス・ステイプルズ。2013 年に Def Jam Recordings とメジャー契約し、No I.D. のバックアップを受けて、2014 年にリリースしたミックステープ『Shyne Coldchain Vol 2』が話題となり、コモンの ARTium ／ Def Jam 移籍作『Nobody's Smiling』からのリード・シングル「Kingdom」にも客演。6 月 30 日には ARTium ／ Def Jam から待望のデビュー・アルバム『Summertime '06』をリリース。ダークでヒリヒリしたトラックをバックに、高めの乾いた声で淡々と呪術的にラップする世界観は、他の誰とも似ていない。

PHOTO : N217…NINA

FLJ　ヒップホップにハマったきっかけは？

ヴィンス　俺が生まれ育ったところは常にヒップホップがあったし、俺たちの地元の人たちにとってはカルチャーの一部だったから、ヒップホップにハマったのはごく自然な成り行きだったね。自分でも音楽をやるようになって、同じような情熱を持ったヤツらが周りにも出てきたんだ。最初は趣味だったのがだんだんマジになった感じだね。アメリカの都会で黒人として育ったら、ヒップホップは最初から身についてるカルチャーだと思う。

FLJ　特に好きなスタイルとか好きなラッパーはいた？

ヴィンス　キッズの頃は50セントとか、ザ・ゲーム、スヌープ・ドッグ辺りが好きなラッパーだった。

FLJ　カリフォルニアのロングビーチで生まれ育ったことからの影響については？

ヴィンス　生まれ育った土地からの影響はもちろん大きいよ。それは俺に多様性をもたらしたね。音楽もそうだし、そこに住む人間もそう。黒人、白人、アジア人、メキシコ人、いろんな人間が同じところにいる。もちろん富によって住むところは分断されてるけどね。

FLJ　ラッパーになる前はどういうライフスタイルを経験してきたの？

ヴィンス　残念ながらトラブルばかりだったよ。子供ながらに何をしたら正しくて、何をしたら間違っているのか判断できるスマートさは持っていたけれど、ヤバい状況もあった。トラブルの方が俺を追っかけてくる感じだった。

FLJ　でもそういう若い頃の経験をラップにも反映させるわけだよね。

ヴィンス　音楽はそうあるべきだと思うんだ。俺は瞬間を捉えて曲を作ってるんだ。それこそが人生だからね。人生は経験と冒険の連続だ。自分が何を経験して、何をやっているのか。それを俺は聴き手と共有しているわけだし、聴き手が感じることっていうのは、その共有を通してのものの見方なんだ。そこを表現したものがヒップホップ・ミュージックだと思うんだ。俺が作りたいのは、自分たちの持ってるものの最高のヴァージョンなんだ。長い月日を経ても聴けるようなものにしたいし、そういう音楽を作っていきたいと思ってる。まあでも、俺は自意識に目覚めてるわけじゃないし、俺の曲がどこから来たのかは聴き手の解釈にまかせるよ。俺が作りたい音楽は俺が必要としているものでもあるんだ。

FLJ　真剣にラッパーになろうと思ったきっかけは？

ヴィンス　自分のファミリーの面倒を見なきゃいけないからね。俺は自分がどういう人間なのかちゃんと理解した上で自分という人間を確立したかったし、トラブルの多い状況から抜け出したかった。それが大きかったね。

FLJ　リリックはどのような書き方をするの？

ヴィンス　ビートを聴いたらとにかくリリックを書くっていうスタイルだね。書く時は書くけど、書けない時は書けない。基準は良いか悪いかだけだね。

FLJ　デビュー・アルバム『Summertime '06』ではスゴい進化を遂げていると思うんだけど、自分ではその背景、理由をどう考えている？

ヴィンス　自分の音楽のキャリアの最初となるアルバムだし、今回は人生とかものごとのターニング・ポイントだと思うんだ。だから、俺は自分の人生の中のある時点で自分が何を感じ取っているのかを伝えたかった。そこにはエネルギーがあるし、そこからのインスピレーションを引き出したかった。俺は自分の周りにあるものを見る時、ネガティヴな見方をしてることもあると思う。それに、言葉によって自分がどんな人間なのかっていうのは誤解されやすいと思うんだ。だから何を表現しているかというと、もっとムードって感じだね。パワーとか恐怖とか。

FLJ　2006年のサマータイムと2015年のサマータイムの違いは？

ヴィンス　かなり違うよ。でも変化したわけじゃなくて、ずっと年月が積み重なって続いている感じなんだ。たくさんの人も死んだよ。だけど俺っていう人間が変わることはないね。

FLJ　No I.D.がほぼプロデュースを手がけているんだけど、そこはどのようにしてつながったの？

ヴィンス　Def Jam Recordingsに入った時、ちょうどNo I.D.は最初から取り組めるような若手のラッパーを探していたんだ。だからNo I.D.は俺のことをスゴく助けてくれたよ。自分の運命を決めていくクリエイティヴなプロセスって感じだった。

FLJ　アルバム・ジャケットのアートワークがジョイ・ディヴィジョンを彷彿とさせるんだけど。

ヴィンス　“Love will tear us apart”だからね。俺の生まれ育ったところでは愛しかないから。ジョイ・ディヴィジョンは大好きなグループの一つだよ。

FLJ　「Senorita」のビデオなんだけど、登場する人がどんどん死んでいって、最後に幸せそうな典型的な白人のアメリカのファミリーがそれを窓から見ている。かなりダークで衝撃的な内容だと思うんだ。

ヴィンス　貧しい人たちを描いたんだよ。それが俺たちの人生だからね。「Buckwild」とか「Jersey Shore」とかリアリティ番組を観てると、貧しい人たちがエンターテインメントになってるのがわかるよ。動物園で動物を見ている感覚と同じさ。観ている人たちには理解できないと思うんだ。そこに人間らしさという視点がないとね。

FLJ　ラップを通して伝えたいことは？

ヴィンス　自分でもまだわからないんだ。自分というものを表現したいし、そこで自分をちゃんと描いていきたいんだ。

FLJ　デビュー・アルバムを出した今、今後は何をやっていきたい？

ヴィンス　人生はどんどん展開していくし、止まりたくないね。心配なんてなしに、自分がその時その時作れる音楽を作っていきたいね。

FLJ　アーティストとしての夢、野望は？

ヴィンス　音楽を作り続けていくこと。ファミリーを守ること。自分の音楽が何であれ発信し続けることじゃないかな。

『Summertime '06』

(ARTium Recordings / Def Jam Recordings)
6/30リリースの最新アルバム

TYLER, THE CREATOR

タイラー・ザ・クリエイター

過去の別人格キャラを捨て、現在の自分自身についてのアルバムを作ったLAのラッパー

今年4月に2年振りの新作『チェリー・ボム』をリリースしたタイラー・ザ・クリエイター。そのアルバムのワールド・ツアーの最終日として、9月14日（月）に恵比寿のLIQUIDROOMで一夜限りの単独来日公演を行ったタイラーをライヴ前にキャッチ。軍団オッド・フューチャーのリーダー時代から、音楽、スケート、ファッション、映像、メディアと自由自在に表現してきたライラー。『チェリー・ボム』リリースに合わせてデジタル・アプリ「GOLF MEDIA」と「GOLF MAGAZINE」もローンチしている。24歳にして早くもアーティストとしての自我を自覚して新たなステージに入ったタイラーはこれからがますます楽しみなのだ。

FLJ　今回のワールド・ツアーはどんな感じ？

タイラー　最高だよ。ライヴで新しいことをやってみたりしてるんだけど、お客さんの反応もスゴく良いしね。

FLJ　今日がツアーの最終日だよね？

タイラー　そうだね。残念だけどもう終わっちゃうね。それに、日本にはもう少し滞在したかったんだけど、明日には発たないといけないんだ。でもまた必ず戻って来るよ。

FLJ　今回のワールド・ツアーのファイナルの場所を日本に選んだ理由は何かあったの？

タイラー　特にはなくて、自然とそうなった感じだね。

FLJ　ワールド・ツアーのファイナルを日本でやってくれるのは、日本のファンにとってはスゴくうれしいことだよ。

タイラー　日本は俺の大好きな場所の一つだし、カルチャーもクールだしね。それに、日本人はみんなおしゃれにスゴく気を遣ってる。最高だよ。

FLJ　原宿のセレクトショップ、STADIUMでGOLF WANGのポップアップ・ストアをやっていたけど、反響はどうだった？

タイラー　スゴく良かったよ。実際にお店に行って、俺自身も楽しめたし、スゴく良い機会になったね。

FLJ　11月14日のタイラー主催のフェス「CAMP FLOG GNAW CARNIVAL」にはスヌープ・ドッグが出るけど、どんなきっかけで彼が出演することになったの？

タイラー　俺はずっと昔から彼の大ファンなんだ。だから、CAMP FLOG GNAW CARNIVALのステージでプレイしてくれたら最高にクールだと思ってオファーしたんだ。もちろん他にも出演してくれるアーティストはたくさんいて、それは俺の仲間が選んだアーティストだったりするんだけど、スヌープ・ドッグに関しては完全に俺のチョイスだね。今年のCAMP FLOG GNAW CARNIVALは絶対にヤバくなるよ。

FLJ　最新アルバムの『Cherry Bomb』に収録されている「Fucking Young」のMVをチェックしたんだけど、今までみたいに別人格のキャラクター（Wolf Haley、Dr TC、Sam、Ace the Creator、Tron Catなど）が全く登場してないよね。これはタイラーが他の誰かではなくて、自分自身についての曲を作りたかったってことなのかな？

タイラー　まさにその通り！　今回のアルバムでは、他のキャラクターではなく、自分自身についての曲を書きたかったんだ。

FLJ　その「Fucking Young」のMVの最後で曲がアルバム1曲目の「Deathcamp」に変わると、タイラーは映画館から追い出されて、その映画館の看板には「TRIPLE FEATURE」（3作上映中）と出てるよね。これは過去3枚のアルバムを意味しているのかな？

タイラー　その通り。よく気づいたね。

FLJ　ということは、最新アルバムの『Cherry Bomb』は新しい始まりを意味しているの？

タイラー　どうだろう。俺はただ新しいヤバいものを作りたかっただけなんだ。でも、スゴくお気に入りのアルバムになったよ。

FLJ　タイラーはLAに住んでるんだよね？

タイラー　そうだね。俺はLA出身で、他の場所には住めないと思ってる。LAは最高だよ。

FLJ　LAやカリフォルニアという土地は、タイラーの音楽に影響を与えてる？

タイラー　そんなことはないと思う。どこ出身だろうとプレイする音楽に変わりはないと思うし、LA以外のところに住んだとしても俺の音楽は変わらないよ。

FLJ　タイラーの今後の目標は？

タイラー　健康でいることだね。

FLJ　シンプルだね。

タイラー　でもね。これが一番重要なことだと思うよ。健康でいることができないと何もできないからね。F

『チェリー・ボム』

（ソニー）
4月リリースの最新アルバム

http://golfwang.com

SOUTHERN CALIFORNIA ISSUE　~~PART ONE SURF SKATE~~　PART TWO HIP HOP　~~PART THREE PUNK HARDCORE~~　~~PART FOUR ART~~

KYLE

カイル

ナードでカラフル、ユーモアたっぷりの新キャラ・ラッパー

aka “Super Duper Kyle”、aka “King Wavyaka” ことカイル。LA からまたユニークなキャラとスタイルを持ったラッパーが登場した。ナードなんだけどカラフルでユーモアもたっぷり。チャンス・ザ・ラッパーの「Wanna Be Cool」の客演や自身の曲「Just A Picture ft. Kehlani」で注目を浴び、10 月 2 日にチャンス・ザ・ラッパー、Yuna をゲストに迎えた 2nd アルバム『SMYLE』をリリースしたカイル。かなりのおもろキャラでした。

PHOTO : 217...NINA

FLJ　新曲「Really? Yeah!」、ヤバいね。ヒット確実だと思ったよ。

カイル　ありがとう。「Really? Really? Yeah!」ってね。スゴいエネルギーがあるし、あんな曲は今までにない。スゴく盛り上がるしね。「Really? Yeah!」は昔の自分の曲のラインから来てるんだ。会話の中で自分がしょっちゅうその言葉を使ってるのにも気づいて。自分のキャラを1曲の中で表現したかったんだ。けっこうナードな話し方を自分のフロウに落とし込んでね。部屋の中で僕が叫んでる曲さ。この曲を聴いて物を破壊してほしいね。

FLJ　ヒップホップにハマったきっかけは？

カイル　最初にラップの曲を聴いたのは10歳の時だよ。僕は黒人と白人のミックスで、ママが白人だから最初はロックを聴いてた。ラップの存在も知らないまま、親父と初めて一緒にハングアウトしてたら、親父がオール・ダーティー・バスタードの「Got Your Money」をかけてね。「何だこれ?! これヤバいよ！」ってなって。そこからヒップホップに目覚めたんだ。

FLJ　好きだったラッパーは？

カイル　ジェイダキスが神だったね。それで自分でラップも始めたんだけど、最初は銃とか虐殺のこととか歌ってた（笑）。12歳の時。今の自分を作る意味で影響を受けたのがキッド・カディで、そこから銀行強盗のキャラじゃなくなった（笑）。

FLJ　マジでラッパーになろうと思ったのは？

カイル　マジでラッパーになろうと思ったのはローラースケート場のラップバトルからだね。17歳で自分でレコーディング機材を揃えて、デモを作ったり、YouTubeでフリースタイル映像をアップしたりしたんだ。フェイスブックで地元の高校行ってるヤツ全員に友達追加リクエストをして、高校に行ってCDをみんなに手渡してたよ。ある時にYouTubeでドレイクのカヴァーをやったら、再生数が100万回になって。そこでファンベースができたね。当時はK.I.D.って名前でやってたんだけど、カイルは本名なんだ。グループ名は最初からSuper Duper。スーパーヒーローを信じて何でもできると思ってるヤツらの集まりさ。

FLJ　チャンス・ザ・ラッパーとのつながりは？

カイル　チャンスは友達で、かなり前に彼が僕の地元に来た時に、僕がオープニングを務めたんだ。僕のステージをチャンスのプロデューサーのネイト・フォックスが観てて、一緒にやろうって言ってくれたんだ。ネイトといろいろやるようになってチャンスとも親しくなった。

FLJ　チャンスと共演した「Wanna Be Cool」でカイルの名も上がったしね。

カイル　あの曲だけ客演が決まってなかったんだ。チャンスのアルバムはほぼ完成していたんだけど。トピックがナードだったから、「これは僕の曲だ」って思ったんだ。それで曲にラップ乗せて送ったら気に入ってもらって。そこにさらにビッグ・ショーンも加わったから僕は泣いたよ。

FLJ　カイルのナードっぷりはどのくらい？（笑）

カイル　限りなくナードだよ（笑）。マンガも好きだし、女性と恋愛したこともなかった。「Wanna Be Cool」は本当にピッタリだった。人に認められたくて頑張ってカッコ良くなる必要なんてないし、自分らしくあればいいんだから。いろんな人が共感してくれたよ。どっちにしろ、高校でクールだったヤツって卒業後5年もするとあまりパッとしないからね（笑）。だから僕はクールじゃなくて光栄だよ。アメリカの青春映画でもナードと体育会系との対決で最後にはナードが勝つからね（笑）。

FLJ　マンガも好きなんだ?!

カイル　「幽☆遊☆白書」「ドラゴンボールZ」「THE ビッグオー」は素晴らしいね。アニメを観るために夜遅くまで起きてたよ。だから日本に行くのは夢だね。僕の叔父さんの奥さんが日本人なんだ。毎晩アニメ観て、日本人のいとこから日本の話を聞いてたから想像が膨らむ一方で。

FLJ　アルバム『SMYLE』は、ジャケットのアートワークが口だけで金歯が光ってるのがウケるんだけど。

カイル　ジャケットのアートワークのメッセージとしては、「人生がすっぱいレモンを与えるのなら、黄金に変えなさい」ってことだね。欠点のある人なんて本当はいないと信じてるんだ。人それぞれにこの世に生まれてきた意味がある。永遠の歴史があって、ある日宇宙がビッグバンで破壊するか、宇宙人に征服される日が来るまで、この世に自分という人間は一人しかいないんだ。だから自分を恥じる必要なんてないんだ。見た目についてもそうだよ。神様がこういうルックスにしたのも意味があるから。だから僕はそのことについて笑顔でいたい（SMYLE）んだ。良い時もあれば悪い時もある。だから取り乱したりしないで笑顔でいた方がいい。

FLJ　女性との付き合いをリリックにしたものが多いよね。

カイル　6年付き合ってる彼女がいるんだ。その彼女からインスピレーションをもらって曲を作ることが多いんだ。良い曲も悪い曲もね。I hate you and I love youさ（笑）。良い時も悪い時もあるのはみんな同じでしょ。だから多くの人にも共感できる内容だと思うんだ。

FLJ　彼女はカイルのリリックを気に入ってるの？

カイル　彼女は僕にとって最大の批評家だよ。僕の曲を最低だって言ったのも彼女が最初だ（笑）。彼女は僕の人生のエグゼクティヴ・プロデューサーだね。

FLJ　ラップのスタイルとフロウが独特なのは？

カイル　昔、銃のことを歌わなくなった時に、「Lemonade」っていう曲を出したんだけど、そこに面白いラインを入れて、自分でも笑ってしまったんだ。その時に今までで一番自分らしい曲になったなと思って。それで誰かに話しかけるような感じでラップするようになったんだ。速いペースで言葉遊びをするような感じで会話する感じでラップするんだ。

FLJ　今後の予定は？

カイル　『SMYLE』ツアーに出るよ。いろんな国に行ってみたいね。なるべくいろんなところに行って、いろんな人たちと出会って、世の中を笑顔（SMYLE）でいっぱいにしたいね。F

『Smyle』

（Indie-Pop Music）
10/2リリースのニュー・アルバム

http://superduperkyle.com

SOUTHERN CALIFORNIA ISSUE

PART THREE
PUNK HARDCORE

~~PART FOUR~~
~~ART~~

THE PARANOYDS

ザ・パラノイズ

前列、左から、スターズ・リンデス（ヴォーカル、ベース、ギター）、デイヴィッド・ルイズ（ドラムス）。後列、左から、レキシ・ファンストン（ベース、ギター）、レイラ・ハシェミ（キーボード）

LAの新世代ニュー・タイプのパンク・ロック

ウエストLAの金曜の夜。ヴェニス・ブルヴァード沿いのレコード・ショップ店内で行われたライヴに集まったのは、20代前半の男の子と女の子が半々ぐらい。格好はみんな自由でバラバラだけど、エッジ立ちまくりで、何に一番近いのかと言えば'70年代ロンドン・パンクなんだろうけど、もっと自由。ザ・パラノイズの演奏が始まるとみんなポゴ、モッシュで、女の子たちもけっこう暴れる。サウンドの方も、パンクでノイジーで破壊的だけどポップだったりして、枠にとらわれない。しかも、ヴォーカル、ベース＆ギター担当のナターシャ“スターズ”リンデスは人気ファッション・モデルだったりするのだ。

FLJ　ザ・パラノイズを結成したいきさつは？

スターズ　3人はサンタモニカにある同じハイスクールに通ってたの。最初は2人で曲を作り始めて、フォーク・ミュージックをやってたのよ。スゴくロマンティックな音楽。ボーイフレンドができる前だったから、イマジネーションを歌にしてた感じ。

レキシ　初恋とか。

スターズ　失恋とか。14〜15歳で、アコースティック・ギターだったんだけど、何年か経ってからエレクトリックになった。

レキシ　友達の家の洗濯場でライヴをやったわ。ノー・ダウトとかヴァイオレント・ファムズの曲。

スターズ　人前でライヴはやらなかった。それで2年後に再び組んで。

レキシ　去年のことね。

スターズ　それで3人でやってて、デイヴィッドが加わってこのバンド編成となったの。

デイヴィッド　僕はスターズの兄弟を通して知り合ったんだ。一緒の仕事だったから。「ザ・パラノイズと一緒にやるべきだ」って言われて、「いいよ」って。

FLJ　一緒にやってみてどうだったの？

デイヴィッド　いやあ、楽しかったよ。曲もいいし。

FLJ　4人はすぐに意気投合できたの？

スターズ　たぶんそうだと思う。

レキシ　良い友達だし、お互いを助け合うミュージシャンシップはあるわ。

FLJ　一人ひとり、どういう音楽が好きだったか聞きたいんだけど。

スターズ　グウェン・ステファニー。男ばかりのバンドにいて、やんちゃで、気にしないし、かわいいし、クールで女性的。それで私はチェロとベースを弾くようになって、10年ぐらいやってる。

レキシ　私はポップ・パンクを聴いて育った。ブリンク182とか。それでギターを弾いてくうちに、好きな音楽がどんどん変なものになっていって、ハードで他にあまりないような音楽ばかりになって。でもイイところは、スターズがポップな要素をバンドに持ち込んで、私が変な要素をバンドに持ち込んで、それがミックスされてイイ感じになってるところ。

レイラ　私はクラシックのピアノがバックグランドね。12〜13歳で少しやめてたんだけど、ザ・パラノイズでまた弾くようになって。ロックはパパからクラシック・ロックを教わったわ。エリック・クラプトンとかローリング・ストーンズとか。

デイヴィッド　オペラが好きで、バイオリンを弾いてたんだ。親父がクラシック・ロックをよく聴いてたから僕も聴いてた。12歳になると、バイオリンに飽きてドラムを叩き始めた。叔父さんがドラマーで、ドラムセットを買ってもらったんだ。それで毎日叩いてたよ。

スターズ　みんな音楽のバックグラウンドが違うんだけど、それぞれが最高のものを持ってくるから、それをミックスするとザ・パラノイズならではの音楽になるの。今って何か流行るとみんな同じような音を出すでしょ。そういうのは避けたいの。だから、ギターで曲を作る時は、他のバンドがすでに出してるような曲は作らないって決めてる。

レキシ　私たちはいっぱい汗かいて演奏して楽しみたい。プリティでキュートなルックスの同じような音のバンドが多いから。私たちにとって音楽は、教会のゴスペルみたいに宗教的なものだから、聴く人をクレイジーにしたい。ロックンロールってそういうものだと思ってるから。

スターズ　ルックスがキュートだけなのも、サウンドが変なのもイヤだわ。

デイヴィッド　ザ・パラノイズは人々のバンドだから。

スターズ　私たちはパンクスだから、気に入ってくれたらそれでOK。

FLJ　今日のライヴもいろんなタイプの人が来て楽しんでたし、モッシュして踊ってたし、格好も自由だったし、女の子がたくさんいるのも良かった。

レキシ　いろんな人に気に入ってもらえるとうれしいから。

デイヴィッド　今日来ていたお客さんはみんな何かしらやってる人たちなんだ。クリエイティヴなことだったり、変わったことだったり。

スターズ　今私はNYに住んでるけど、場所が変わると全然違うの。NYはみんな踊らないし、きっと14ドルで買ったお酒をこぼしたくないのよ（笑）。私たちの音楽でみんなが身体を動かしてくれたら最高なんだけど。

FLJ　今オリジナル曲は何曲あるの？

スターズ　Sad Girlのカヴァー以外はオリジナルだから、9〜10曲かな。

FLJ　曲作りはどうやってるの？

スターズ　一人ひとりが作ってきて、それをみんなで形にしていくことが多いんだけど、みんなで作った曲の方が最高なものになるわね。

FLJ　歌詞の内容は？

スターズ　私が書くのはロマンティックな、恋に悩んでる歌。友達がハマった中毒の歌もあるんだけど、そういうのって私は頭に来てしまうのね。

レキシ　安っぽいラブソングは好きだけど、このバンドにはないわね。

スターズ　フラストレーションがテーマかな。方向音痴で道に迷った曲もあるわ。かわい子ちゃんバンドのラブソングはないわね。デイヴィッドはラブソングが好きなのよね。

デイヴィッド　ジョージ・マイケルが好きだね。僕が好きなのは何かを感じさせてくれる曲なんだ。たとえ知り合いでなくても、聴いてみて共感を得られるような曲がいい。

FLJ　バンドにとってネクスト・ステップは？

レキシ　プレイし続けること。

スターズ　レコーディング。

レキシ　レーベルのHard Feelingsのコンピレーションを企画してるの。Sad Girl、Wild Wingと私たちの3バンドで、EP感覚で2〜3曲ずつ。ミックステープみたいな感じで。

スターズ　1年以上プレイしている曲があるから、新曲を作りたいわ。もっといい曲が作れそうだから。

FLJ　野望は？

スターズ　ツアーに出たら最高ね。

デイヴィッド　仕事をやめて。

レイラ　仕事なんてやりたくないから。

レキシ　大きな会場でライヴをやって、友達以外のお客さんが一緒に歌ってくれたら最高。それが野望かな。

スターズ　誰か有名な人が私たちのバンドTシャツを着てシャウトアウトしてくれたらなあ。いや、冗談よ。このファミリーで楽しく続けられたらいいわ。

レキシ　私たちの曲がラジオから流れたらって思う。「これ、私たちの曲よ！」って言いふらしたい。

FLJ　日本ツアーの予定は？

レキシ　実現するのなら何だってするわ（笑）。

デイヴィッド　絶対インパクトを残せると思う。

レキシ　スターズは日本に行ったでしょ？

スターズ　日本にはすっ裸でやるバンドがいるのよ。最高よ。

レイラ　日本のラジオでオンエアして！

FLJ　日本の読者にメッセージを。

スターズ　友達になりましょう。こっちまで遊びに来たら?!

レイラ　私、ワカモレ作るの上手いのよ（笑）。F

H2O

エイチトゥーオー

7年振りの新作がヤバい、NYハードコア・バンド

H2Oと言えば、1994年結成以来、NYハードコアながらも、ワシントンDCやカリフォルニアのバンドに通ずるようなメロディックなアプローチや、人生をポジティヴに捉えるメッセージが大きな支持を受けているバンドだ。7年振りとなる新作『Use Your Voice』も間違いない出来で、理屈抜きのカッコ良さがある。今はメンバーにうち3人が南カリフォルニアに住んでいる。LAでヴォーカルのトビーとギターのラスティをキャッチした。

PHOTO : 1 Chris Wrenn / 2 Todd Pollock

FLJ　最近のH2Oの活動はどんな感じなの？

トビー　ツアーばっかりやってるね。2008年に出したアルバム『Nothing To Prove』のツアーは今までで一番長かった。もう7年やってるから。最近のツアーはヨーロッパが多いんだ。それで、2011年にカヴァー・アルバム『Don't Forget Your Roots』を出した後、デモを作って、また前作と同じチャド・ギルバート（ニュー・ファウンド・グローリー）のプロデュースでニュー・アルバムを作ろうってなったんだ。だけど、前作で「7年後にまた会おう」って書いたら本当にその通りになってしまったよ（笑）。レコーディングは前と同じオレンジ・カウンティでやったんだけど、ヴォーカル録りはナッシュヴィルに飛んでやった。ダッシュボード・コンフェッショナルのクリス・カラバの家でね。チャドもナッシュヴィルに住んでるんだ。5日間でヴォーカルを全部録ったよ。

FLJ　今回の新作を作るに当たって持ってたアイデアは？

トビー　特にアルバムのテーマを決めたりしたくはなかったね。H2Oらしい曲で、歌詞では今の問題を扱っている。『Use Your Voice』っていうタイトルも気に入ってるよ。俺たちはいつも自分たちの声を使ってメッセージを出してきたからね。ジャケットの写真は、友達が俺の息子のマックスが叫んでいるのを撮影して、その写真を俺の家のバックヤードの壁にペーストしたものなんだ。

ラスティ　LAのストリート・アート・スタイルだね。

トビー　今って時代はみんなが声を上げていかなきゃいけないだろ。クレイジーなことだらけだからね。自分で生きてかなきゃいけないし、それは子供にしたって同じことなんだ。

ラスティ　今日もテレビを観てたら、ヴァージニアで女の子がカメラの前で撃たれたよ。

前列：アダム・ブレイク（B）
後列、左から：ラスティ・ビスタチオ（G）、トビー・モース（Vo）、トッド・フレンド（Ds）

トビー　レイシズムや警察による暴力などに対して、立ち上がって声を上げてかないといけない世の中になってしまったね。タイトル曲はちょうどTVでボルティモア暴動をやってる時に書いたんだ。政治的な歌ってわけじゃないけどね。今回は今の世界で起こってることを書いてるよ。ハードコア・シーンの中のことだけじゃなくてね。

ラスティ　ディセンデンツやダグ・ナスティが歌ってたように、H2Oが歌ってることも、この世界とどう付き合っていくのかっていうことなんだ。

トビー　人生の問題だね。自分の中に問題を溜めてちゃいけない。キッズは特にそうだ。昔は学校でいじめられたら家に帰って親に話したら聞いてもらえてたけど、今は学校だけじゃなく、インターネットやフェイスブックでも書かれるから、学校でも家でもノンストップでいじめられることになる。トランスジェンダーの子が自殺したり、退屈な子供が学校に銃を持ち込んだりするのも、そこに原因があるよ。アルバムの曲「#NotRealLife」では、ネットにポストして自分の人生を良く見せようとしてもそんなのはリアルじゃないってことを歌ってる。人生で何もしてないのに、何百万人にもフォローされて有名になりたいヤツが多いだろ。

ラスティ　その曲でトビーが「俺はおまえみたいな使い方はしない」って歌ってるんだけど、ソーシャルメディアは単にツールだから、ポジティヴな使い方をしないと。

トビー　最高の使い方もあれば、最低の使い方もある。今だとネットでラッパーの50セントに直接「ファック・ユー」とか書き込めてしまう。本人が見るかどうかは別にしてね。そうやってネガティヴなことだって書けるし、それって昔のメッセージボードをもっとひどくしたようなものさ。今は何でもできるから恐ろしいよ。キッズは構ってもらいたいだけなのかもしれないしね。

ラスティ　インスタグラムはアーティスティック、クリエイティヴに使わないとね。

FLJ　「Skate!」っていう曲ではスティーヴ・キャバレロがギターで参加しているんだけど、そのいきさつは？

ラスティ　キャバレロは何年も前にワープド・ツアーで知り合ったんだ。

トビー　俺自身、最近またスケートをやるようになったんだ。息子のマックスがスケートするからね。それで友達を通してキャブに参加のオファーをしたんだ。彼はFactionのギタリストだからね。それでキャブに曲を送ったら気に入ってくれて、スタジオに来て、自分で考えたリード・ギターを弾いてくれて、完璧だったよ。そしたら「この曲のビデオを作ろう」って言うから、「もちろん」って。撮影もスゴく楽しかったよ。そこに、友達が持ってた俺の高校時代の映像を入れたんだ。'85年かな。

FLJ　トビー、髪がブロンドだもんね。ハンドプラントやってるし（笑）。あと、「True Romance」って曲があるんだけど、あれってトビーの大好きな映画のタイトルでしょ。

トビー　俺と妻のムーンの歌だよ。

ラスティ　あの曲がいいのは、映画と同じヴァイブスがあるところだと思う。ムーディでエモい（笑）。

トビー　あと、アルバムには俳優のマイケル・ラッパーポートも参加してるんだ。

FLJ　今年はブラジル、メキシコにもツアーで行ってるよね。

トビー　初めて行ったんだけど、メキシコは最高だよ。南米は最高。

ラスティ　ヨーロッパのベルギーも最高だよ。バンド結成から20年経ってライヴはどんどん良くなってるね。

FLJ　もう結成して20年になるんだ？　20年前にH2Oをこんなに長くやるなんて想像できた？

トビー　できなかったね。20分かと思ったもん（笑）。始まりは、1994年のクイーンズ、マーフィーズ・ロウのライヴだよ。

ラスティ　1996年に1stアルバム『5 Year Plan』を出した時も、持って5年だと思ってたからね。

トビー　しかも今はライヴに来る客が若返ってる。キッズがたくさん来るんだ。初めて観に来るキッズもいるくらいなんだ。『Nothing To Prove』を出してから、新しいバンドに生まれ変わったような感覚もあるんだ。レーベルのBridge Nineがいろんな層の客を持ってるのもいいことだしね。

ラスティ　この10年ぐらいで音楽のあり方が変わったから。

トビー　日本でも20周年ライヴをやりたいね。

FLJ　日本の思い出で最高なのは？

トビー　最初の日本ツアーのリキッドルームだね。満員でスゴかった。ADDICTレーベルのWARPに載った広告を今でも持ってるよ。

ラスティ　岡山、広島も思い出深いな。最初の日本でTVのインタビューも受けたし、街でサインも求められたなあ。思い出がたくさんありすぎるよ。

FLJ　20年後のH2Oは？

全員　大爆笑

FLJ　日本のファンにメッセージを。

ラスティ　明日にでも行きたいよ（笑）。

トビー　日本にはすぐにでも行きたいね。H2Oの歴史の中で日本はかなり大きいから。アリガトウゴザイマス。F

『Use Your Voice』

（Bridge 9 Records）
10/6リリースのニュー・アルバム

www.h2ogo.com

FURY

フューリー

オレンジ・カウンティ発ユース・クルー・スタイルの新世代ハードコア・バンド

今また盛り上がるオレンジ・カウンティのハードコア・シーンの中から、2014 年結成のバンド、FURY を紹介しよう。'80s NY ハードコア、ユース・クルーを彷彿とさせる、ストレートな中にもメロディックなエッセンスもある、熱いオールドスクール・サウンドを聴かせる 5 人組だ。今回話を聞いたのは、ツイン・ギターの 2 人、マディソンとアルフレド。マディソンは元 Creatures、アルフレドは Soul Search、Forced Order のベーシストでもある。

FLJ　Furyで目指した音楽は？

マディソン　バンドを組んでたんだけど、Furyのデモ用の新しいスタイルの曲を作り始めたんだ。好きなのは、初期のRevelationのカタログ。ずっと大ファンだったんだけど、手を出してなかったんだ。Turning Point、Supertouchとか大好きで。

アルフレド　ああいうスタイルのハードコアだね。

マディソン　ハードコアだけどメロディックなスタイル。そういう音楽を目指して作ってたらスゴくクリエイティヴになって、そこにヴォーカルのジェレミーが乗っかるとさらにスペシャルなものになったんだ。

アルフレド　俺はずっとヘヴィな音をやってたから、Furyのスタイルはやってて楽しいね。スゴく自分の中で新鮮な気持ちでプレイできるし、キッズの反応もいいんだ。

マディソン　俺の好きなバンドの一つがラモーンズなんだ。キャッチーなアプローチをするわけじゃなく、メロディックだけどハードな音をやりたいんだ。ずっとこの感じで続けていけたらと思うね。

FLJ　Furyは結成してどのくらい経つの？

アルフレド　最初のライヴが2014年の2月かな。まだバンドとしては新しいけれど、ライヴのオファーもけっこうあるし、いい感じだよ。

マディソン　このバンドは楽しみたくて始めてるからね。

アルフレド　ハードコアが素晴らしいのは、バンドが1年も経つといろいろとコミュニティの中でつながってくるところなんだ。今日もこうして日本からの取材に応えてるわけだし（笑）。

FLJ　今日はヴォーカルがいないけれど、歌詞やメッセージはどんな感じなの？

マディソン　ヴォーカルは変なヤツだよ。良い意味でね（笑）。

アルフレド　風変わりとでも言えばいいのかな。

マディソン　スゴくクリエイティヴなヴォーカルで、文章や映像からインスピレーションを受けてるよ。彼の世界の見方って変わってるし、言葉の選び方も知的なんだ。歌詞の中には映画『シャイニング』からの引用もある（笑）。だけど俺たちもすんなり共感できる感じなんだ。今ちょうど新曲に取り掛かってるところなんだけど、次のレコードに向けて言いたいことがたくさんあるみたいだ。これまでリリースした曲は、世界に向けて歌われてたんだけど、新曲は自分自身に向けて歌われている。だからどんな歌詞になるのか今から楽しみでもあるよ。

左から、マディソン・ウッドワード、アルフレド・グティエレス

FLJ　新曲はどういう形で出す予定？

マディソン　まだ決まってないんだ。早くフルアルバムを出したい気持ちもあるんだけど、ギターのリフ一つ取っても、納得いくまで、自分の中の基準を満たすまで、時間をかけたいっていうのもある。ハードコアのレコードって、勢でいいものができるんだけど、後になって細かなところが気になったりする。だから、フルアルバムは自分の基準を満たすものにしたい。

アルフレド　7インチとアルバムでは意味が違ってくるからね。

マディソン　クロ・マグスの『The Age of Quarrel』は恐らくベスト・ハードコア・アルバムの中の一枚だと思うんだけど、あのレベルくらい高いハードルを設けてアルバムを作りたいね。15年後にクラシックって言われるものを作りたい。

アルフレド　それは夢だな。2015年にそれを形にするのは難しいけど、俺たちはやるよ（笑）。

FLJ　ライヴはどんな感じなの？

アルフレド　ボビーはベースを始めたばかりで、俺もベースからギターになったばかりだったから、初ライヴはラフな感じだったけど、エネルギーはバッチリあった。

マディソン　ドラマーのアレックスにとっても最初のバンドだし、ジェレミーがフロントマンをやるのも最初だから、テクニックと経験という意味ではまだまだだ。

アルフレド　経験があるのはマディソンだけだから。でも今はメンバー間、スゴくやりやすいよ。

マディソン　ツアーも経験したから、キッズの反応もどんどん良くなってる。フェスは特に反応がいいね。America's Hardcore Festに出演したんだけど、けっこう人気を決定付けたんじゃないかな。Rain Festも良かったな。ライヴはやるごとにどんどん良くなっていく感じだね。

FLJ　今のオレンジ・カウンティのハードコア・シーンはどう見てる？

マディソン　今オレンジ・カウンティはハードコアにとってはいいところだと思う。この前、フラートンにあるProgrammeっていうスケートショップでライヴをやらせてもらったんだけど、100人しか入れないところに200人くらい集まった。まあ地元のライヴなんだけど、Turnstileがやった時はクレイジーだったね。今はLAやインランドからもオレンジ・カウンティにライヴを観に来るよ。シーンはしばらく死んでたけど、今戻ってきてるね。Discrepancyっていう若いバンドは古き良きオレンジ・カウンティのハードコアにオマージュを捧げているよ。彼らはYoungblood Recordsのバンドだけど、もっとライヴを観てみたいね。大きなバンドはアナハイムにあるChain Reactionでライヴをやって盛り上がってるよ。小さなバンドにとっても、LA、サンフランシスコ、オレンジ・カウンティの3ヶ所は盛り上がってきてると思うね。

FLJ　野心は？

アルフレド　Furyはこんなにいりいろ活動をするとは思ってなかったからね。Furyの活動が良い爪痕を残せたらと思うね。

マディソン　今また若い子たちがJudge、クロ・マグス、Side By Sideといったバンドを聴くようになってきたのがうれしいね。俺の人生を変えたバンドだからね。新世代を育てるのも俺たちの仕事だと思ってる。バンドとしての野心は、ヨーロッパと日本に行くことだね。アルフレドはSoul Searchで日本に行ってるよね。

アルフレド　日本はクレイジーだよ。また日本に行くのは確かに野心だね。F

https://furyhc.bandcamp.com

Live On KXLU 7" (2015)

Kingdom Come 7" (2015)

Demo Cassette (2014)

SOUTHERN CALIFORNIA ISSUE　~~PART ONE~~ ~~SURF SKATE~~　~~PART TWO~~ ~~HIP HOP~~　PART THREE PUNK HARDCORE　~~PART FOUR~~ ~~ART~~

NAILS

ネイルズ

パンク、ハードコア、メタルを融合させたブルータル・サウンド

2009 年オックスナードで結成されたバンド、ネイルズ。Terror、Betrayed、Snake Eyes、Carry On 等様々なバンドで活動してきたトッド・ジョーンズ（ヴォーカル、ギター）が自分のサウンドを追求して長く活動できるようなバンドを目指して結成したバンドだ。そのサウンドはパンク、ハードコアをベースにしつつ、スラッシュやグラインド、デスメタル、パワーヴァイオレンスも包括したようなダークでヘヴィなスタイル。NARDFESTのライヴ後、トッド・ジョーンズに話を聞いた。

PHOTO : Albert Licano (P44)

NARDFESTでのNails

FLJ　良いライブだったね。

トッド　ありがとう。今日のライヴ会場はヴェンチュラ・シアターなんだけど、俺はこの辺りで育ったんだ。8〜12歳の頃、親父にここにブルース・バンドのライヴによく連れてきてもらったよ。今日ここでライヴをやったのは初めてだから、俺にとっては大きな意味があるんだ。スゴく幸せだよ。

FLJ　パンク、ハードコアといったヘヴィ・ミュージックにハマったきっかけは？

トッド　パンクにハマったのは1993年で、グリーン・デイやオフスプリングが出てきて、大好きになったんだ。そこから友達とサンクスリストに載ってるバンドのレコードを買い始めた。FAT WRECK CHORDS、エピタフ所属のバンドを買い漁ったんだ。そこからさらにマイナー・スレットを聴いて人生が変わったね。13歳だった。サウンド、メッセージ、美学、そのすべてにヤラれた。それで俺はパンク、ハードコアになったんだ。

FLJ　マイナー・スレットからどれだけ深く行ったの？

トッド　マイナー・スレットからIll Repute、Dr. Knowを聴くようになった。それから友達のフレッド・ハマーがクロ・マグスのレコードを貸してくれて、ファンジンも見せてもらった。そこでFloorpunch、Ten Tard Fightを知って、さらにユース・オブ・トゥデイ、ゴリラ・ビスケッツ、キリング・タイム、シック・オブ・イット・オールを知って、NYハードコア・スタイルが好きになった。その次にはナパーム・デス、カーカス。カーカスは出たばかりの時に聴いてたよ。

FLJ　Nailsをやろうと思ったいきさつは？

トッド　最初にやってたバンドは単なる地元バンドで、その後にハードコア・バンドを組んで、そこにはいとこでAnnihilation Timeのトニーもいた。そのトニーと地元の友達とともにStand Your Groundを組んだ。それで友達のバンドのCarry Onに入ったんだ。Carry Onが活動を休止すると、Buried Aliveのスコット・ヴォーグルとTerrorをスタートさせた。Terrorはツアー・スケジュールがタイトで、俺はそれほどツアーで忙しくするのは嫌だったので、Terrorを辞めた。それで2007年にNailsを始めたんだ。Nailsを始めた理由は、長く続けられるバンドをやりたかったからだ。バンドを解散させたくないからね。だからNailsではヴォーカルをやることにした。そうすればヴォーカルのメンバーチェンジがなくなるし、もし誰かがNailsを辞めてもNailsを続けられる。最初は思っていたからね。だけど、今のNailsのメンバーは最後までメンバーなんだ。

FLJ　Nailsは音楽的には何を目指したの？

トッド　ヘヴィ・パンク・ミーツ・メタル。クロスオーバーだよ。ナパーム・デス、バタリオン・オブ・セイインツ、ディスチャージ、ユース・オブ・トゥデイ、ZOUO。どれもパンクとメタルがミックスして一つに融合しているんだ。

FLJ　だけど、地元のバンドとはサウンドが似てないよね。

トッド・ジョーンズ（ヴォーカル、ギター）

トッド　確かにカリフォルニアのバンドの音じゃないね。ヨーロッパのバンドのようなサウンドだ。だけど俺が好きなのは音楽そのものだから。ジャパニーズ・ハードコア、スウェディッシュ・ハードコアも好きだし、スウェディッシュ・メタル、UKハードコア、UKメタル……全部好きなんだ。俺は音楽のマニアだからね。

FLJ　ジャパニーズ・ハードコアに対する愛も聞かせてほしいんだけど。

トッド　ジャパニーズ・ハードコアはスゴくパワフルだと思う。日本のミュージシャンはみんなハートの奥底からプレイしている。それにスキルもある。それでいて音楽は生々しい。Systematic Deathなんて狂ってるし、ZOUOは変わってるよ。だけど最高なんだ。G.I.S.M.、ガーゼ、WARHEADは大好きなジャパニーズ・ハードコア・バンドだ。WARHEADの「Cry Of Truth」は最高の7インチだよ。ジャパニーズ・ハードコアはインターネットを通して知ったんだ。友達が「これをチェックしろよ」っていろいろ教えてくれたんだ。ジャパニーズ・ハードコアがスゴいのは、プライドを持っているところ。ミュージシャンとしても素晴らしく、音楽も力強く、怒りに満ちている。アメリカのミュージシャンはそれほど楽器が上手いとは思わないんだ。

FLJ　日本には何度行ってる？

トッド　個人的な旅も入れると4回だね。Nailsでは2回。東京、大阪、名古屋、京都でプレイした。素晴らしかったよ。さっきも言ったように、日本にはプライドを持って正しいことをやっている。どのハコのサウンドも素晴らしいんだ。たとえそれが小さな会場であってもね。あと、レコードショップめぐりも最高だった。行くたびにレコードに2000ドル注ぎ込んでるよ。全部ジャパニーズ・ハードコア（笑）。G.I.S.M.の『M.A.N.』、Lip Creamの7インチを含めた全作品も手に入れたよ。Systematic Deathの全作品が欲しいね。あと、SLANGの『the immortal sin（永遠の罪）』も超ハードだね。

FLJ　Nailsの歌詞はスゴくダークだけど、インスピレーションとなってるものは？

トッド　憎しみだね。あと、疎外感。人から好かれていない感覚。俺はいろんな人から嫌われているから（笑）。

FLJ　でもパンク、ハードコアに最初にハマるきっかけはそういう感覚が多いよね。

トッド　そうだね。落ち込んだ感覚、悲しい感覚、友達なんて誰もいない感覚、他人にひどい目に遭った感覚。それって今でも感じることだけど、15歳の頃はもっと感じていたから。混乱してたし、イライラしてたし、怒っていた。その感覚が歌詞を書くことにつながったんだ。

FLJ　今取り組んでいることは？

トッド　ニュー・アルバムの制作さ。Nuclear Blastからのリリースになるよ。来年の5月を予定している。11月はフィル・アンセルモ主催のHOUSECOR HORROR FESTIVALに出演する。

FLJ　ニュー・アルバムの方の進行は？

トッド　もう3/4が終わってるよ。スゴくヘヴィだよ。よりパンクでもあるし、よりメタルでもある。全編通してNailsのアルバムになるよ。嫌いな人はいないと思うね。F

http://abandonalllife.com

SOUTHERN CALIFORNIA ISSUE

~~PART ONE~~ ~~SURF SKATE~~ ~~PART TWO~~ ~~HIP HOP~~ PART THREE PUNK HARDCORE ~~PART FOUR~~ ~~ART~~

NARDFEST

ナードフェスト

オックスナードで行われる２日間のハードコア・フェス

1980 年代に南カリフォルニアでハードコアのムーブメントが始まると、地域ごとにバンドのシーンが生まれ、地域ごとに独特のサウンド・スタイルを持ったバンドが出てくるようになった。LA から海沿いを北上したオックスナードでも大きなシーンが生まれ、その地のハードコアは「ナードコア」と呼ばれるようになる。そして、2013 年から毎年夏にナードコアのフェス、ナードフェストが始まることになった。

PHOTO : Albert Licano

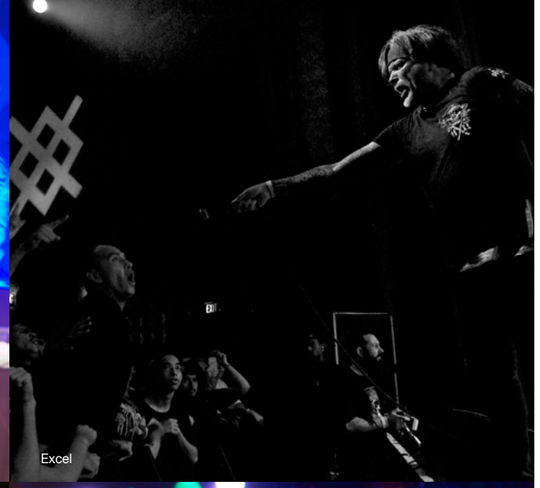
今年で3年目の開催となるNARDFESTが8/29（土）、8/30（日）の2日間行われた。会場となったのはヴェンチュラ・シアター。1200のキャパシティの会場で、1920年代に映画館として建てられた歴史的建物。そこに'80年代からのハードコア・ファンからスケーター、20代の若者のスパイキー・パンクスまでいろいろなタイプの音楽ファンが集まった。このエリアのハードコアである「ナードコア」はパンク、ハードコア、スケートボード、スラッシュメタルなど様々な要素を融合したシーンだった。その名前は、Mystic Recordsからリリースされたコンピレーション・アルバム『NARDCORE』で広く知られることになる。ナードコアを代表するバンドとしては、Aggression、Dr.Know、False Confession、Habeas Corpus、Stalag 13、Ill Repute、Rat Pack、RKL（Rich Kids on L.S.D.）、Scared Straightなどが挙げられる。

今年の出演ラインナップを出演順に紹介すると、1日目が、Shattered Badge（再結成）、Stop Breathing（この日はリリース・ライヴも兼ねていた）、Retaliate、Battalion of Saints、The Warriors（再結成）、Nails、Excel、Dr. Know。2日目が、Dogends（再結成）、Bad Samaritans、The Grim、Rikk Agnew（Adolescents、D.I.、Christian Death、ソロ）、Jughead's Revenge（再結成）、Aggression、Stalag 13、Ill Repute。

面白かったのは、Warriorsの地元での人気の大きさ。そして若手のNailsの盛り上がり。ヴェニスのExcelの出演。そして、Dr. Know。Dr. Knowは、一時期ヴォーカルのブランドン・クルーズによる再結成があったものの、それが2010年に解散すると、オリジナル・メンバーのギタリスト、カイル・トゥシェが2011年にDr. Knowを再始動。カイルがヴォーカル＆ギターだった時代のスラッシュ・メタルとのクロスオーバーな曲を中心のライヴはかなり熱かった。そして、南カリフォルニアのパンクを語る上で忘れてはいけない重要ギタリスト、リック・アグニュー。彼はオレンジ・カウンティ出身で、ソーシャル・ディストーション、Adolescents、ゴスのChristian Death、D.I.と、伝説のバンドを渡り歩いた上、ソロでも3枚アルバムを出している。また、2001年に一度は解散したものの、2010年に再結成を果たしたJughead's Revengeも、かつてはBYO、Nitroといったレーベルから良質な'90sのカリフォルニア・ハードコアのレコードをリリースしてきたバンドだ。

今のカリフォルニアは、このNARDFESTが象徴するように、'80s、'90sのパンク、ハードコアの伝統がまた再評価され、今のシーンの中で生きている。昔のファンも今のキッズもパンク、ハードコアの名の下に一つになっている感じ。そのカルチャー感がまたヤバかったのだ。F

Battalion of Saints


Excel

Dr. Know

Rikk Agnew

Nails

Ill Repute

GARY TOVAR

ゲイリー・トヴァー

LA のライヴ・プロモーター会社、ゴールデンヴォイスのファウンダー

ゴールデンヴォイスと言えば、今や世界で最高のフェスと言われるコーチェラ（Coachella Valley Music and Arts Festival）を主催するライヴのプロモーター会社である。そのゴールデンヴォイスの始まりは、LA のパンク・ロック・ショーであった。LA にパンク、ハードコア・シーンが生まれると、いち早くそのライヴを企画し、イギリスからバンドを招聘し、4000 人収容のハコであるグランド・オリンピック・オーディトリアムも手がけていたのだ。そのゴールデンヴォイスを立ち上げ、今はコンサルタントをやっているゲイリー・トヴァーがこの話の主役である。

FLJ　ゲイリーはどうしてパンク・ロックのライヴを主催しようと思ったのですか？

ゲイリー　俺は今63歳なんだけど、1981年、28歳の時にパンク・ロックは演奏できる会場がないという問題を抱えていた。LAは暴力的な街で、パンク・ロックも暴力的なのにさ。パンクスはビルを破壊するし、ビルの中も破壊する。とても危険な音楽だった。誰もパンク・ロックをやりたいとは思わなかったんだ。だけど俺はパンク・ロックの良さを見つけた。俺は当時、マリファナの密輸業者だったから、金はあったし、この音楽を世の中にきちんち紹介しなきゃいけないと思ったんだ。それでまずパンク・ロックのライヴをサンタバーバラで主催した。眠たい街だから目を覚まさせようと思ってね（笑）。LAの警察は卑劣でパンクスを嫌ってたから、トラブルが多かった。だけどパンク・ロックのライヴに行きたい人は多いんだ。だから俺は後にオリンピック・オーディトリアムというライヴ会場を始めたんだ。4000人のキャパの会場で、LAがベストだった。NYは1500人の規模だから、俺たちはNYの3倍の規模だった。5000人入ったこともあるよ。俺には金があったから、宣伝もバッチリやった。LAの地図を壁に貼って、レコード店のある場所すべてにピンを刺したよ。もうフライヤーを撒きまくったね。まあとにかく、俺がパンク・ロックのライヴを始めたのは1981年のことだった。サンタバーバラで試しにやってみて、1982年にLAでライヴを始めることになった。ちゃんとライヴの許可を取ってね。

FLJ　許可ってなかなか降りなかったんじゃないですか？

ゲイリー　そこは上手くやったんだよ。「どうい

う音楽？」って聞かれれば、「ロックンロール」って答えて（笑）。それでいざライヴになったらみんな暴れまくるから、次からはNGだよ。でも最初の2年間は本当に素晴らしかった。

FLJ　初期はどういうバンドをブッキングしたんですか？

ゲイリー　一番最初のサンタバーバラのショーはT.S.O.L.だった。それから、サークル・ジャークス、ブラック・フラッグ。それで1982年にイギリスに飛んだんだ。その時に、3年間ブッキングできるだけのバンドとつながった。あれは何だか流れ星みたいだったね。長くやり続けるつもりもなかったよ。客が暴力的になりすぎたからね。俺も死にたくなかったしね（笑）。

FLJ　イギリスのバンドをLAに呼んだ時の反応はどうでしたか？

ゲイリー　最高だったよ！　面白いのは、サンフランシスコって地元のバンドしか好きにならないんだ。ナショナリスト的というか、「イギリスのバンドなんて要らないよ」って感じさ。だけど、LAでは大好評だった。サンフランシスコはちょっと政治的すぎるんだ。だけど「政治的に極端に左に寄りすぎると、右とあまり変わらなくなる」って言うだろ？　そんな感じさ。そんなに硬いこと言わなくてもいいのにさ。LAはもうバンドが観れるのなら最高って感じだった。俺はLAの方が好きだよ。でもイギリスのバンドを呼んだ時は、ツアーでサンフランシスコまで行った。他にもサンディエゴ、フェニックス、サクラメント、フレズノにも連れていった。だけどハイライトはLAのオリンピック・オーディトリアムだ。一発目のライヴ、つまりプレミアだよ。初めての場所で初ライヴっていうのはスゴく大切だからね。だから、イギリスから来たバンドは初日をオリンピック・オーディトリアムでやって、他の街を回って、またLAに戻ってきて、2度目のショーをパーキンズ・パレスでやるんだ。あと、俺はパンク以外にも、ゴス、インダストリアルのショーも手がけてた。当時はオルタナティヴとは呼ばずに、アンダーグラウンドって呼んでたね。アンダーグラウンドなバンドは何でも呼んだよ。それにつけても昔のパンクスは文句ばかり言ってたね。もちろんそれが彼らの仕事だからね。俺も「ファック・ユー！」しか言われなかった（笑）。今や当時のパンクのキッズも45歳とか50歳になってて、今になって当時どれだけ楽しかったのか俺に言ってくるんだ。当時あいつらは自分たちが「ファック・ユー！」って言う意味をわかってなかったと思うよ。若い時ってバカなことをするからね。当時うちの弁護士によく言われたよ。「何故このビジネスを続けるんですか？」って。「お客さんから感謝されないんですよ」「お金も損しかしてないんですよ」って。確かに、11年間やって、300万ドル（約3億700万円）は損した。'80年代当時のお金で300万ドルだ。弁護士が「気が狂ってるんですか？」「誰かが死ぬかもしれないんですよ」って。でも本当にそれが理由でオリンピック・オーディトリアムをクローズしたんだ。1986年のことだね。1985年に一度クローズして、それでもう一度トライしたんだ。暴力が原因で客が誰も来なかったよ。その時のライヴはイングリッシュ・ドッグス。客も少ないからギャラも少なくて、バンドは俺に文句を言ってきたよ。それでもう終わりだと思ったね。エクスプロイテッド、GBH、ディスチャージ、サブヒューマンズ、トイ・ドールズ。みんな呼んだよ。2011年に「GV 30」っていうイベントをやったんだけど、知ってるかな？　ゴールデンヴォイスの30周年イベントだよ。ソーシャル・ディストーション、バッド・レリジョン、ディセンデンツとかに出てもらったんだけど、イギリスのバンドも呼ぶべきだったかもな。3日間、サンタモニカ・シヴィック・オーディトリアムで行ったんだ。来年は35周年だから、GV 35にトイ・ドールズを呼びたいね。

FLJ　当時のショーで思い出に残っているものは？

ゲイリー　GBHの初ライヴはファンタスティックだったね。1983年の8月だよ。あのライブにはトバされた。デッド・ケネディーズも最高だった。デッド・ケネディーズは当時アメリカで最も人気のあったパンク・バンドだった。ラモーンズはメインストリームだから俺はカウントしない。それに、デッド・ケネディーズはハードコアだった。客もいろんなタイプが来てて面白かった。パンクスだけじゃなく、アナーキスト、カレッジの学生も観に来てたから、客も多かったんだ。エクスプロテッドは16〜17歳が多かったね。でも、ジェロ・ビアフラが理解していなかったのは、デッド・ケネディーズはデカくなりすぎてしまって、ライヴ会場がいつも小さすぎたことだ。入れない人が多くなるとどうなる？　会場の外で暴動だよ。「客を中に入れて、ドアを閉めろ」。それが俺の哲学だよ（笑）。

FLJ　地元LAのバンドでは？

ゲイリー　Xだね。ブラック・フラッグの最初の4年間も大好きだったね。あと、サークル・ジャークス、バッド・レリジョンの最初の5年間。俺がパンクが素晴らしいと思うところは、演奏がちゃんとできなくてもいいところなんだ。これってメタルのヤツらにはわからないことだ。あいつらはテクニックを重視しているから。「パンクは演奏できないじゃないか」とか言うけど、間違ってるね。音楽はそこだけじゃないから。だからパンク・バンドが演奏が上手くなっても必ずしも良いとは限らないからね。

FLJ　当時、警察との対応はどうだったんですか？

ゲイリー　警察はある意味、味方してくれてたと思うよ。

FLJ　それは何故ですか？

ゲイリー　警官がショーに来て、暴動が起きる。だけど暴動になると、もっと人が集まるんだ。だからライヴに来る人も増えるんだよ。みんなトラブルが大好きで参加したいんだ（笑）。だから、何度か暴動があった後、観客の動員は伸びたんだよ。他の街からバンに乗って来るヤツらもいたほどなんだ。

FLJ　警察と本当にマズいことになったことは？

2011年に行われたゴールデンヴォイスの30周年イベント「GV 30」

ゲイリー　何度もあるよ。1983年、会場を変更しなきゃいけなかったこともある。サンフェルナンド・ヴァレーからハンティントン・パークの小さな会場にね。ハンティントン・パークはメキシコ系が多いエリアで、メキシカン・バーはビールをボトルで売ってるんだ。だから暴動が起きるとひどいことになったよ。パンクスがビール瓶をバトカーに叩きつけるんだ。それで頭に来た警察も細い路地とかまでパンクスを追い回すんだ。あと、ロングビーチとサンペドロの間にあるウィルミントンでのショーも暴動がひどかった。ライヴはデッド・ケネディーズだったな。その年は1月、2月、6月と暴動になった。自分のハコ、オリンピック・オーディトリアムを持とうと思ったのは、暴動が続いたからっていうのが理由なんだ。ライヴに来る客の年齢層は、一番若いのが12歳で、上は20〜25歳だった。だけど一番多いのは15〜17歳だった。12歳とかが来るのは、17歳の客が弟を連れてくるからなんだ。だけど、パンクのキッズは車を持っていない。1台の車に15人乗ってライヴに来たのを見たことがあるよ。トランクの中には2人だ。そうそう、パンク・シーンには日系の2世のパンクもけっこういたよ。

FLJ　マリファナの密輸で逮捕されてますよね？

ゲイリー　1986年になると、ロナルド・レーガンの時代になって、「Just Say No」の反麻薬キャンペーンが始まった。そういう時代の流れになって、情報も漏れるようになった。俺はマリファナの密売で逮捕されたよ。

FLJ　刑務所にはどれだけいたんですか？

ゲイリー　8年間だよ。1991〜1999年の間だよ。それでポール・トレットとリック・ミューラーにゴールデンヴォイスを譲ることにした。そこからは彼らにまかせている。俺が逮捕された時、ゴールデンヴォイスはもう倒産寸前だったけど、俺はお金を払って倒産を避けたんだ。弁護士は「刑務所に入るんだから倒産したって問題ないじゃないですか」って言ってたけどね（笑）。それで、俺が刑務所から出てきた1999年にゴールデンヴォイスはコーチェラを立ち上げるんだけど、その時は失敗して大損してるんだ。それで出演者にギャラが払えなくなったんだけど、ベックは後払いでいいって言ってくれたんだよ。素晴らしいアーティストだよね。その後、AEGがゴールデンヴォイスを買収して、AEGは良い仕事をしている。ところで、ゴールデンヴォイスのロゴってアジア風だろ？　チャイニーズ・レストランのロゴにありがちなフォントで。何故だと思う？

FLJ　何故ですか？

ゲイリー　あれは、タイのマリファナから来てるんだよ（笑）。タイのゴールデンヴォイス・ガンジャ（笑）。そのガンジャを吸うと天使が話しかけてるみたいな気になるんだ。黄金の声……ゴールデンヴォイスだよ（笑）。ガンジャには2種類あって、ゴールデンヴォイスはハイになると天使が話しかけてくる。もう1種類のエレファントは、象が自分の上に乗っかってくるんだ。インディカだよ。だからカウチに沈んでしまう（笑）。ちなみに、ゴールデンヴォイスのロゴのアジア風フォントは、コーチェラのロゴにも引き継がれてるんだ。クールじゃないか?!
ゴールデンヴォイスの名前の由来はタイのガンジャなんだ。メコンデルタ産。でもタイ産って、実はカンボジアから来てるんだよ。俺はマリファナをタイから密輸してたんだ。俺の歴史はマリファナの密輸とパンク・ロックで、この二つは密接につながってるんだよ。

FLJ　マリファナはどこから密輸してたんですか？

ゲイリー　時代にもよるね。最初はメキシコのオアハカだった。まだ若かったから密輸業者とも言えなかったんだけど、チェックしに行ったんだ。アカプルコ・ゴールドだよ。その次はコロンビアだった。サンタ・マルタ・ゴールドを密輸したんだ。だけど、2〜3年経つとコカイン市場が大きくなって、そっちの方が儲かるからマリファナの質が落ちてきたんだ。自問自答したよ。「コカインを密輸するか？」「No」って。今までの人生で銃を持ったこともなければ、銃を撃ったこともない。俺はピースにやりたかった。それでコロンビアは諦めて、タイに行った。タイスティックだよ。だけどまた政治問題が起きた。周りを共産主義の国に囲まれてたからね。同時期、パンク・ロックのプローモーターとして、俺は大金を損した。大規模なライヴを企画して、プロモーションにお金を使って、客はたくさん来るんだけど、障害だらけだったんだ。いつだって警察が待機してるから客の暴動になってしまう。しかも、警察は暴動に備えて、ヘルメットにアーマーにシールドと、フル装備で来るんだ。そうするとパンクスだって、「レッツゴー！　戦おうぜ」ってなってしまうよな（笑）。誰か一人が石を投げたらもう暴動の始まりだ。もし警察が来なかったら、みんなライヴが終わった後真っ直ぐ家に帰ってたと思うよ。俺はベイビーシッターみたいなもんだった。どのライヴもALL AGESだったから。ライヴ5000人の規模を誇ってたいたんだけど、その規模が問題にもなった。警察が来るのもそうだし、会場がパンクスに破壊されてしまうから、その修理代もかなりの金額になった。トイレも窓ガラスも鏡もすべて破壊してくれたからね。壁に飾った絵もダメになるし、シャンデリアもダメ。一度ユニオン・ホールでショーをやった時、会場が破壊されてしまって、俺は警察に逮捕されそうになったことがあるんだ。それで警察に聞かれたんだ。「デッド・ケネディーズはどういうバンドなんだ？」「どうしてそういうバンド名なんだ？」と。俺は「ジョン＆ロバート・ケネディのトリビュート・バンドなんです」って答えたよ。そうしたら、「ああ、トリビュート・バンドなんだ！」って警察は感心してたよ。警察署に行くと必ずアメリカ合衆国大統領の写真が飾ってあることに気がついてたから、俺は愛国心に訴えたんだ。だけど、後になって俺が警察を騙していたことがバレて、とうとうバンドを逮捕しようってことになった。でも俺は会場に弁償代をすべて払い終えていたから、会場は「逮捕しないでください。トヴァー氏が弁償してくれたので、すべて新品になりますから。彼は本当に良い人ですよ」ってなって。俺はショーの利益以上のお金を弁償代として支払ったんだけど、その時はお金が助けてくれたんだよね。1万1000ドルだよ。

FLJ　それだけ大変なことばかりだったのに、ゲイリーがパンク・ロックのライヴを主催し続けたのは何故ですか？

ゲイリー　確かに大変なことだらけだったよ。だけどね、俺が思うに、どんな人にも自分を表現する自由はあると思うんだよ。それってどんなやり方でもいいんだ。それで、音楽っていうのはその自由を表現する場なんだ。だから俺はパンク・ロックという音楽をどこまでもプッシュしたかったんだよ。どれだけ犠牲を払おうともね。F

http://garytovar.com

GOLDENVOICE
インタビュー本中にも出てくる、タイのマリファナから来ているゴールデンヴォイスのロゴ

COACHELLA
COACHELLA VALLEY MUSIC AND ARTS FESTIVAL
それが引き継がれているコーチェラのロゴ

SOUTHERN CALIFORNIA ISSUE　~~PART ONE~~ ~~SURF SKATE~~　~~PART TWO~~ ~~HIP HOP~~　~~PART THREE~~ ~~PUNK HARDCORE~~　PART FOUR ART

UNTAME

アンテーム

編集長のウェンディ・マリッサ

PHOTO : Dan Monick / HAIR STYLIST : Johnny Stuntz / MAKEUP ARTIST : Heather Cvar

年１回発行のアート・ブックのような新雑誌

昨年世に出た新雑誌『UNTAME』。厚いマット紙 156 ページで、9 × 12 インチのサイズは、雑誌というよりはアート・ブックのようだ。男性にも女性にも向けたライフスタイルとクリエイティヴを扱った特集は、音楽から、男らしさ、アートまで様々なテーマを扱っていて、関わっている人も様々。クラシックなアメリカっぽさもあれば新しいエッジもある。この雑誌の編集長であるウェンディ・マリッサに話を聞いた。

FLJ　ウェンディのカルチャーのバックグランドは？

ウェンディ　私が育ったのはワシントンDCで、クリエイティヴなことはいろいろとやったわ。レコードショップをやったり、音楽をプレイしたり、プロダクションをやったり。出身はパンク・ロックで、政治的なことにも関わっていた。

FLJ　音楽とアートは常に一緒だったんだ？

ウェンディ　そうね。いろいろパンク・ロック以外にもやったわ。

FLJ　好きなアーティストは？

ウェンディ　ロックンロール、パンク・ロックが常に一番で、ローリング・ストーンズ、ボイズン・アイデアとかが好き。ボイズン・アイデアのヴォーカル、ジェリー・Aはうちの雑誌のライターでもあるのよ。2号目にはLong Knifeっていうバンドが出るんだけど、日本のバンドのForwardと一緒にツアーに回ったのよ。ずっとパンクが好きだったんだけど、今はラップが大好きで、ラップばかり聴いてる。新鮮なの。ラップにはファッション、カルチャーもあるから大好き。

FLJ　僕もパンクとラップの間、行ったり来たりしてるよ。

ウェンディ　私もそう！

FLJ　DC出身だとバッド・ブレインズもいたからね。

ウェンディ　マイナー・スレットもそうよね。でもDischord系は私の時代じゃなくて、私の時代はライオット・ガール・ムーブメントが盛り上がってた。ライヴをブッキングしたり、zineを作ってトレードしたりしていた。

FLJ　雑誌「UNTAME」を始めようと思ったアイデアはどこから？

ウェンディ　父が突然亡くなってしまったの。それがスゴく悲しくて、1ヶ月経った時に、前に進めるように何かしないといけないと思って。セラピーの意味合いもあった。それで親友のアレッサンドラ・ドゥベネデティがアートの世界に詳しくて、出版も前にやったことがあるって言うし、Heartworm Pressにもいたの。あと、雑誌『ハスラー』を経営しているアラン・マクドネルっていう友達もいたのよ。それで、彼らと何かやりたいなと思って。父は本と雑誌が大好きな人で、仕事が終わるといつも何かしら読んでいたわ。それで、ハイグレードなzineみたいなんだけど、写真中心のグラフィックで、ハスラーみたいなんだけどポルノじゃなくて、zineのショートストーリーみたいな編集ページも掲載されてて、それをジェリー・Aに執筆を依頼してみたり、いろんな人を絡めていろんな要素の入った雑誌を作ってみたいってなったの。女の子モデルも起用して。完璧にDIYで。それでジムの帰りにアイデアが浮かんだの。いろんなジャンルから仕事してみたいフォトグラファーをリストアップしていって。それがどんどん転がっていって形になっていったの。

FLJ　スゴいね。特にテーマとかはあったの？

ウェンディ　それ、よく聞かれるわ。年に1回の発行だから、テーマがありそうなんだけど、実はなくて。内側でマントラみたいなものはあるんだけど（笑）。雑誌の仕事ってスゴく大変でしょ。だから、ごく自然にいろんな人たちとコラボレートして作っていった。作っていくうちに人間性も出てくるし。特集の一つひとつにテーマがあるような感じなんだけど、最初にテーマを決めて作ってるわけじゃないのよ。

FLJ　最初の号はいつ発行したの？

ウェンディ　去年よ。今度出るのが2号目。

FLJ　それはいつ出るの？

ウェンディ　ちょうど今日香港の印刷会社に入稿したところなの。NYにいるパートナーとやり取りしながら。

FLJ　わあ、大変な時期なのに、大丈夫？

ウェンディ　終わったから大丈夫（笑）。2号目は12月に出る予定。

FLJ　個人的に気に入ってる特集や記事はある？

ウェンディ　この雑誌は200ページを超えるし、体裁はアート・ブックなんだけど、価格も抑えてるし、雑誌の流通に乗せてるから、コンセプトとしては雑誌なの。特集はどれも大好きよ。どの特集に関わった人にも、そのページが最も重要なページだと思ってもらいたいから、選んだりできない。有名な人から無名な人まで、誰もが一生懸命仕事をしてくれた。だから関わってくれた全員が重要なの。

FLJ　雑誌作りで一番楽しいところと一番大変なところは？

ウェンディ　一番楽しいところは、アート・ディレクションやデザインと同じで、コンセプトをまとめたり、クリエイティヴをまとめたりするところ。だけどそこが一番フラストレーションが溜まるところでもあるわ。関わった人がみんなまとまらないといけないし、大変よね（笑）。あと、締め切り（笑）。でも入稿とかのやり取りはパートナーの仕事だから。

FLJ　1号目を出した後の反響は？　どういう人が読者になったの？

ウェンディ　流通がそれほど大きくなかったし、オンラインでも販売してたの。でも、口コミでスゴく広がって、タトゥーのコミュニティ、パンク、ハードコアのコミュニティでも話題になって、いろんなところに広がっていった。その口コミのおかげで、全米の流通も獲得できたの。それで在庫切れにもなった。正月にはインターナショナルの流通も決まったわ。それで1号目を増刷してほしいって言われて。バーンズ＆ノーブルでも扱うことになったのよ。日本でも流通させたいわね。

FLJ　この雑誌のゴールは？

ウェンディ　とにかく続けたいし、私自身も読者もエキサイトさせたいわ。才能のある人はたくさんいるから、たくさんコラボしたいし、楽しく作っていきたい。そういう仕事ができるのって光栄なことだしね。どうなるのか出すごとに楽しみにしていきたいわ。あと、今度の2号目は植野有砂にも出てもらったの。F

UNTAMEの1号目の表紙がコレ。2号目は12月発行予定。

www.untameworldwide.com

SAND ONE

サンド・ワン

いろいろなキャラの女の子人形を描くイースト LA 出身の女性ストリート・アーティスト

イースト LA 出身のメキシコ系女性アメリカ人アーティスト、SAND ONE の絵は一度見たら忘れられない。大きなまつ毛をした女の子たち。本人曰く「人形」の彼女たちはいろんなキャラがあって、それが巨大なウォール・アートになってることもあれば、かわいらしい枕やTシャツになってることもある。今年 6 月には CONART の ASH の招聘で渋谷の Lil' RiRE Gallery/Cafe でアートショーも行っている。彼女の作品とインタビューを紹介しよう。

渋谷のバー、ゴールデンボールのシャッターの絵は、日本で初めて描いた女の子人形

FLJ　アートにハマったきっかけは？

SAND ONE　小さい頃からいつも絵を描いてたの。いつの日か日本に行くことを夢見てね（笑）。6年前に学校を卒業して、パン職人になろうと思ったこともあるわ。だけどアーティストになったの。美容室から壁に女の子の人形の絵を描いてほしいって言われて。描いたらイースト LA で人気になって。それで1ドルもらって、1ドルが2ドル、3ドル、4ドルになっていって。描く人形もどんどん大きくなって、2階建て、3階建て、巨大なビルに描くようになって。でも始まりは一つの小さなお店の壁だったの。そこから雑誌、TVの取材、アパレル会社、リーバイス、レッドブル、NBAから誘いがあって。私はまだ18歳でアートのことは何もわからなかったし、アンディ・ウォーホールも知らなかった。だけど、人々が私のアートを求めているのはわかった。人の会社から受けた仕事もしつつ、自分のアートもやっていって、この3年は本当に順調よ。私の作った枕、シャツ、ボディスーツ、キャンバス・プリント、オリジナル・アートをみんなが買ってくれるの。日本でもハローキティ並みに愛されたいわ。自分のやってることで人から愛されたい。それって夢よね。アートの世界には競争もたくさんあるけれど、私は大丈夫。他のアーティストなんて気にならないし、自分の世界では自分が最高だから。それで朝、友達から電話がかかってくるの。「車を運転してあなたの絵を見たんだけど、誰かが上に×を描いてたわよ」って。「OK」って。「誰かがあなたを侮辱してる」「大丈夫」って。私はその壁に行って×を消して描き直してくるの。まるで何事もなかったかのように。ギャラリーで作品を盗まれることもあるわ。でも「OK」って。誰かが私を悲しませようと思ってるか、私に描き直させたいって思ってるのかわからないけど、私は描くのが好きだから問題なし。もし作品が1個ダメになったら、10個描いてしまうから。

FLJ　SAND ONEの絵のスタイルって、他の誰にも似てないんだけど、どうやって自分のスタイルを確立していったの？

SAND ONE　ママのまつ毛がスゴく大きかったの。私が小さい時、ママはオールドスクールなメキシコのマスカラでいつもまつ毛を塗ってたの。毎日、それこそ儀式のように1時間かけて。私は座ってそれを見てたの。何故そんなことをしてるのかわからずに。それで私も大きくなると、大きなまつ毛にするようになって。前の彼氏から言われたわ。「おまえ、ゲットーだよ」。もう蜘蛛の巣みたいに大きくなってたから。そのうちに、絵で描いてた女の子のまつ毛もスゴく大きくして。すぐにそれが私のトレードマークになった。アメリカだとみんな私のことを「まつ毛の女の子」で覚えてくれてる。だから私のロゴもまつ毛になってるの。他の人とは違うものを描きたかったから、まつ毛も超大きく描くの。女性って家にいて料理をしたり、雑誌を読んだり、メイクをしたりするのが普通らしいけど、私は外に出て描いてる。「何でメイクしないの？」「何でガーリーな格好しないの？」ってよく言われるけど、そんなのどうでもいいことだから。私がやりたいことは、毎日描くこと。ラーメン食べてても、餅アイスを食べてても、描きたいの。それが何故だかはわからない。友達にもわからないみたい。昔の私はガーリーだったのに、強い女になってしまったから。

FLJ　女の子人形のキャラクターにはそれぞれ名前が付いてるんだけど、一人ひとりにストーリーはあるの？

SAND ONE　大体どの子も失恋してるの。マスカラ・ベイビーっていう人形だけは失恋していない。恋なんかよりもメイクアップが大切。元々アーバンディケイのために描いたキャラなの。リル・エサっていう人形は小さな女の子で、メキシコの死者の日のメイクをして、デッカい髪はチカーノ・ギャングのノリ。ハッピーで花が大好きなの。キャプテン・バミューダっていう人形はロシア人で、ウォッカ、キャビアが大好き。ボス・キャラなの。怖いのは海。どの子も何かを恐れているのよ。バニー・ベレスっていう人形は白人の女の子なんだけど、メキシカン・ギャングスターの男が大好き。彼女が手にしてるのは風船で作ったボーイフレンドで、中国からの輸入物。そんな感じでいろんなキャラがいるから、私のファンの女の子もそれぞれに好きなキャラがいるみたいで、お互いライバル視してたりするのよ。

FLJ　日本で描いた女の子もキャラがあるんでしょ？

SAND ONE　ブロンドに染めた日本の女の子、ブーケの中に手巻き寿司を入れた子、スシ・キラーもいるわ。不良のボーイフレンドが寿司になってるの。彼はクラブで他の女の子を見てたから、今は他の女を見るのは禁止。餅アイスが大好きな子もいるし、マティーニが大好きな子もいるわ

FLJ　将来の夢は？

SAND ONE　ストリート・アートのココ・シャネルになること。時代を超えたアーティストになりたいから。おばあさんになって描けなくなる日が来ても、私のアートは生き生きとしていてほしいから。見た人が「かわいい！」って言うだけじゃなく、「あぁ……」って感動してほしいの。F

www.sandoner.com

渋谷のLil' RiRE Gallery/Cafeで行われたアートショー。テーマはカワイイ・モチ・キラー（笑）

SAND ONEが手がけたストリート・アートの数々

アーティストのライヴ・ペインティングで一番注目されてたのが、日本から参加のChocomoo。2日間かけての力作

BE STREET

ビー・ストリート

フランス・パリ発のアート・マガジン主催のイベント

アート、音楽、ファッション、スケートボード……それを一つのイベントで全部表現したらどうなるのだろう？　それを実際にやってしまったのが、フランス・パリ発のアート・マガジン『BE STREET』主催のイベント、BE STREET WEEKND L.A だ。ALL AGES で 2 日間、昼 12 時から夜 10 時まで行われたこのイベントをちょっと覗いてみた。

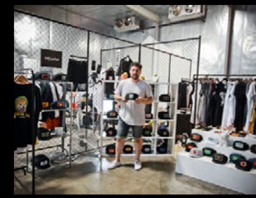
PHOTO : 217...NINA

HELLZ BELLZのスタッフ

HELLZ BELLZのTシャツもChocomooデザイン！

パリからLAにみんなで移ってきたブランドのTEALER

宇宙人を連れてきたブランドはRIPNDIP


Dog LTD。彼の作る帽子の刺繍ワッペンはすべて犬

アーロン・カイ

ルーク・ペレティエ

ジェイムス・ハント

靴をキレイにしてくれます。提供はJASON MARKK

ペン型タイプのヴェポライザー、G Pen by Grenco Science

倉庫の中をうろちょろ

ゲーセン・コーナーも

スケート・パークもあり

ステージはSoulectionが担当

中庭では飲んで食べてチルです

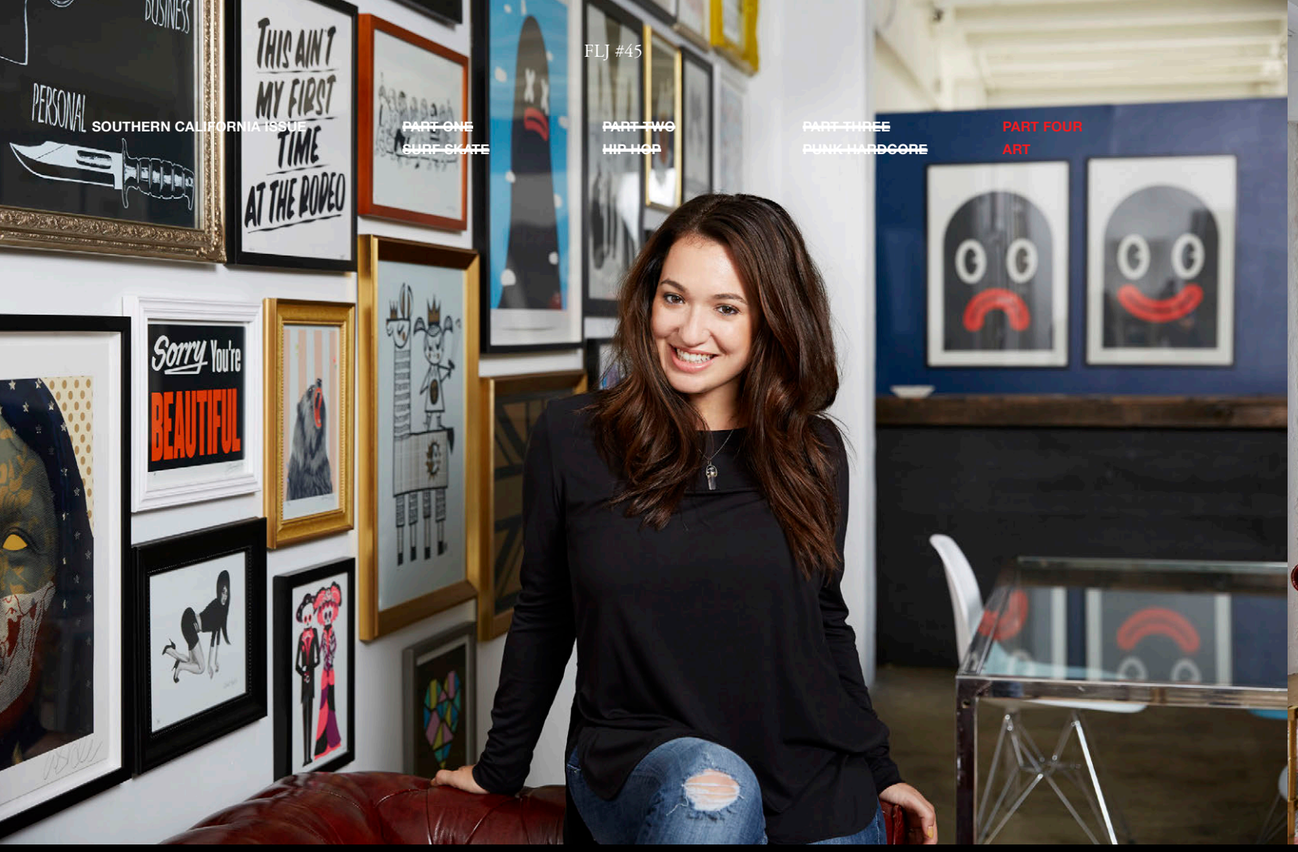
　フランス・パリ発LA着のアート・マガジン「BE STREET」。2008年にスタートしたこの雑誌は、アート、音楽、ファッション、スケートボードと様々な要素を融合したストリート・カルチャー・マガジン。その世界観をイベントにしたのが「BE STREET WEEKND」だ。

　そのイベントが今年LAで初めて開催となった。その名もBE STREET WEEKND L.A。8月29日（土）、30日（日）の2日間、場所はダウンタウンのアーツ・ディストリクトにあるザ・コンテナー・ヤードで行われた。会場は倉庫がいくつにもつながっていて、中庭がある作り。インドアではアーティストたちがライヴ・ペインティングをやっていたり、様々なストリート・ブランドがトレードショーのスタイルで出展していたり、ゲームセンターがあったり、スケートランプがあったり、ステージではDJやライヴがあったり、中庭のア

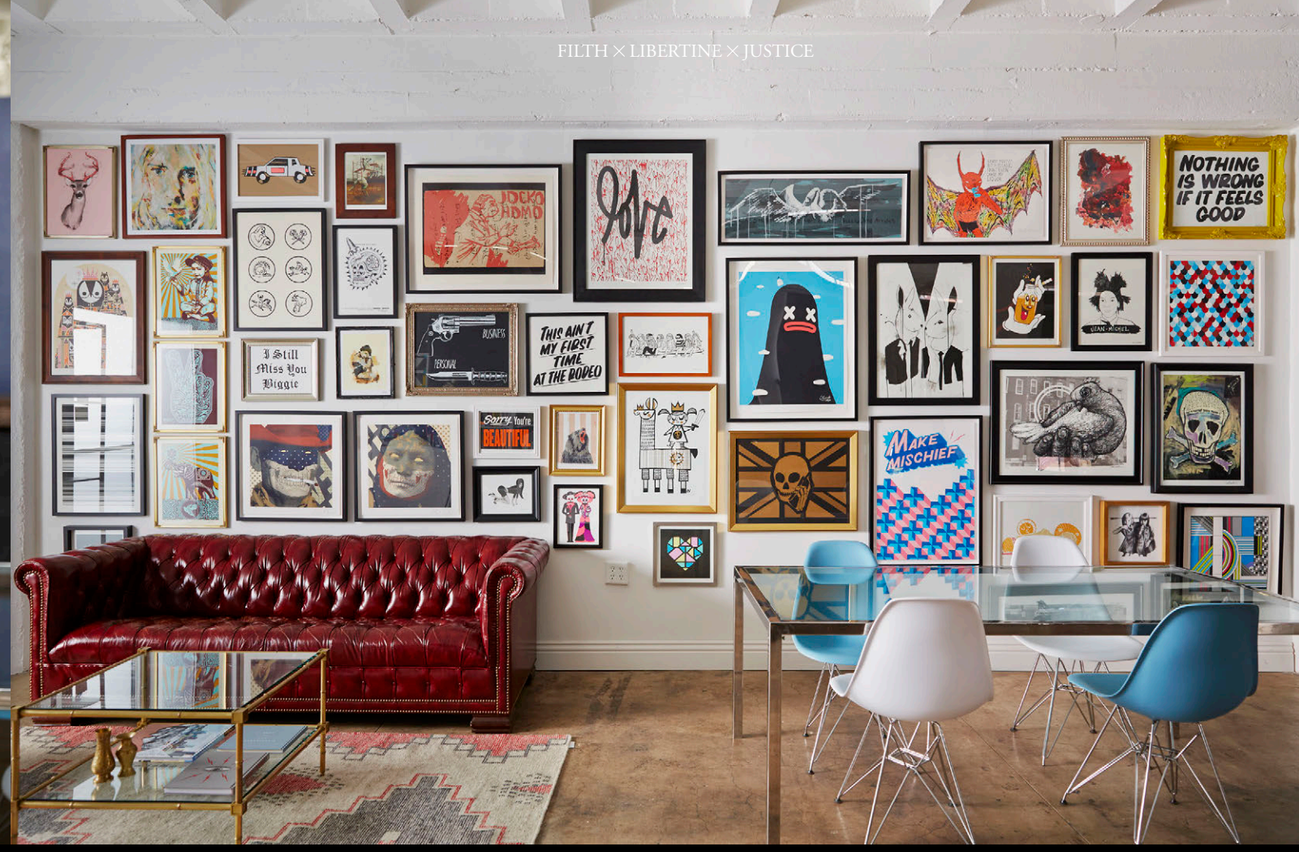
ウトドアでは飲食の屋台トラックがいろいろあったり、みんなチルしてみたり……と、これはもうストリート・カルチャーのお祭り。

　今回音楽を担当したのは、LAが誇るSelection軍団で、アンドレ・パワー、ジョー・ケイ、Esta、Anjo、Waldo、DPAT他が熱いDJプレイを展開して、Starr、アーロン・コーエンのライヴも行われた。ストリート・ブランドでは、XLARGE, REBEL 8、MISHKA、Primitive Apparel、RIPNDIP、Whatthehellz、Dimepiece LA、TEALER他が出展。ライヴ・ペインティングのアーティストでは、アーロン・カイ、ジェイムス・ハント、トファー・チン、ルーク・ペレティエ、そして日本からもChocomooが参加。スケートパークまでアートをMADSTEEZが担当している徹底ぶり。DTLAというロケーションならではの良いイベントでした。F

www.be-street.com



ファウンダーのソニア・テリ



ダウンタウン（DTLA）のオフィス内に飾られたポスターの数々。梱包と発送はここで行う

POSTER CHILD PRINTS

ポスター・チャイルド・プリンツ

アートをシルクスクリーン印刷ポスターでリーズナブルに提供

アートを手軽な価格で買って生活の中に手軽に取り入れる。そんな発想で、ポスターがけっこう流行っている中、ポスター・チャイルド・プリンツはその先駆けで、なおかつ、シルクスクリーン印刷で限定モノというこだわりで、他とは違う立ち位置のため根強いファンも多い。ファウンダーのソニア・テリをダウンタウンのオフィスに訪ねた。

PHOTO : Yuri Hasegawa

FLJ　アートの世界に入ったきっかけは？

ソニア　最初はファッションの世界にいたの。でもインスピレーションをもらえなくなって、それでシェパード・フェアリーの雑誌『SWINDLE』で働き始めた。その仕事を通じていろいろなアーティストと知り合いになって、アートショーにも行くようになって。そこで思ったのが、ギャラリーに出ている作品はどれも高額で、ファンにはもはや手を出せないものになっているなってことで。そこでファンにとってアーティストの作品が入手しやすいようにするにはどうしたらいいのかって考えたの。ファンの方はずっとアーティストを追っかけてきてるのに、作品が高額になって買えなくなってしまうのはフェアじゃないと思って。それで2009年にポスター・チャイルド・プリンツを立ち上げて、作品をシルクスクリーン・ポスターにして、高額な作品を1万ドルとか2万ドルとかじゃなく、買いやすい価格で提供することにした。サインも入れて、ナンバーも入れて、オーセンティック感はちゃんと残した。今でこそポスターは人気になったけど、私が始めた頃はまだ全然そうじゃなかった。それに、私たちが作ってるポスターはデジタル・プリントではなく、シルクスクリーン印刷なの。だから、アーティストもシルクスクリーン印刷のオーセンティックな価値を認めてくれてるし、ポスターを購入してくれるファンもその価値を認めてくれてる。シルクスクリーン印刷にはディテールの細かさやクラフトマンシップがあるのが魅力。アーティスト、プリント職人と一緒になってポスター作りをするのも楽しいわ。それに、完売になってしまえば、もう増刷もない。どれもが限定品なの。すぐに完売になってしまう人気アーティストもいれば、完売するまで時間はかかるけれど、今後有望なアーティストもいるわ。

1枚1枚、丁寧にサインとナンバーが入れられている

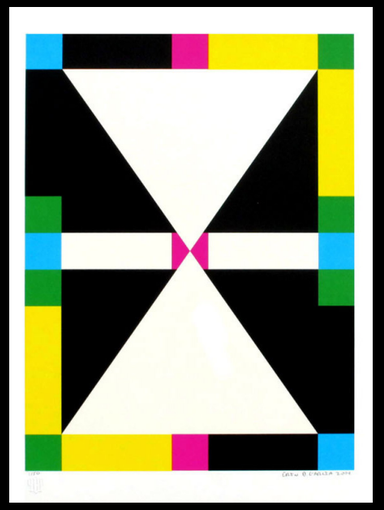
SOUTHERN CALIFORNIA ISSUE

POSTER CHILD PRINTS

Tim Armstrong - Skull & Crossbones

Neckface - Chase You ???

Shepard Fairey - Obey Peace Series 2 (Doves)



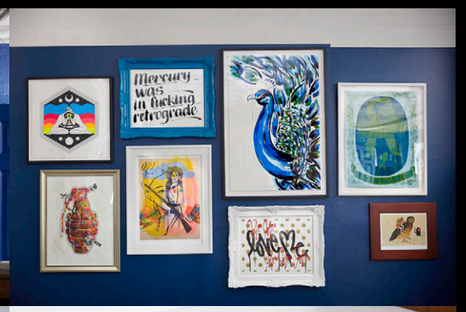
Erin Garcia - ROTATION 1

FLJ　今後有望な新しいアーティストも発掘してるんだ？

ソニア　そうよ。

FLJ　お勧めのアーティストを教えて。

ソニア　まず、ASBPっていうブルックリンの二人組はお勧めよ。アーティスト集団のFAILEからの紹介だった。彼らのポスターを制作中なの。あと、新しいアーティストでラヴィ・ズパ。シェパード・フェアリーからの紹介。「ラヴィは素晴らしいから仕事をするべきだよ」って言われて。彼の作品をいくつか買ったんだけど、私のお気に入りなの。ポートランドのアーティストで、コラージュを使った作品が素晴らしい。あと、バルセロナのアーティスト、BASIK。彼とも仕事を始めたんだけど、ミューラル・アートをやる人で、ストリート・アートを得意とする。ラングリー・フォックスも素晴らしいわ。あそこにある女の子二人のアートがそう。



鉛筆で描いてるの。あと誰がいるかしら……。

ソニア　本当にたくさん持ってる。普通のアーティストだとアイデアは2〜3個って感じだけど、ティムはたくさん！（笑）　自分の作ったものに対する情熱もスゴいし。私たち、お互いに信頼し合ってるから仕事がしやすい。私自身、ティムは大好きなアーティストだし。

FLJ　ティムの場合、LA、東京とポスター・チャイルド・プリンツでアートショーを手がけたわけだけど、普通にアートショーもよくやってるの？

ソニア　いろいろなギャラリーでキュレーターをやった経験があるからね。今はあまりショーをやらないんだけど、ティムの場合は特別だったの。LAのショーはティムにとって最初のショーで、私たちの間では何年も話し合って温めてたこと。そこにシェパードが興味を持ってくれたから、ティムもシェパードのギャラリーでやりたいってなって、それで実現したの。ティムとシェパードもすでにつながっていたから、一緒にやりやすかった。大成功だったし、大きな転機になったと思う。ティムもオープニングでライヴをやったし、シェパードもDJをやって、本当に楽しかった。また時間を置いて違う街でやりたいと思ってる。私たちの間で、「日本でできればどこでもできる」って話してたのよ（笑）。一度ハードルを上げて成功したから、もうどこでだってできるわ。

FLJ　スケーターのチャド・マスカのポスターもあるんでしょ？

ソニア　彼もクールよ。シルクスクリーン・ポスターをやるのは初めてで、全く異なるバックグランドの出身なの。彼は自分のアートのキャリアも進めてるわ。仕事を一緒にしていてスゴくクールな人よ。

FLJ　他にもグラフィティ・アーティストのSABERのポスターをやったり、いろんなバックグラウンドのいろんなアーティストを手がけてるのが面白いなと思って。けっこうアーティストの幅が広いよね。

ソニア　幅は広いわ。必ずしもアートが最初のバックグラウンドじゃない人もいるのも面白いし。音楽アーティストやスケートボーダーからアートをやるようになった人たちは面白い。Grouploveっていうバンドのシンガーの Hannah Hooperも素晴らしいアーティストよ。インキュバスのシンガーのブランドン・ボイドも才能あるアーティスト。グラフィティ出身だと、ダブスマイラ、Neckfaceもいるわ。あと、オーナメンタル・コニファーが面白い。彼はモーターサイクルの世界では有名な人で、カスタムでレザー・ジャケットやヘルメットを作っている。私自身、彼のタイポグラフィが大好きで、インスタグラムでフォローしてたの。

FLJ　ポスター・チャイルド・プリンツの目標とすることは？

ソニア　みんなにアートを提供しやすくして、ハッピーにしたい。家の中にもアートを飾ってほしいしね。F

http://posterchildprints.com

ビル・ヘブナー。SLICKが手がけたジム・フィリップスへのトリビュート作品の前で

THE SEVENTH LETTER

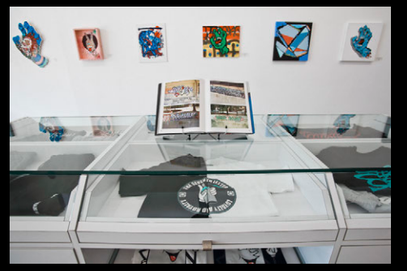
ザ・セブンス・レター

LA グラフィティ・クルーのフラッグショップ兼ギャラリー

PHOTO : 217...NINA

日本から来ていたQP。展示中の自分の作品の前で。屋上の上もQPが描いたもの

取材時に展示されてた、ジム・フィリップスのスクリーミング・ハンドの30周年のアート作品。
様々なアーティストがジム・フィリップスからの影響と彼に対するリスペクトを形として作品にしていた



LA のグラフィティ・クルーの MSK、AWR。そこのケイシーが立ち上げたのがザ・セブンス・レターだ。フェアファックスに 2010 年に Known Gallery をオープンした後、2013 年には向かいにフラッグショップ兼ギャラリーをオープン。今ここを取り仕切るビル・ヘブナーに話を聞くとともに、所属アーティストの SABER と ZES を訪ねてダウンタウンに向かった。

BILL HEBNER

ビル・ヘブナー

FLJ　ビルは元々FRESHJIVE出身だけど、ザ・セブンス・レターをどうまとめていったの？

ビル　ケイシーが '80年代にMSK、AWRといったグラフィティ・クルーを作ったのが始まりで、ザ・セブンス・レターは'90年代の半ばから後半にかけて作られた、クルーに所属するメンバー全員のためのブランドみたいなものなんだ。ブランドはスゴく順調で、日本でも上手くやってた時期があったんだけど、僕が入る時はどうしたらもっとブランドとして確立できるのかっていう相談を受けたんだ。最初は小さな店を出すアイデアだったんだけど、よくありがちなストリート系のショップにするんじゃなく、もっと大きくてパワフルなものを作ろうってなって。彼らがショーをやる時に、セブンス・レターをレペゼンして誇りに思えるようなショーをやってあげたいと思ったんだ。それでブランドの卸売もやめた。変なところで売られるのが嫌だったからね。ちなみに、向かいにあるKnown Galleryは本物のアート・ギャラリーで、これもケイシーがアーティストたちのために作ったものなんだ。昔はグラフィティ・アーティストたちはどこに行ってもショーをやらせてもらえなかったからね。それで、セブンス・レターの方では、アートと商品の両方を見せようってことになった。Known Galleryの作品は誰もが買えるような値段じゃない。SABERやEWOKのファンのキッズは作品を買うことができないんだ。ここでは、どのショーをやる時にもマーチャンダイスを作ろうってなって。Tシャツも限定モノにして、キッズが買って家に持って帰れるものを作ったんだ。だからギフトショップのあるギャラリーっていう感じさ。Known Galleryとはひと味違うものを作るのがここのアイデアなんだ。

FLJ　ここがオープンした日は？

ビル　2013年12月7日。オープニング・イベントは、The World Famous Seventh Letter TWFSLで、156人のクルーの中でも親しいアーティストを招待したんだ。156点の作品をオープン直前の45分ですべて展示を終わらせたよ（笑）。

FLJ　その後のショーは？

ビル　KRUSHのLAndmarked、TRAVのショーも良かった。デニス・モリスの写真展も良いショーだった。

FLJ　今ここで展示中のジム・フィリップスのショーについて聞かせて。

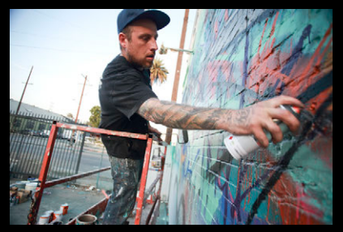
ビル　ジム・フィリップスのスクリーミング・ハンドの30周年を祝してのアート・ショーなんだ。サンタクルズから話が来て、うちでホストすることになった。それでセブンス・レターのアーティストもキュレートすることになった。腕がいいだけじゃなくて、ジム・フィリップスに影響を受けたり、ジム・フィリップスを大好きなアーティストに参加してもらった。結果、今までで最高のグループ展になったと思うよ。みんなスゴい情熱を持ってやってくれたし、ジムの歴史、影響を形にできたからね。SLICKなんか30枚のボードを使った彫刻作品を作ってくれたし、プリントやTシャツも作ってくれた。ジム・フィリップス本人はオープニングに来る予定がなかったんだけど、当日来てくれて、普段絶対にしない握手までみんなとしてくれたよ。彼が握手をしない理由は骨ガンなのに、「例え2年かかったとしても全員と握手するよ」とまで言ってくれたんだ。あれには感動したね。

FLJ　今後の予定は？

ビル　ウィリー・Tの写真展を12月のクリスマス前までやるよ。ロンドンのピンナップ・ガールたちの写真なんだ。その後はマイク・ジャイアントのショーが控えている。KRUSHの2回目のショーもやるよ。最初のショーは好評につきすぐにソールドアウトになったから、2回目が楽しみなんだ。あと、オープニングでやった156人のショーのワールド・ツアーをやりたいと思ってる。F

SABERとZESの二人が手がけた、ダウンタウンのサンタフェ・アヴェニューにある巨大な壁の作品

SABER



SABER & ZES

セイバー＆ゼス

FLJ　今二人で取り掛かっているのは？

SABER　ここはダウンタウンLAのアーツ・ディストリクトなんだけど、俺たち、'90年代終わりにこの界隈でよくボミングしてたんだ。もちろん合法じゃないよ。この辺もヒップスター向けのおしゃれな店ができたりして、随分変わった。でもタコス屋のLa Reynaはまだあるから、さっきも合間に食べてきた（笑）。今描いてるのは、ZESとのコラボのミューラル作品で、このビルの壁一面に何層にも次元が重なったものになるんだ。20年に渡るLAのグラフィティのレガシーだね。

FLJ　グラフィティの世界に入ったきっかけは？

SABER　俺はグレンデール郊外で育ったんだけど、家族は俺がアーティストになるのに賛成で、応援してもらってたよ。ドローイングが自分には合ってるなと思ったし、描いていると気持ちが落ち着いたんだ。それで、いとこから教えてもらって13歳でグラフィティを始めた。地元の壁で描きまくって、MSK、AWRに加わった。SABERって名前は最初はアイデンティティじゃなくて、最高の文字の組み合わせだと思ってたんだ。文字の抽象化、文字のコミュニケーションがグラフィティだからね。そこにはエモーションも込められているし。SABERの名前は後にアイデンティティになった。俺はもう25年アートをやってることになるね。

FLJ　最近受ける影響、インスピレーションは？

SABER　今は子供がいて、毎日騒いでるし、子育てで忙しい。家の中もすぐメチャクチャになってしまう。だから、子供が最大のインスピレーションかな（笑）。アーティストで言えばリストは永遠に続くよ。ピカソ、ガウディ、ヴァン・ゴッホからフランシス・ベーコンからモネー、CHAZに、LAの偉大なるグラフィティ・アーティストたちの数々……。でもやっぱ今は子供かな（笑）。

FLJ　SABERが手がけた伝説のLAリバーの巨大なピースも今は消されてなくなってしまったんだよね。

SABER　コンクリートのバンクに描いたピースだね。あれは1997年に描いたものなんだ。250×55フィートの巨大なピースだった。だけど、アメリカ陸軍工兵司令部によって2009年に消されてしまったんだ。国の陸軍機関が出てきたんだよ。連邦政府のお金を使って。何て光栄だなことなんだ！　だけど前もってわかっていたら、自分で消してたのに。あのピースは12年もあそこにあったんだ。スゴいことだよ。でも、外で描いものはいつかは消えてなくなるものなんだ。

FLJ　2010年に制作したアメリカの国旗をモチーフにした作品はけっこう問題になったと思うんだけど。

SABER　国旗にアブストラクトなペインティングをした作品だよね。でもあれはアートだから、政治的なリアクションを引き起こそうとしてやってたわけじゃないんだ。それでも、俺の制作した国旗の映像はいろんな右翼系のウェブサイトのフロントページにアップされた。そこに書き込まれたコメントを見ると、俺を探し出して八つ裂きにするなんて書いてあるし、実際に脅迫状も来た。TVのニュースにも取り上げられた。だけどあいつらLAになんて来ないし、来たら来たで俺は笑顔で返すつもりだったよ（笑）。俺は国旗を汚したつもりはないし、俺はてんかん持ちだから、アメリカ人として、保険なしでどうやってこういう病気と付き合っていくのかを伝えたかっただけなんだ。

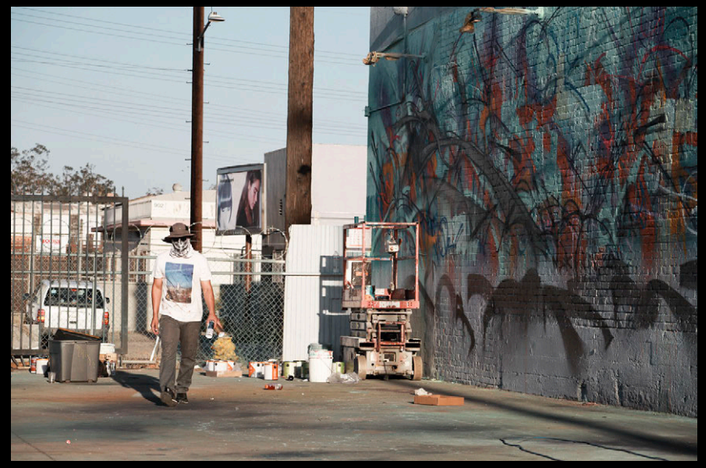
FLJ　SABERにとって、アート、グラフィティとは？

SABER　アートは俺にとってスゴくポジティヴなものなんだ。アートは俺にとってNO.1の使命でもある。グラフィティは俺にとってカタルシスで、アートはもっと大きなスケールで捉えている。アートは閃きだからね。F

http://theseventhletter.com

The Seventh Letter Flagship and Gallery

346 N Fairfax Ave, Los Angeles, CA 90036 USA
TEL: 323-549-0007
営業時間：11:00〜19:00（月曜〜土曜）
12:00〜18:00（日曜）



ZES

ザ・セブンス・レターの屋上で

DENNIS MORRIS

デニス・モリス

LA に移り住んだロンドン出身の伝説のフォトグラファー

ボブ・マーリーやセックス・ピストルズの写真で知られる伝説のフォトグラファー、デニス・モリスに LA で出会った。シェパード・フェアリーとショーをやるために LA に来て、LA が気に入ったのでしばらくいようかと思ったら、そのまま居ついてしまったという。デニスの語ってくれた伝説の裏話、クリエイティヴに対する姿勢はどれも刺激に満ちたものだった。

FLJ　出身はロンドンですか？

デニス　生まれはジャマイカで、小さい頃にロンドンに移ったんだ。

FLJ　8歳の頃からカメラマニアだったんですよね？

デニス　9歳だよ。僕は教会に通う大人しい子供だった。教会に写真クラブがあって、暗室に行くと年上の少年が写真を現像してたんだ。そのプロセスを見ててマジカルだと思ったし、これは自分のやりたいことだって思った。その時以来、あらゆる瞬間をカメラで撮影するようになったんだ。

FLJ　それで、11歳で新聞「デイリーミラー」の表紙に写真が使われるんですよね。

デニス　教会からの帰り、いつもスピーカーズ・コーナーに出かけて写真を撮っていたんだ。ある日曜日、後でわかったんだけど、PLOのデモをやってて、それがどんどん規模が大きくなって暴力的になっていったんだ。そこで僕が撮った写真の中にはPLOのリーダーが写っていて、エージェンシーがその写真を16ポンドで買い取ったんだよ。

FLJ　ボブ・マーリーとの出会いは伝説だとは思いますが、今一度語ってもらえますか？

デニス　当時ボブ・マーリーはジャマイカのレゲエ・ミュージックの新しい声となっていて、ジャマイカ人コミュニティの中でスゴく人気があった。音楽の大ファンだった僕は、雑誌「メロディ・メイカー」「NME」をよく読んでいたから、ボブ・マーリーが初のイギリス・ツアーで来るのも知っていた。それでツアー1日目にコンサートをやってるクラブに行って、出待ちしていたら、ボブ・マーリーが登場したので、「写真を撮ってもいいですか？」って聞いたんだ。そしたら、「ヤマン、来なよ」って。それで会場に入って、サウンドチェックを撮影させてもらった。休憩中に「イギリスで黒人の若者でいることはどう思う？」とか聞かれたし、僕にはジャマイカの記憶がなかったから、「ジャマイカはどんなところ？」って聞いたんだ。そしたらボブに気に入られてね。「ツアーに付いて来ないか？」って言うんで、「イエス」って答えて。翌朝には家を出て、ホテルの部屋に向かったよ。当時のツアーはバスではなく、バンでの移動で、ボブがバンの中で後ろを振り返ってる有名な写真はその時に撮ったものだよ。ボブが振り返って、「デニス、準備はいいかい？」って聞いてきたんだ。季節は冬だったし、ボブはまだ無名だったから、大変なツアーだった。ある日、雪が降って、バニー・ウェイラーとピーター・トッシュは、それがジャーからの何かのサインだと思ってしまい、このバビロンを離れるべきだってなって、ツアーを中止してジャマイカに帰ってしまったんだ。その2年後、彼らは戻ってきて、僕はレコード会社に連絡を取ったら、「ボブは君のことを覚えているよ」って言われて。それでフォトパスをもらってライヴを撮影した。素晴らしい写真が撮れて、僕の写真は「メロディ・メイカー」紙、「タイム・アウト」誌に掲載されるようになった。あとはみなさんご存知の通りさ。

FLJ　ボブ・マーリーはどんな人でしたか？

デニス　ボブ・マーリーは本当にマジカルな人だった。彼はそういう目的を持って生まれた人だ。彼にはメッセージがあったし、自分の目的を知っていた。自分のメッセージを人々に届けることを心に決めていたんだ。神みたいな人だったよ。

FLJ　ボブ・マーリーを撮影してる時ってどんな感覚を持ちましたか？

デニス　不思議なのは、彼の写真をたくさん撮ってきたんだけど、写真スタジオで撮影したものはないんだ。どの写真も、部屋の中で一緒に座ってる時とか、しゃべったり飲んだりしている時で、ポーズを取って撮影したものはないんだよ。彼が手を宙にかざしている写真も、「デニス、どうやって自由になるか見せてあげるよ」って言われて撮ったものだし、彼がジョイントを吸ってる写真も、「デニス、どうやって吸うか見せてあげるよ」って言われて撮ったものなんだ。どれもがランダムに撮ったもので、前もって考えて撮った写真はないんだ。だから、あるがままの姿を撮影しただけで、スゴく自然なんだ。だから、僕が撮ったボブ・マーリーの写真を見ると、その場にいるような感覚になると思う。スゴくパーソナルだからね。

FLJ　デニスの写真は確かに、その場その場の瞬間、ヴァイブスを捉えていますよね。いつも撮影する時はどういう写真になるのか意識して撮影していますか？

デニス　例えば、ボブがジョイントを吸ってる写真は、フィルムの中で3カットしか撮っていないんだ。どの写真も大体が3〜4カット。一瞬の出来事なんだよ。だから撮られる側も僕と一緒だと居心地がいいんだ。「撮り損ねた！もう一度撮らせてくれ」なんて言わないからね（笑）。カメラを持った友達と一緒にいるような感覚さ。僕は瞬間を捉えて撮るだけ。瞬間を捉えてるわけだから、その場のすべてを捉えている。だから、10年後になっても匂いも思い出すし、会話、音楽、部屋のすべてを思い出すんだ。

FLJ　ジョン・ライドンの話も聞きたいんですが。

デニス　ジョンはスゴく才能のある人だよ。僕はジョンと同じ地元で同じ時期に育ったんだ。僕はハックニーで、ジョンはフィンズベリー・パーク。同年代だし、学校をやめてオファーを受けた仕事を始めてるのも同じ。それで最初はウマが合ったんだ。

FLJ　どのようにして二人は出会ったんですか？

デニス　僕の撮ったボブ・マーリーの写真がジョンの目に留まったんだ。ジョンはレゲエの大ファンだからね。それで撮影を頼まれたんだ。

FLJ　セックス・ピストルズの撮影はどうでした？　ボブ・マーリーの撮影とは違いましたか？

デニス　違いなんてなかったよ。どちらも革命的だった。ボブ・マーリーがレペゼンしてたのは、ジャマイカの若者。セックス・ピストルズがレペゼンしてたのは、イギリスの若者。僕がラッキーだったのは、どちらの革命にも加われたこと。しかもパンクスがパンク以外で聴く音楽はレゲエだけだった。レゲエのミュージシャンもパンクの反抗的なアティテュードに共感を覚えた。だからスゴくマジカルな時代だったね。異なるカルチャーから生まれたんだけど、アティテュードは同じだったんだ。レゲエはスピリチュアリティとコンシャスネスを教えてくれたし、パンクは自分が望むものを手に入れることを教えてくれた。だから、両方合わせると、スピリチュアリティとエネルギーの両方を手に入れることができるんだ（笑）。

FLJ　セックス・ピストルズの終わりについてはどう見てました？

デニス　避けられないことだったね。時代もあると思う。パンクは現在進行形のものだったから、常に爆発していなきゃいけない。だけど、マジカルな瞬間っていうのは長続きするものじゃない。例えて言うなら、良いセックスだね（笑）。良いセックスは短いし、あとあとまでずっと覚えてる（笑）。良かったから忘れられないんだ。

FLJ　リチャード・ブランソン（ヴァージン・レコード社長）、ジョン・ライドンと行ったジャマイカの話も有名ですね。

デニス　あれは素晴らしかったよ。ヴァージンがレゲエをやることになってね。タイミング的にも最高で、リチャード・ブランソンは頭のいいビジネスマンであると同時に、良いハートの持ち主だった。3人でジャマイカに行ったんだけど、ジャマイカの空港に着いた時に、ラスタのグループがいて、ジョンを見つけると、「ジョニー・ロットン、マン！　ゴッド・セイヴ・

Bob Marley London 1978

John Lydon, Sid Vicious, Marquee Club, London 1977

ザ・クイーン、マン！」って声をかけてきたよ。その時すべては上手くいくなと思ったね。彼らはパンクを理解していたんだ。僕はすでにボブ・マーリーの撮影でジャマイカに行ったことがあったから、すでにジャマイカは詳しくて、初めてジャマイカに来たジョンをリー・ペリーのスタジオに連れていったり、ビッグ・ユースとジョンの2ショットを撮ったり、チャンネル・ワン・スタジオに行ったりしたよ。あの旅がきっかけでジョンはパブリック・イメージ・リミテッドを始めたんだ。スタジオでダブを聴いて大きな影響を受けたからね。ジョンがパブリック・イメージ・リミテッドを始めると、僕はバンドのロゴのデザインを担当して、最初のシングル、最初のアルバム、『メタル・ボックス』を手がけた。それが成功すると、アイランド・レコードからオファーがあって、アート・ディレクターになって、A&Rとしてもスリッツ、リントン・クウェジ・ジョンソンを契約して、マリアンヌ・フェイスフルの『ブロークン・イングリッシュ』を担当するようになった。

FLJ　パブリック・イメージ・リミテッドでジョンは大幅なイメージ・チェンジを図りましたが、新しいイメージ作りをデニスがジョンと一緒になってやりましたよね？

デニス　スゴくクリエイティヴな時代だったから、自分のやりたいことをやらせてもらった。ジョンとパブリック・イメージ・リミテッドの話をしてる時に、僕は「略してPILにしないか？」って言ったんだ。そこから、アスピリンのピル（錠剤）のイメージでPILのロゴを作った。『メタル・ボックス』も、話をしていてタイトルを聞いた時に、自分の通ってたハイスクールの向かいがメタル・ボックス・ファクトリーっていう工場だったことを思い出してね。それで工場を見に行ったら、レコードと同じサイズの映像フィルムの缶を作っていたんだ。それで、ロゴをエンボス加工したらいくらかかるのか工場に聞いておいたんだ。そこからヴァージンに行って、「メタル・ボックスにレコードを入れてリリースしたい」って言ったんだ。「制作費がかかるよ」「待ってくれ」。工場に聞いたコストも伝えたところ、限定でメタル・ボックス入りのアルバムを出せることになったんだ。

FLJ　当時のジョンを撮った写真も、きちんとスタイリングやヘアメイクで決めたハイエンドな写真で、当時のパンクとは次元の違う写真でしたよね。

デニス　パンクからどこまで遠く離れて違うことができるのかを考えたんだ。ジョンはマルコム・マクラーレンやヴィヴィアン・ウエストウッドと全く関係のないことをやりたがっていたし。それで、キングス・ロードでショップをやってた友達のケニー・マクドナルドがズート・スーツを売っていて、当時はそういう服を着る人はほとんどいなかったから、彼に衣装を担当してもらって、僕はイメージを作っていった。アルバムが出た時、みんな驚いたよ。でもあのイメージが後続のニュー・ロマンティックスに大きな影響を与えたんだ。

FLJ　デニスは自分でも音楽活動をやっていますよね？

デニス　アイランド・レコード時代に仕事に飽きて、Basement 5っていうバンドを結成したんだ。パンクとレゲエの間のギャップを埋めようと思って、この2ジャンルのフュージョンの音楽にしたんだ。スゴく実験的だったけど、バッド・ブレインズ、リヴィング・カラー、フィッシュボーンといったバンドがBasement 5からの影響を認めているよ。でも時代を先取りしすぎてたんだろうね。今になってたくさんのオファーをメールとかでもらうんだ。だからってわけじゃないけれど、僕はまた音楽をやってるんだ。ビリー・アイドルのギターのビリー・モリソン、クイーンズ・オブ・ザ・ストーンエイジのクリス・ゴス、マリリン・マンソンのトゥイーギ、ヒップホップのHit-Boyと一緒にやってるよ。Basement 5はこうあるべきだっていうサウンドだよ（笑）。

FLJ　最後に、クリエイティヴィティの秘訣は何でしょうか？

デニス　ものを見る時に、視界に入れてるだけの人は多いんだけど、意識的に見ている人は少ない。ものを聞く時に、何かを聞こうとする人は多いんだけど、意識しなくても聞こえてくる人は少ない。だから、視界に入れるだけじゃなく、意識的に見ること。聞こうとはせずに聞こえてくるようにすること。そうするためには、心を開き、目と耳と身体、魂を開かないといけない。アート、音楽、クリエイティヴィティっていうのは自分自身の内側の自由だからね。見た目を気にしてたらいけない。自分のやってることを信じないと。

www.dennismorris.com

Lee Scrach Perry in his studio in Jamaica 1976

John Lydon in Jamaica 1979

CRYSTAL LAKE

クリスタル・レイク

新作『The Sign』とそのリリース・ツアーで見せるバンドのネクスト・レベル

今や、日本が世界に誇るメタルコア・バンドとなった Crystal Lake。3rd アルバムとなる最新作『The Sign』は、日本だけではなく、アメリカ、オーストラリア、UK ／ヨーロッパ、韓国でもリリースされ、世界中で大きな反響を呼んでいる。現在回っているアルバムのリリース・ツアーでは、これまで以上にその世界観を強力に形にすることによって、バンドが確実にネクスト・レベルへと進んでいることを証明中だ。12 月 18 日に恵比寿 LIQUIDROOM で行われるツアー・ファイナルでは、新たな挑戦もあるとのことなので、ファンだけではなく、Crystal Lake を気になっている人は、絶対体感すべき見逃さないライヴになりそうなのだ。

L to R: Yudai (Guitar), Ryo (Vocals), Teru (Bass), Shinya (Guitar)

FLJ　最新アルバム『The Sign』をリリースしてからの反響はどう？

Ryo　俺らのことを前から好きだった人もスゴい良いって言ってくれるし、新しい人たちの反応も良くて。特にライヴでは、みんなアルバムを聴き込んでくれてるみたいで、スゴい一緒に歌ってくれるし、スゴいポジティヴな反応が返ってきてますね。

Yudai　お客さんの反応は、アルバム出した中で今回が一番良かったよね。昔自分たちが見てきたような、前の方はパンパンで全員で合唱するみたいなのがあったりして、ちょっとビックリしてますね。

Shinya　ツアーが始まってすぐの時からそういう感じだったんで。

Ryo　ラップ調の曲とか、サビはクリーンがメインみたいな曲にも、けっこうポジティヴな反応をしてくれて、新しい試みも好意的に捉えてくれるのはうれしいですね。

FLJ　新しいことをやっても、それをカッコいいと思って受け入れてくれるってことは、Crystal Lakeがやろうとしている世界観がちゃんとお客さんに伝わってるってことだよね。

Yudai　そうですね。今回、かなり世界観を作って、自分たちが表現したい色やサウンドをライヴでそのまま体現できて、それがお客さんに伝わっているのは期待通りで、うれしい部分ですね。

FLJ　リリース・ツアーはどんな感じで進んでるの？

Yudai　スゴく良いですね。前回のツアーよりも確実に良くなってるし、また来年も絶対に来たいって思える場所が増えました。あと、1時間以上のロング・セットを、ストレスも不安も全然なくできるようになってきました。前は、長いからヤバいなとか思ったり、終わった時に長かったって思う時もあったけど、今は全然なくて、ロング・セットを充実してできてます。

Ryo　新しいアルバムを通して、ライヴでも表現できることが増えたりして、ライヴとしての完成度も高くなってきてますね。場所によってはダブル・アンコールがあったり、お客さんにもそれが伝わってるというか、短く感じるライヴができてるのかなと思います。

Yudai　決まりごとみたいな感じじゃなくて、本当に求めてるなっていうアンコールだよね。この前そうじゃない感じのアンコールがあった時、Ryoが「うるせー!!」って言って（笑）。

一同　爆笑

Yudai　嘘っぽいアンコールだったから（笑）。こっちも全力でやるから、お客さんも本気でアンコールって言ってくれてるのはうれしいですよね。

Shinya　去年のツアーだと、一つのライヴで4〜5バンド出てたんですけど、今回は多くても4バンドなので、必然的に自分たちの持ち時間が長くなるんです。でも、初日の千葉LOOKのライヴが終わった時に、「あれ？ もう終わったの?!」っていう感じで意外だったんですよね。去年のツアー・ファイナルでロング・セットをやった時は長かったんですけど、この1年の間にいろんなところでライヴをしてきて変わったのかもしれないです。

FLJ　お客さんの反応が良くなって、ライヴ中のテンションが上がって、時間が過ぎるのが早く感じるっていうのもあるのかな。

Yudai　それもあると思います。でもどちらかと言うと、お客さんに左右されず自分たちのモチベーションを上げてくところに比重を置いているので、もちろんレスポンスが返ってくればテンションは変わるかもしれないけど、それよりも自分たちのバンド良さを出すことを常に意識してますね。

FLJ　今回のツアーで印象に残ってる場所はある？

Ryo　俺は福岡かな。一番熱いというか、お客さんと自分たちの熱量が完全にシンクロしてたというか。神戸もスゴかったんですけど、福岡の方がグッとくるものがありましたね。

FLJ　前回福岡でやった時もそうだったの？

Ryo　福岡には前回の自分たちのツアーでは行けなくて、REDLINE RIOT TOUR 2015（以下、REDLINE TOUR）やMONSTER ENERGY OUTBURN TOUR 2015（以下、OUTBURN TOUR）で行ったんですけど、OUTBURN TOURでは自分たちの思ってたようなリアクションは返ってこなかったし、自分たちもあまり良いライヴができなかったんです。そういうのもあって、今回の福岡はかなり良かったですね。

Yudai　僕は八王子ですね。やっぱり自分の地元だし、初めてライヴをやったライヴハウスなので。

FLJ　スゴいビチャビチャになってたライヴだよね？（笑）

Yudai　超ビチャビチャ（笑）。まさにあれが、自分が高校生の時に観て、「こんなライヴやりたいな！」って思ったようなライヴだったんで、自分たちのツアーであいうライヴができたっていうのは、スゴい感慨深かったです。

Shinya　最前列のお客さんはグッチャグチャで（笑）。

Ryo　お客さんが意識なくなりかけてて、曲が終わっても気付かないですよ（笑）。

FLJ　危ない危ない（笑）。

Yudai　そういうライヴを増やしたいなって思いますね。一体感もハンパないし。

Shinya　俺は仙台ですね。仙台って自分たちには茨の道って感じだったんですけど、そういう中で、ソールドアウトできたんで、そこは正直ビックリしました。青森とか山形とか、お客さんが東北中から来てくれてたんですよ。今までそういうことってあまりなかったんで、スゴいうれしかったし、広がってきてる感はありましたね。

FLJ　12月18日に恵比寿LIQUIDROOMでツアー・ファイナルを迎えるけど、ファイナルはどんなライヴになりそう？

Yudai　自分たちがこのファイナルで、エンタテインメントとして見せたい仕組みのイメージがを大きく分けて3つあるんです。1つ目は、映像を使った効果。今回のアルバムで、自分たちのプレイと洞窟の世界観を利用して、プロジェクションを使ったMVを作ったんですけど、それを実際に再現したいなと思っています。今までバンドで表現してたものに映像も加えてやってみようっていうのが1つ目で、2つ目は、海外のバンドを呼んでみんなに紹介したいっていう思いがあったんです。普段はイベントで海外のバンドと一緒にやる感じだったんですけど、自分たちで声を掛けて呼んで、一緒にツアーをして日本の良さを伝えて、トレードして今度は自分たちが海外に行けるきっかけを作る。そういうトライが2つ目の要素で、In Hearts Wakeに声を掛けました。3つ目は、単純に規模感を上げて、ソールドアウトして、バンドとして一つやり遂げるっていう目標を持って挑んでる感じです。来年、進みたい道はもちろん決めているので、そこをクリアしてみんなに伝えたいなっていう感じですかね。

Ryo　前回のツアー・ファイナルの代官山UNITから、今回は恵比寿LIQUIDROOMにスケール・アップして、もちろんソールドアウトはしないといけないと思いますし、数的なことも大事なんですけど、大きくなったステージに見合う自分たちの姿っていうのが一番大事だと思っています。個人的には、恵比寿LIQUIDROOMは前回のREDLINE TOURでやった時に、思ったようなライヴができなくてスゴく悔しい思いをしたんで、そのリベンジっていう気持ちもあって、カマしたいなって思っていますね。

FLJ　COUNTDOWN JAPAN 15/16への出演も決まったし、ツアー・ファイナルが終わっても年内は引き続きライヴは詰まってるよね。

Ryo　12月はイベントがギッシリですね（笑）。

Yudai　ツアー・ファイナル感はゼロだよね（笑）。

Ryo　翌日から大阪でイベントあるからね（笑）。

Yudai　COUNTDOWN JAPAN 15/16も楽しみですね！　新しい人に好きになってもらえたら良いですね。

Ryo　自分たちのライヴを観て、衝撃を受けてくれる人がどれだけいるかっていうのが、ものスゴく楽しみですね。

FLJ　『The Sign』は海外でのリリースもされてかなりの反響みたいだけど、海外でのライヴの予定は今のところはないの？

Yudai　まだ決まってはいないんですけど、来年の春から夏くらいまでに行きたいなとは思っています。もちろん来年も国内はガシガシ攻めます！　今回のツアーでも実感している、もっと自分たちの気持ちを伝える「自分たちのツアー」をしたいっていう気持ちがスゴい強くなりましたね。F

http://crystallake.jp

PHOTO: TAKASHI KONUMA (P72, P73)

SiM

シム

最初で最後の武道館

2015 年 11 月 4 日。日本のロック・シーンの歴史に新たな 1 ページが刻まれた。2004 年の結成から 11 年の時を経て辿り着いた初めての武道館は、同時に、最後の武道館だった。武道館でのライヴが決定した当初から「最初で最後」と公言されてる以上、この日集まったファンの期待は確実に高まっていたと思う。ライヴが終わった直後にヴォーカルの MAH がこぼした「もう一回やりたい」という言葉がすべてを物語るように、この日の武道館には SiM への愛が降り注ぎ、SiM にとっても、ファンにとっても、期待以上のライヴになったことは間違いないだろう。ライヴから 2 日後にメンバーをキャッチし、それぞれの思いを振り返ってもらった。

PHOTO : 半田安政 (Showcase)

FLJ　初めての武道館でのライヴ、実際にやってみてどうだった？

MAH　全然実感がなくて。フワフワしてて、気付いたら終わって家に帰っていたって感じです。やっと今、ちょっとずつ実感が湧いてきてるんですけど、ライヴのことを一つ一つ思い出すことは全然できてなくて。

SHOW-HATE　俺も全然実感が湧いてなくて、武道館入って、気付いたら次の日の朝でしたね。

MAH　それはちょっと頭おかしいでしょ（笑）。

ー同　爆笑

SIN　俺も全然実感がないですね。終わった後、みんな友達からメールが50件くらい来てたんですけど、俺は10件くらいしか来なくて。だから、もっと褒めてもらいたいと思ってツイートをして、リプライをずっと読んでいました。

ー同　爆笑

FLJ　それで褒めてもらえた？（笑）

SIN　スゲー褒めてもらえました（笑）。でもいまだに、「あそこ武道館だったよな？」って感じですね。

GODRi　俺は地元の兵庫県から家族、親戚が来てて、ライヴ後に挨拶をした時に、やっと「俺って武道館でライヴやったんやな！」って気持ちになりました。

SHOW-HATE　センター・ステージじゃなかったら、もしかたらもっと武道館でやってる感じはあったのかな？　お客さんとの距離も思った以上に近かったし。

FLJ　あのステージからの光景はどんな感じだった？

MAH　普通だと遠くから人が見てるって感じだけど、ほぼ全方位に人がいて、さらに上からも見られてるってスゲーなって。もう二度とやらないって言った以上、ああいう光景はもう二度と見れないだろうなって思う。貴重な体験でしたね。

FLJ　あのステージだと、普段お客さんに見られないところまで見られるよね。

GODRi　恥ずかしかったですね。裸を見られてるみたいで。

ー同　爆笑

MAH　ステージ上にスピーカーすらないから、もう1万人ぐらい感がものスゴくて。何かスゴいゾクっとして。

SHOW-HATE　した！　ライヴ中、それけっこうみんなやったもん。「みんなが見てる！」みたいな。

SIN　ステージの上はマジで4人だけだったもんな。

SHOW-HATE　でも、快感でもあったけどね。スゴい見られてるっていう。特にアコースティックの曲をやってる時は。

FLJ　確かに、あのステージは格闘技っぽい感じがしたよね。中央にリングがあって、そこでみんなが戦ってるみたいな。

MAH　そうですね。入場もプロレスみたいにして、ステージもリングっぽいイメージで作ったんで、本当に4人で戦ってる感がスゴかったですね。

FLJ　戦いといえば、ステージで炎が上がる演出があったけど、あれはステージに側からはどんな感じだった？

SHOW-HATE　めっちゃ熱いですよ（笑）。

MAH　ファイヤーを使うのは今回が初めてではなかったんですけど、本番の2日前くらいにファイヤー技師の人から、こんな感じでやりますって言われて、「そんなに?!　めっちゃつけるじゃん！」みたいな（笑）。

FLJ　炎の演出もスゴかったけど、ライヴの途中に入れた映像も、クスっとさせるSiMっぽい演出だったよね。

MAH　やっぱり武道館は座席の方が圧倒的に多いので、座席の人をどう楽しませるのかをずっと考えてたんです。アコースティックをやる時にセットチェンジもあったんで、何かで繋ぎたいなと思ってた中で、映像で繋ぎを入れたいなと思って。俺ら、CDとかに付いてる特典のDVDでいつもふざけたことやってるんで、どうせだったらそのノリでやってみてもいいんじゃないかなって。

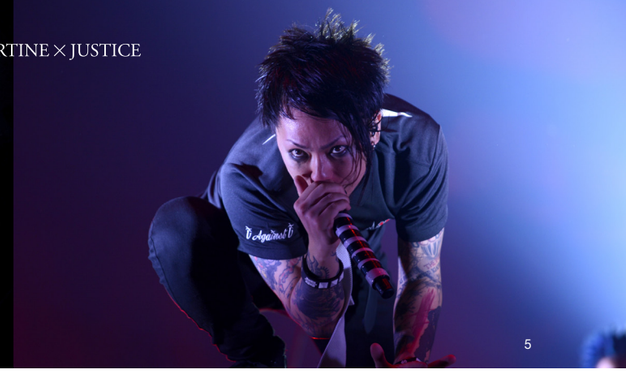
FLJ　あのノリは、SiMだからやれる感じだよね。

MAH　そうですね。カッコつけるだけじゃなくて、面白おかしいところも交えつつ、一本のショーとして良い感じのバランスでできたと思います。

FLJ　アコースティックの話が出たけど、あんなに広い空間で、完全に前振り返った中でプレイするってことは今までなかったと思うんだけど、

1

4



5

SHOW-HATE　めっちゃ緊張しましたよ（笑）。

MAH　でも、アコースティックの時が俺は一番気持ち良かったですね。一音一音にスゲー気を遣うから音楽してる感がスゲーあって、音楽ってこういうことだよなって、リハーサルの段階から痛感しました。1万人近い人を黙らせるわけじゃないですか。あの感覚はスゴいですね。それに、SiMってラウド・ロックだけじゃなくて、ちゃんと音楽できるんだみたいな自信にもなりましたね。

FLJ　**あの日はいつも以上にお客さんのパワーを感じた？**

MAH　武道館でのライヴを形容すると、上から見られてるから、「声が降って来る」って言うらしいんですけど、俺的には、「愛が降って来てる」みたいな感じだったんですよね（笑）。みんなスゲーSiM好きだなって（笑）。どんなに好きでも、2階席の上の方とかだったら素になっちゃうと思うんですよ。でも、ステージから見てた限り、2階席の上の方もみんな手を上げてくれてて、終始温かい気持ちでライヴをやれましたね。

FLJ　**それは、さっき言ってたみたいに、座席の人を楽しませたいっていうみんなの気持ちがあったからこそだよね。**

MAH　SiMが武道館でやるって聞いてまず思うのが、「SiMを座席で見て楽しいの？」みたいなところだと思うんですよ。それであのライヴに来なかった人って、実際いっぱいいると思うし、そこをクリアできないならやりたくなかったんです。アリーナに入れる2000人だけが楽しめて、あとの8000人くらいはボケーっと見てるなんて、そんなの絶対に嫌だと思って。

FLJ　**そういう意味でも大成功だよね。お客さんが本当に楽しんでるのは感じたし。**

MAH　いやあ、マジね、もう一回やりたいんですよね（笑）。

FLJ　**ライヴ後の乾杯の挨拶の時も、もう一回やりたいってボロっと言ってたじゃん。あれが本当の気持ちなんだろうなって。**

SHOW-HATE　センター・ステージが最初で最後ってことでいいんじゃない？

一同　爆笑

FLJ　**今年は野外でのDEAD POP FESTiVALというもう一つ大きいイベントもあったよね。**

MAH　武道館の感覚とはまたちょっと違うんですけど、あのステージだと、遠くの方まで人がいて「わー！」ってやってるのが見えるのがスゲー気持ち良くて。あとは、対バンしてくれたバンドとか、出演しないのに遊びに来てくれたバンドの人たちとかが、スゲー支えてくれてるんだなって。あの日もやっぱりスゴい愛を感じましたね。

FLJ　**お客さんが楽器を演奏できるブースがあったり、ライヴ以外でも楽しめる要素があって、SiMのみんながあのフェスに来てくれる人へのホスピタリティを感じたな。**

SHOW-HATE　遊びに来てくれたアーティストの人とかも、そのブースで演奏してくれたりして、率先して音楽とお客さんの距離を近くしてくれてるのがスゴくうれしかったですね。お客さんも知らない人同士で「KiLLiNG ME」とかやり出して、それでモッシュが起きてたりしてたらしいんですけど、そういうのを聞けてスゴくうれしくて。それをきっかけにバンドをやり始めてくれたらいいなと思いますね。

MAH　十何年振りにドラム叩いたっていうお客さんもいたし、オープニング・アクトのオーディションで選べなかったバンドの子たちが来て、そこで演奏してたと、そういうのもスゴいうれしかったですね。これがもっと全国のフェスに広がっていって、日本のバンドの人口が増えたりしたらスゲー良いなって思います。

FLJ　**夏にDEAD POP FESTiVALを野外でやって、秋に武道館をやって、来年に繋がる大きな道ができたんじゃない？**

MAH　DEAD POP FESTiVALでは2日で1万6000人来てもらったけど、それだけだと対バンの力を借りた感じがスゴく強くて。でも、武道館をやったことで、SiMだけでも10000人くらいのお客さんを呼べるっていう証明にもなったので、DEAD POP FESTiVALをやることに余計リアリティが出るというか、来年のDEAD POP FESTiVALに対してもスゴく自信ができたし、その先の横浜アリーナも「イケるぞ！」ってう感じがスゴくしましたね。

FLJ　**横浜アリーナも楽しみだね。**

MAH　武道館とかまたちょっと違う感じでやろうかなと思ってて。でもやっぱり、ライヴハウスでは見れない、1年に一度くらいのSiM祭りみたいな（笑）。そういうイメージにしたいですね。ホールのライヴは。

FLJ　**今年は、SiMが武道館でやったり、Crossfaithが世界遺産の日光山輪王寺でライヴをしたり、確実にこのシーンで新しい何かが始まっているよね。**

MAH　そうですね。あとはcoldrainがが何かやってくれれば（笑）。AIR JAM以降の核になるライヴハウス感のあるバンドとして、ようやく俺らが結果を一つ残せたかなとはちょっと思ってます。DEAD POP FESTiVAL 2015の時、TOSHI-LOWさんがMCで、「新しい世代を担っていくバンド」って言ってくれたのもスゴいあるんですけど、Crossfaithもそうだし、HEY-SMITHも復活したし、そういう叩き上げのバンドがでっかいことをやり始めて、やっと「俺らの世代どうですかか?!」って言えるようになったかなって。まだまだこれから頑張らないといけないですけど、ホールもやれるようになったとなると、それこそ何かが起きるかもしれないっていう感じですよね。俺ら、横浜アリーナをやったら、次は大阪城ホールを目標にしてるんです。東京だけじゃなくて、各地のホールでもやれるようになったら、それこそ時代が変わるというか、時代の中心にいるって自信を持って言えるのかなって思うんで。時代が動いてきてる感はちょっとずつ出せてきてるかなって思いますね。

FLJ　**バンド単体でのレベルを上げることももちろんだけど、シーン全体の底上げというのも重要になってくるよね。**

MAH　そうですね。SiMが武道館でライヴをしたっていうのは、俺らの一つ下の世代のバンドたちにめっちゃ刺激になったと思うんですよ。「俺らも、武道館を夢のまた夢みたいに思わずに、しっかりやっていきます！」みたいな連絡をくれたりして。だから、俺らはもっと早く下の子を引き上げて「一緒にやろうぜ!!」みたいな感じにするために、今はとにかく行けるところまで行かないといけないと思ってて。「SiMがあそこまで行ったんだから、俺らはもっと上に行こう！」ってみんなが話してくれるようになったらいいなって思ってます。

FLJ　**10月7日に最新シングル「CROWS」がリリースになったけど、前作の「ANGELS and DEViLS」の時は、曲が難しくてレコーディングはかなり苦戦したって言ってたけど、今回はどうだった？**

GODRi　今回もですね。

一同　爆笑

GODRi　「CROWS」は早いし、細かいこと言うと、ツービートのバスドラの入れ方とか。今でまったくやったことないようなことに挑戦したり、その辺はだいぶ苦戦しましたね。

SIN　ベースに関しては、「CROWS」はそんなに時間掛からなかったんですよね。でも、「PSYCHO」のベースだけになるスラップのところがめっちゃ時間掛かりました。

SHOW-HATE　演奏自体はそんなに難しいとは思わなかったけど、今回は音色とかにスゴく時間を掛けましたね。特に、メインになるフレーズとかは、ギター一本一本にこだわって、これじゃない、あれじゃないみたいなのをずっとやって。

MAH　歌はそんなに苦労しなかったんですけど、曲を作るのは大変でしたね。「PSYCHO」とかパズルみたいな曲だし、「CROWS」もシンプルに、でも勢いとSiMっぽさを残してとか。だから、メンバーに渡す前にけっこう練りましたね。

FLJ　**「PSYCHO」の歌詞はスゴくストレートだけど、「CROWS」は聴く人によって捉え方が変わってくる感じだよね。MAHがこの曲で伝えたい本当の意味はどういうことなの？**

MAH　俺的にも実ははっきりしないんです。サビの歌詞でも出てくるんですけど、「俺はあのカラス達の中の一羽なんかじゃない」ってわかってるんだけど、でもまだ今はその一員でいることしかできないっていうパターンと、もう俺はそこにはいないみたいなパターンと。俺はもう明らかに離れた場所にいるっていう感覚で歌っているんですけど、この曲の主人公はどっちの人なのかはなって。だから、「俺はこの時をずっと待っていたんだ」って言う歌詞が何回か出てくるんですけど、そこを抜け出すタイミングを待ってる人たちの気持ちなのかなっていう。そこに中指を立てて「これから出て行くぜ！」みたいな感覚で書いてましたね。いつか見てろよみたいな気持ちを歌ったつもりです。

FLJ　**来年はアルバムのリリースや横浜アリーナでのライヴが発表になったけど、来年はどんな一年になりそう？**

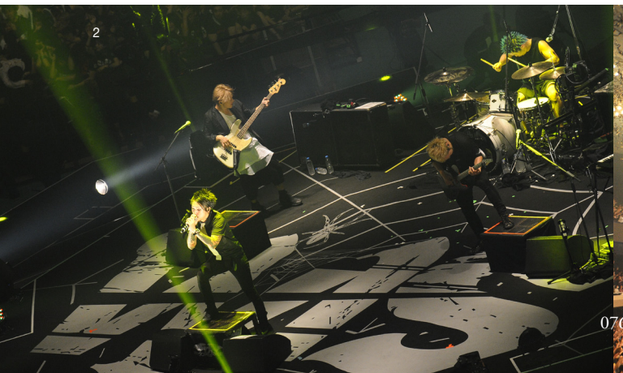
MAH　横浜アリーナが発表になったけど、逆にアルバムのリリース・ツアーは小さな箱も多いんですよ。デカいところも小さいところもやるみたいな、そういう一年になるんじゃないかな。

SHOW-HATE　バンドが大きくなったなって感じてもらえるんじゃないかな。「SiMはこうやっていきたいんだな」っていうのを、お客さんにもう少しわかってもらえるような活動になるんじゃないかなとは思いますね。

MAH　「SiMってどっちに行くの?!」っていうところだったと思うんですよね、今年。武道館やるらしいけど、どんな感じなの？みたいな感じで、お客さんは不安だったと思うんですけど、実際に武道館でのライヴを見てもらったことと、来年のスケジュールを発表していくごとに、「あ、SiMはやっぱりそうなんだ！」って。ブレてないってわかってもらえると思います。来年もスゴい忙しいと思います。ホールって言っても一本だけなんで、基本は今までと全く変わらない、ライヴハウス・ツアーばっかりなので。でも、レコーディングは減るかな?!　今年は、ライヴ以外の日はほとんどレコーディングしてたから。来年はたぶんそこは休めるんじゃないかな？（笑）

http://sxixm.com

PHOTO: 1, 2, 3, 4, 5 yuji honda / 6 半田安政（Showcase）



2

3

6

STANCE

CURATORS OF ORIGINALITY VOL.1

脇田恵子

JESSE

The BONEZ / Blood In Blood Out Tour

12/2　札幌Penny Lane 24　w/ ACIDMAN
12/4　仙台Rensa　w/ SPYAIR
12/9　名古屋Bottom Line　w/ HEY-SMITH
12/10 川崎Club Citta'　w/ Def Tech
12/15 渋谷O-East　w/ KNOCK OUT MONKEY
12/22 大阪Akaso　w/ SUPER BEAVER
12/24 福岡Drum Logos　w/ 降谷建志

2010年、カリフォルニアでスタートしたソックス・ブランド、STANCE。ボーダーから、アスリート、アーティスト、クリエイターまで巻き込んで、個性的で豊富なデザイン、カラーリングだけでなく、様々なカルチャーに根ざす、クリエイティヴなライフスタイルを世界中で発信している。この号からスタートする連載では、様々なジャンルの表現者達にFLJに登場してもらい、STANCEというブランドの魅力と、ファッションを通したオリジナリティについて語ってもらいます。

FLJ　STANCEの好きなところは？

脇田恵子　私は毎日履いてるんですけど、生活の一部みたいな感じですね。スタイリングを組む時も、STANCEのソックスがポイントになるように選んでます。柄や素材や丈感が好きですね。

JESSE　スケーターと深い関わりがあるでしょ。STANCEって「立ち方」だし。普段あまり見えないところだけど、スケーターからしてみたらフリップを決める時とかにチラッと見えたりする。ロゴが入ってる場所にしても、あまり見えないでしょって思うけど、意外と見えるし、左右でデザインが違うのも、グーフィー・スタンスの人とレギュラー・スタンスの人とでは、そのSTANCEによって見える方が違うから左右の柄が違うのかな。

FLJ　最近気に入っているファッションは？

JESSE　自分に似合うものしか着ないので、流行ってるものがあってもそれを着ようとは思わない。色で言えば、最近黒とかスゴい流行ってるじゃん。いろんな黒があるけど、俺は墨の黒が好きで。「このブランドはこの色使ってるんだ」って思うと、買おうかなってなる。

脇田恵子　私も色と、あと素材ですね。オール・ブラックの時もあるんですけど、トップスの素材をニットにしてボトムをレザーっぽいものにしたりします。あと、靴下と帽子は私はマストなんですよ。

JESSE　間違いないね。靴下と帽子はセットで、指輪と時計がセットにもなる。だから、基本的にトップスとボトムはスゴくルーズかな。それで足元周りでキメる。あと、帽子も。

脇田恵子　私はけっこういろんな格好をするんです。その時選ぶ服はその時の気分だし、買う服ってその人を表すじゃないですか。だから、自分はこういうのしか着ないっていうのを決めたくなくて。

JESSE　大事だね。オリジナリティ。

FLJ　今後の二人の活動予定を教えてください。

JESSE　僕はThe BONEZで、Blood In Blood Outっていうツーマン・ツアーを回ります。12月2日の札幌・ACIDMANから始まって、クリスマス・イヴの福岡・降谷建志まで。だから、サンタさんを家で待てないんだよね（笑）。あとは、JESSE'S SHOP & FACTORYっていうTシャツのプリント工場を開いたんで、そこで毎日いろんなものを刷ってます。

脇田恵子　私は、毎月レギュラーでS Cawaii!に出させてもらっています、あと、発売日が決まってないんですけど、来年あたりヤングキングのグラビアページに出ます。F

ストレートシックス　03-5784-3123　www.stance.com

RED LINE DISTRICT

Vol.29 with 小橋賢児

今回で 29 回目になる「REDLINE DISTRICT」は、世界最大級のダンス・ミュージックのフェス、ULTRA MUSIC FESTIVAL を日本に上陸させ、2014 年、2015 年とこれまでに2回、ディレクターとしてULTRA JAPAN を手がけてきた小橋賢児氏がゲスト。

BY:KENTARO SUZUKI(JAPAN MUSIC SYSTEM)

KTR(鈴木健太郎) **ULTRA JAPAN、1年目、2年目やってみて日本のオーディンスの反響とかどうですか？**

小橋　1年目の時は、世の中的にはダンス・ミュージックってまだアンダーグラウンドだし、そこに1万いくらのお金を払って行くような習慣がないじゃないですか。週末のクラブにしても、みんなが行くから行こうっていうのはあっても、コンサート的にダンス・ミュージックのフェスに行くことはなかった。それを日本でローンチしていくに当たって、場所、行政はもちろん、チケットを売るためのPRとかいろいろな仕組みを立てなきゃいけなかったんです。本当にギリギリの中で、できるのかできないのかっていうチャレンジしかなかったですね。それで、1年目は天気も味方してくれて、完売になって、かなり多くの人が来てくれたし、来てくれた人たちがその反応を上げてくれたことによって、来てなかった人、興味のなかった人にもリーチすることができた。そのおかげもあって、今年はけっこう早いうちからいろいろな方々に興味を持っていただきましたね。1年目はビギナーズ・ラックがあるけれど、2年目は本質を見られる。いろいろな声もささやかれたんですけど、2年目は結果として3日間、1年目の倍の動員数になりました。2日間が3日間にもなってますし、1日単位のキャパシティも上げてるんです。2ndステージのアンダーグラウンドのステージにしても、1年目はダイバーシティの地下にあったものを、外で巨大なステージを作ってるんです。去年は割とマスな層で終わってしまったんですが、それはチケットが早く売り切れてしまったことによって、元々ダンス・ミュージックが好きな層だった人たちがチケットを買えなかったからなんです。今回は早いうちにそういう層のラインナップを発表して、そのステージを大きくしたんです。やっぱり初めて来る人たち、ダンス・ミュージックが長い間好きだった人たち、ダンス・ミュージックだけじゃなく音楽がずっと好きな層の人たち、みなさんに楽しんでもらいたいなと思ったので。

KTR **ULTRA JAPANの影響もあって、ダンス・ミュージックの層はかなり広がりつつあると思いますが、今回2年目でお客さんの層が変わったことはありますか？**

小橋　去年来ていた層はもちろん来てますし、ULTRAがなかったら音楽自体に興味がなかったような層も来ているのが大きいかなと思います。いつの時代もそうだと思うんですけど、ロックが台頭した'60年代があったし、ヒップホップが台頭した'80年代があって、その時にヒップホップ好きだけが集まってもそのシーンは台頭しないわけだし、ロック好きだけが集まっても今のロック・シーンはできてないわけです。最初は、周りがスゴいって言ってるから行ってみようっていうような気持ちから入ったら、衝撃を受けてファンになって。そうやっていつの時代も音楽のジャンルが盛り上がって定着していくと思うんです。日本のダンス・ミュージックのシーンはそれほど大きくはなかったんですけど、今はかなり若い人の層にもスゴく浸透してきてるし、ULTRAは未成年は入れないんですけど、10代に隠れたファン層がまだまだスゴくいるんです。この層ってSNSを使ってる人たちがスゴく多くて、世界の動向をスゴくチェックしている。今年20歳になって来れたっていう人たちがものスゴく多かったんです。あと、VVIPというVIPの上の特別なエリアを作ることによって、普段のフェスだったら、「汚れて無理」とか「年齢的に疲れちゃう」とかいう人たちが、高いお金を払ってるんですけど、優雅に過ごせる。今までフェスに来なかった層が来るようになって、年齢も、所得も、ジャンルも、幅広い層に来ていただきましたね。日本を支えるレベルの人たちが足を運んでくれたのはかなり大きかったですね。

KTR **ロックのシーンの方は、フェスの台頭がスゴいし、バンド主催のフェスもあるほどで、毎週のようにフェスがあるし、前は夏フェスだけだったのが、秋フェス、春フェスと、気づけば年がら年中フェスがあるんですけど、小橋さんから見るとどう感じますか？**

小橋　ロック・シーン単体で見たことがなかったのでわからないんですけど、フェスが増えてくるっていうのは、かなり前から感じてたことで。インターネットがこれだけ一般の層に広まった時に、マドンナがいち早くYouTubeで自分の歌を無料で公開して、逆にライヴに来てもらおうって動き始めましたよね。ライヴの時代の到来は当たり前の流れだと思ってて。日本は割と著作権の問題とかあって遅かったと思うんです。ULTRAを日本に持ってくる時は、宣伝チームを作って、SNSで「行きたい」と思わせたり、事前からつなげることによって、現実の生のライヴも楽しんでもらうっていうことをやりました。良くも悪くも、今はみんなが自分のチャンネルを持っているので、そこで何を表現するのかっていう中で、ライヴに行きたいだけじゃなく、実際にライヴに行ったものを人に伝えていくようになった。情報って、昔は一方通行で、アナログの時代は通の人につながりがないと、本当にいいフェスって行きにくかった。今は世界中のいろんなフェスにアクセスできるので、今までフェスに行かなかったような層も気軽に行くようになった。だからその分、フェスが増えていったのは、スゴく流れの中にあるのかなって思いますね。ただ、どこかで淘汰されてくると思うし、今はその本当の走りですね。ダンス・ミュージックのフェス・ムーブメントも、本当にこの3～4年のことなんですよ。Facebook、インスタ、ツイッターといった個人チャンネルが当たり前のように使えるようになったのも本当にこの3～4年。ロックは今はスゴくジャンル分けされてますけど、どこまでをロックっていうのかっていう部分もあると思うんです。例えば、コールドプレイがアヴィーチーと一緒に曲を作ったりとか。日本は今はまだハッキリ分かれちゃってる部分はありますけど。割とバンド・スタイルのダンス・ミュージックも来ているので。日本でももっと融合したら面白いのかなと思いますけど。海外のフェスでも、コーチェラとか、もうどっちのフェスかっていう感じじゃないですからね。日本でもフジロックは、今年はDeadmau5がメインで張ってたりして、もう垣根の部分はなくなってますね。僕は単純にダンス・ミュージックっていうのはテクノロジーの進化なのかなって思ってるんですよ。生音でしか作れなかった時代から、デジタルで音を作れるようになって、このモノの進化の中にダンス・ミュージックがあると思ってるので。

KTR **ロック・シーンの方が区分けしたがりますね。**

小橋　それはいつの時代にもあって、ヒップホップが出てきた時は、「ヒップホップは音楽じゃない」って言われてたし、その前のロックもフォークとかの人たちに、「不良の音楽だ」とか言われてましたよね。新しい音楽は、いつの時代も前の時代の人に否定されてきたんですよ。だから、ダンス・ミュージックが古くなった時にも、新しい音楽を「これ、音楽じゃない」っていうような論争はあるのかなって思いますね(笑)。

KTR **確かに。繰り返されてるんですね。**

小橋　ボブ・ディランもロックになった時に客から「金返せ」って言われたりしてるので。でも、当時はセルアウトって言われてても、後から見ると時代を引っ張ってたんですね。同じようなことが今も起こっていて、例えばティエストは、昔はトランスの神様とか言われてた人が今やEDMの人で、ある人からすれば、「セルアウトだ」って言われてしまう。でも若い人からすれば、若い人を引き上げていって新しいシーンをちゃんと残してくれてる。だから僕はULTRAがダンス・ミュージックに限らず、音楽に対する入り口になってくれたらと思いますね。あと、ULTRAをきっかけに海外に行く人もけっこう増えてるんですよ。3年前にマイアミのフェスに行くと、日本人は3～4人しか見かけなかったのが、今は300～400人見かけるようになった。韓国、シンガポールのフェスになると、1万人行くんですよ。きっかけはフェスであっても、チケット買ったり、向こうでホテルに泊まったり、いろんな人たちと会ったり、交流したりして、フェス以外のライフスタイルが変わっていくじゃないですか。そういう人生を変える何かきっかけになるものなのかなって思っていて。昔のロック・フェスのウッドストックにしても、当時はロックが好きじゃなくても、「何かスゲエ伝説だから行ってみようぜ」みたいな感じで行って、でもそこの入り口から入って、ライフスタイルが変わっていったり、あれを通過したから今社会でこういう地位にいます、みたいな人っているはずなんです。当時「あんなの」「こんなクソガキの不良の」とか言ってたのとたぶん同じようなところに、今の若い子たちのダンス・ミュージックってあると思ってて。だけど、入り口がないとその先もないので、僕らはその入り口のきっかけなのかなとは思ってるんですね。

KTR **ところで、小橋さんの音楽のルーツは何になるんですか？**

小橋　実はヒップホップなんですよね(笑)。僕が中学生の時、'80年代から'90年代って、ものスゴくヒップホップ・ムーブメントってあったじゃないですか。僕は海外のヒップホップのファッションから音楽がスゴく好きで。当時は芸能人もやってたので、ラジオのDJもやってたんですよ。5本ぐらい持ってる中で1本の自分の番組では、超マニアックなヒップホップをやってて。2パックが亡くなって、ギャングの抗争の話からレコード会社の抗争の話まで、タレントがやってるとは思えないようなラジオ番組で(笑)。それで、16歳の時に初めてNYに一人旅で行ったんですよ。僕の中では、ヒップホップの格好をしてる人たちはカッコいいと思ってたんです。実際、街中に行ったら、ヒップホップのカッコいい服を着てそうな人たちが、「お金をくれ」とか、浮浪者っぽい感じだったんです。お金をあげようとしたら、「そんなヤツらにあげちゃダメだよ。そいつらお金をもらってドラッグやるんだから」って。けっこうショックで。自分がカッコいいと思ってた人たちが、実はストリートの中の腐敗したカルチャーの中で育ってたり、良くも悪くもカッコいい人たちだけじゃないんだっていうことがわかって。もちろん当時の黒人差別とか背景にあったと思うし、その中から生まれてきた血の音楽というか、それを日本人が簡単にカッコつけて、俺のヒップホップがどうのこうのとか言っても違うなと思って。

KTR **ダンス・ミュージックとの出会いの方はどうだったんですか？**

小橋　当時から先輩に紛れて、クラブに行かせてもらってました。当時はディスコからの流れとヒップホップからの流れがあったから、ダンス・ミュージックに垣根はなかったですね。ヒップホップとハウスとで箱もそれほど分かれてなかったし。GOLDの時代からの流れでGOLDを仕切ってた佐藤さんを筆頭に(DJ)EMMA君たちが僕のローカルの先輩なんですよ。僕は一番年下だったんです。あの時代の遊び場にリアルタイムで行かさせてもらったので、いろいろ聴いてましたね。10代の頃から、事務所には「行くな」って言われながらも、こそこそ隠れてクラブには割と行ってた方なんですよ。当時のクラブとかストリートの世界って、少し最先端があったんです。今みたいにインターネットもないし、そこに行かなければわからない情報とか、そこに行ってる人たちの遊び方の面白さとか、考え方とか哲学とか、いろんなものをその場で学べたので、今あるクラブのあり方とは違って、本当に社交場で、今はもうそういうのがないじゃないですか。当時は50代から10代までが混ざって遊んでましたからね。

ULTRA JAPAN http://ultrajapan.jp
JAPAN MUSIC SYSTEM www.jms1.jp

THE NATURAL WAY

NATURAL AMERICAN SPIRIT COLUMN / Vol.16 /

最高の喫煙体験を音楽フェスで

タバコに対するこだわり。それは喫煙を楽しむことだけじゃない。無添加タバコのナチュラル アメリカン スピリットを製造・販売するサンタフェ ナチュラルタバコ カンパニーのヴィジョン、フィロソフィーを知った時に、そのこだわりと情熱に驚かされた。タバコを楽しむこと。それはカルチャーであり、地球という環境との関わりがないと成り立たないものなのだ。今回のナチュラル アメリカン スピリットの連載は、サンタフェ ナチュラルタバコ ジャパンが協賛している音楽フェスのお話。

音楽フェス。日常と異なるリラックスした環境の中でアメスピをゆったりと喫煙していただくには最良の場所です。いろいろな音楽フェスに協賛しているアメスピ。音楽フェスは、単なるサンプリングや製品理解の場としてだけではなく、サステナブルな素材を使用した各種ツールや、フェスで回収したすべての吸い殻をテラサイクルの吸い殻リサイクルに活用するなど、アメスピの理念をお客さんに体験・理解してもらう大切な機会でもあります。

実際にアメスピが音楽フェスで何をしているのかと言うと、たばこのサンプリングになります。単純に1パックを渡すのではなく、アメスピを1本、ブースの中で試煙してもらいながら、アメスピクルーとの対話の中で、アメスピのことを深く理解してもらって、残りの19本を渡しています。

今年の6月の行われたフェス「頂 -ITADAKI-」からは、「最高の喫煙体験」をテーマにサンプリングを行っています。タバコが農作物であり、大地の恵みであることを実感して味わっていただくこと。そのことをお客さんに体験してもらいながら、アメスピを吸ってもらうタイミングを、最高の喫煙体験にしてもらえるようにしています。

ブースのデザインもアメスピらしく、テント屋根のターコイズカラーや、ウインドブレーカーをリユースしたブースサイン、サステナ素材を使用したプランターパーテーションや拝み看板などがあり、タバコ栽培の風景をプリントしたメッシュ素材の幕や、栽培をイメージさせる植物などで。最高の喫煙体験をデコレーションしています。

2015年の協賛イベント

こだわりのお客さんが多く、ゴミの分別やクリーンエネルギーの使用など、サステナブルな活動を実施しているフェスを優先的に選んで協賛しています。

GREENROOM FESTIVAL / TAICOCLUB / 頂 -ITADAKI- / 京都大作戦 / DEAD POP FESTiVAL / HIGHEST MOUNTAIN / The Do-Over Tokyo / BAYCAMP / Sunset Live / NEW ACOUSTIC CAMP / 京都音楽博覧会 / 中津川 THE SOLAR BUDOKAN / 朝霧JAM

アメスピクルーからの説明の最後に「いただきます」とみんなで感謝。大地の恵みを味わいます

椅子はオイル缶をリサイクル

普段からアメスピを吸っていただいている方には、オリジナルノベルティのプレゼント

プランターパーテーションはトタンをリサイクル

ガラス・アートもリサイクル

ナンバープレートのリサイクル

アーティストの演奏が終わって空き時間になるとけっこう混んできます

このバナーはジャンパーをリサイクル

ブースでお渡ししているもの

好きなアメスピ1パック
オリジナルマッチ1個と携帯吸い殻入れを封入したネックホルダー
携帯アンケートにご協力いただければライターか携帯灰皿
さらにサイコロを使った抽選で当たるとオリジナルQUOカード
普段からアメスピを吸っていただいている方には、
廃タイヤリサイクルライターや扇子などの
オリジナルノベルティをプレゼント

サンタフェ ナチュラルタバコ ジャパン株式会社
0120-40-6711 amespi.jp

ANOTHER STATE OF MIND

- discover something you will never know -

NAVIGATED BY RYO (CRYSTAL LAKE)

Crystal Lakeのヴォーカリストであるryoとfljのコラボ企画。「いろいろな場所で新しい自分を見つける」をコンセプトに、ファッションやロケーションにこだわり、毎回新しいryoを見せていきます。

Crystal Lake
crystallake.jp

コート ¥42,984 JOYRICH（JOYRCH Laforet Harajuku）　JOYRCH Laforet Harajuku　03-6447-2160

REBIRTH OF HARD CORE PRIDE 2

FLJ PRESENTS

supported by ZOZOTOWN

上段+下段左: ゴリラ・ビスケッツ

’80年代後半NYハードコアを代表するバンド、ゴリラ・ビスケッツ（以下、ゴリビス）。2006年に再結成、2008年に初来日してから、7年振りとなる二度目の来日を果たした。2008年の時もFLJ企画で「REBIRTH OF HARDCORE PRIDE」が行われたが、今回もその第2弾ということで、ツアーの初日、9月19日に「REBIRTH OF HARDCORE PRIDE 2」が渋谷のTSUTAYA O-NESTで行われた。

今回ゴリビスを迎え撃つ日本のハードコア・バンドは、DIE BIRTH、ENDZWECK、NUMB、Stand United。これに加えて、5年振りに復活したNO CHOICE IN THIS MATTERの出演も決定。また、2008年の「REBIRTH OF HARDCORE PRIDE」ではSWITCH STYLEが一夜限りの再結成をしたが、今回は再来日をお祝いしてZOZOTOWNのサポートが決定。ZOZOTOWNを運営するのは株式会社START TODAYで、その社名の由来となったのがゴリビスの名曲。そんなつながりもあって、この日はゴリビスをサポート。当日は特設エリアを設けて、シャンペン・ガールズが祝い酒を振る舞ったり、昔のファンジンやカセットテープやレコードを展示したりと、会場を盛り上げてくれた。　この日のメインのライヴの方も、初っ端からモッシュ、ダイヴで盛り上がり、どのバンドもMCで、ハードコアに対する愛情や夢、昔好きだったゴリビスと共演できる感慨深さについて語っていたのが印象的だった。ゴリビスの方も、1曲目の「New Direction」のファンファーレをFAKE COUNTのNARITAが担当して、もうこれだけですでに大盛り上がり。そのまま名曲の数々をCIVの曲も交えながら次々と披露。ラストの曲は当然「Start Today」。即ソールドアウトとなったこの日のライヴは、昔からの仲間も新しいハードコア・ファンもたくさん集まった貴重な一日となった。F

2015.09.19 SAT　TSUTAYA O-NEST

GORILLA BISCUITS /
STAND UNITED / NO CHOICE IN THIS MATTER / NUMB / DIE BIRTH / ENDZWECK

NO CHOICE IN THIS MATTER

「New Direction」のファンファーレでスタート

STAND UNITED

DIE BIRTH

START TODAYのマーチ

ENDZWECK

YO!

NUMB

DOC. P。NO CHOICE IN THIS MATTERのマーチ、即完でした

シャンペン・ガールズのゆみか&まきとSENTA(NUMB)

この後、IN MY EYESのカセットをゲットした宇宙（ENDZWECK）

Deviluse EXCLAIM episode1

2015.11.16.Mon Harajuku Astro Hall

SWANKY DANK

SiM

FACT

Deviluseが主催するライヴ・イベント、Deviluse EXCLAIM episode1が11月16日に開催された。会場となったのは、ブランドのフラッグショップもある原宿のアストロホール。これまでにも国内外のバンドのサポートや様々なライヴ会場での出展など、音楽と密接なリンクをしてきたブランドだが、16年目にして初のイベント主催っていうのは意外や意外。出演する3バンドも、当日になるまで誰が出るのかわからないシークレットだという。

当日はDeviluseのAiちゃんによる注意事項の説明からスタート。ステージ上のスクリーンにSWANKY DANKのインタビュー映像が映し出された後、幕が開けて演奏が始まった。「misery」から勢いあるステージが始まり、「Monster」ではCrystal LakeのRyoも登場。「Sink Like a Stone」では「デビル、デビル、マック、マック（Deviluseのデザイナー）」の掛け合いも最高。ラストの「Listen to the Radio」まで楽しくも熱いライヴを見せてくれた。

続くSiMも、同じくインタビュー映像の後に登場。「Get Up, Get Up」からスゴいテンション。「Deviluseがずっと続くようにこの曲を贈ります」と「EXiSTENCE」を披露。さらに「今日でFACTと対バンするのは最後だから」と、FACTの「a fact of life」を演奏し始めるも、「練習してません（笑）」とイントロだけで終わり。演奏をやり直した「Blah Blah Blah」からラストの「f.a.i.t.h.」まで熱かった。

最後はFACTの登場。この日が終われば11月20日のROCK-O-RAMAが最後のライヴになってしまう。FACTもDeviluseも1999年スタートで、2006年のBullion Tourでのダブルネームtシャツからの長い付き合いで、メンバー一人ひとりのダブルネームも出したこともある密接な仲。「Pressure」から始まったライヴはとにかく最強。ヴォーカルのヒロが「第1回目からこんなスゴいのを呼んで大丈夫？ 2回目に出るバンドはプレッシャーだよ。あ、またSWANKYとSiMが出ればいいのか」とMCで言うと、お客さんは「FACTも!!」と熱い。ちょっと寂しい湿っぽい気持ちもあったんだろうけど、そんなのを吹き飛ばすほどこの日のFACTは強力だった。ラストの「a fact of life」まで最高にボルテージが上がりっぱなしで、アンコールが止まない中、FACTはステージを去った。

音楽とファッションの架け橋をしてきたDeviluse。それぞれのバンドがDeviluseとともにカルチャーを作ってきたし、この日はお互いの関わりを言葉にして、音楽の感動を与えてくれた。そして何よりもこの日のお客さんはみんなが最高に楽しんで笑顔だったことも印象的だった。F

DEVILUSE
www.deviluse.com

史上初！ ハイネケンが宇宙からセルフィーを撮影！

ジェームズ・ボンドフィルムの新作『007 SPECTRE』とのコラボレーションボトル・缶の発売を記念して、ハイネケンが世界初の宇宙からのセルフィー撮影のイベントを開催。「Spyfie」と名付けられたこの宇宙からのセルフィーは、地球上空 600km を周回する高画質の衛星カメラ Deimos-2 と、それに搭載されたウルトラ HD のビデオカメラ Iris にて、国際宇宙ステーションから撮影されるというもの。11 月某日、米ネバダ州ラスベガス近郊にあるフーバーダムに世界中から招待された 200 人のゲストが集まり、『007 SPECTRE』に悪役 Mr.HINX として出演した、元 WWE のプロレスラーのデイヴ・バウティスタを迎えて行われた。

GINZA MUSIC BAR

音楽プロデューサーの小林武史、大沢伸一、そして、コーヒープロデューサーの鳥羽伸博が手がける、東京銀座で唯一本格的に音楽を聴かせるバー、GINZA MUSIC BAR が 1 周年を迎えた。パリのサロンを思わせるような店内には、3000 枚を超えるアナログレコードがラインナップ。また、サウンドはタンノイやマッキントッシュを中心とするハイエンドなシステムを採用。12 月 1 日（火）は一晩中なつかしの歌謡曲がかかる " 歌謡ナイト”、12 月 17 日（木）はマイティクラウンの COJIE がレゲエだけでなく、ジャズやファンクをプレイするイベント、12 月 28 日（月）は沖野修也のジャズセットをプレイする "MISSION" を開催。他にもレジェンド DJ たちがプレイするイベントが予定されているので、詳しくはウェブサイトをチェック！

ginzamusicbar.com

F L J
NEXT ISSUE 46
WILL BE OUT ON
JANUARY 30, 2016
WE'RE THE CREW
クルー特集
WWW.FLJTOKYO.COM
Thank you. See you in a couple of months!
FLJ第46号は、1/30（土）発行です。

MOTOR CITY BURNING

FUCT®
NEUTRON INC. 03-5785-4672 www.uniforme.co.jp

#45

ISSUE FORTY FIVE
JANUARY 2016

PRODUCED BY
TOSHIYA OHNO

FLJ

FREE

FILTH × LIBERTINE × JUSTICE
MUSIC / FASHION
CULTURE / ART MAGAZINE
FROM TOKYO

CRYSTAL LAKE

FLJ ISSUE #45 JANUARY 2016 エフエルジェイ（フィルス・リバティーン・アンド・ジャスティス）1月号 第8巻 第3号 通巻45号 2016年1月1日発行（偶月奇数月30日発行）
Editor-in-Chief : Toshiya Ohno 発行人 Publishers : Tatsuo Sugai, Shiro Akiyama 編集／発行：DRAGON ZOE LLC. 〒107-0062 東京都港区南青山3-2-13
3-2-13 Minami-Aoyama, Minato-ku, Tokyo 107-0062 Japan TEL : 03-3408-2582 www.FLJtokyo.com 印刷：図書印刷株式会社 Printed in Japan

定価：FREE